
桃太郎 絶鬼神光臨篇

すずね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃太郎 絶鬼神光臨篇

【Nコード】

N1561M

【作者名】

すずね

【あらすじ】

鬼を倒すためだけに育てられた桃真は伊月と出会い、鬼退治に立つ。鬼に一族を滅ぼされた伊月、旅で出会った永紅にとっては復讐になるのだが、桃真は、自分より先に旅立ち戻って来ない姉三人が気になってしかたなかった。顔も見たことのない姉たちなのに、どうしても会いたい。家族愛を、今になって欲するようになってしまった……それなのに、出会ったのは女ばかり、女難の相に滅入る桃真は……。

桃太郎です。

序章：生誕す

昔々、ある小さな村におじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんとおばあさんは子が授からなかったので、養子を迎え入れては立派に育て上げ、子供たちは大きくなると巣立っていきました。

ある日、おじいさんは山へ狩りに、おばあさんは川に仕掛けた網を見に行きました。

すると網には多くの魚と、大きな桃が掛かっていた。

思わぬ収穫におばあさんは大喜び。魚と一緒に桃を持ち帰り、今夜にでも食べようと台所に置いていました。

「うむ。たわわに実った大きな桃だ。どれ、早速食べようではないか」

食事を終えたあと、おじいさんはうれしそうに桃に包丁を入れた。そのとき、切り口からまばゆい光が放たれ、おじいさんとおばあさんはすばやく一步を引いた。

光が消えたとき、目の前の桃は消えており、大きな産声を上げる男の赤子がいた。

「なんと！ これは神さまのお恵みだ」

今はもう巣立ち、子供のいなかったこの家で、新しい命が誕生したことは、桃から人が生まれた奇怪さを忘れさせるほどの喜びだった。

「おじいさん、名前を決めませんか……」

布に赤子を抱き、うつすらと涙を浮かべて、柔らかい頬に触れて喜ぶおばあさん。

「そうだな。しかし、我が暗殺者一族に桃から生まれた男の子か……」

…。陰ノ身・桃真・諫之神、というのはどうか？」

「桃真・諫之神……神の戒め、親への忠告、我々を越える存在としての希望ですね」

「この子なら、今まで鬼に挑んできたわが子たちとは逸する存在となるだろう」

……。そう、このおじいさんとおばあさんは暗殺者であり、この国を脅かす鬼を倒すために養子を受け入れ、育ててきた。

他者からはやさしい老夫婦でしかないが、今でも人一人、証拠を残さず暗殺できる技術を持つ。

おじいさんとおばあさんは、一流の暗殺者であった。

「お前は鬼を倒すためにわしらに育てられる。そして帰ってこない三人の姉の仇を討つのだ……」

たった一つの願いを込めて、おじいさんは桃真の頭を撫でた。

第一章：出会う

十六度目の春だ。

陰ノ身家に通じる暗殺術を会得した桃真は、おじいさんとおばあさんが育ててきた今までの子とは違い、まるでその者を倒すために生まれてきたような逸材であった。

一つの技から新しい技を生み出し、一つの武具から新しい使い方を見つけ、ただ教えられるだけではなく、それを完全に自分のものにしていった。

それは諫之神として、親に対し、自分は危険な存在だという忠告しているようで、おじいさんは桃真を怖いと感じることもしばしばあった。

「お前はわしが育ててきた子供たちとは大きく違う。出生からそうだが、その力は特異すぎる」

山の中で、おじいさんは桃真に戦いを教えていた。その中で、ふとした恐怖が表面化し、桃真にそんなことを言ってみる。

桃真は鬼に対抗できる力を持っている。

「お前の“吸魂”の力は最大の武器となる」

「僕には、あまりその自覚がない」

栗色の綺麗な長い髪を赤い紐で結い、袖無しの羽織平姿の桃真は、自分で作り、神刃と名を付けた手裏剣を投げる。

鋭く、刃の部分が広い神刃は、桃真が一から作った新しい武器だ。「魂を吸収し、その力でこの世ならざる者を呼び出す……戦力になる」

「僕は鬼を見たこともない。だから、僕の力が鬼に対抗できるかも知らない」

桃真の悪いところは、見たもの以外は信じないという、現実主義者であるところ。自身が桃から生まれたことすらも信じていないし、己の力にも疑問を抱いている。

「お前の悪いところだ。噂は信じなくてもいいが、己くらいは信じる。お前には力がある」

「魂を吸収し、この世ならざる者を呼ぶことはできる。……死者の魂を扱う自分が嫌なんですよ」

そう言つて手裏剣を投げる。

指の間に挟んだ三本の手裏剣は、各々違う軌道を描いて目標の木に命中する。

「鬼に殺された人の魂がお前を求めているのだ。強い体を得て、鬼を倒したいと……」

杖を振るうおじいさんに死者の声は聞こえないし、気持ちは分からないが、桃真は頷いた。

桃真には死者の声が聞こえるだけでなく、死んだ者の魂に肉体を与えて戦わせることのできる。

さらに、魂を吸収し、桃真自身の体を強化して特殊な能力を与える力を持っている。

それは鬼に殺され、無念の死を迎えた者の声であり、願ひだった。鬼を殺したい、戦いたい、恨みを晴らせてくれと、桃真は悲痛の声を聞いてきた。

最初は声だけだったが、桃真が物心つく頃には力を発揮できるようになった。

そしてついに、死者の魂を吸収し、具現化することができた。

小さい頃から鬼を倒すためだけに育てられ、訓練されてきた桃真には、確かにありがたい能力であった。

「考えると腕が鈍る。帰るぞ、ばあさんが夕食を用意していることだろう」

「そうですね」

木に刺さった手裏剣が抜き、腰に帯びる。

「手裏剣など、一、二本持っていれば十分だ」

元々は逃走などに使う武器だ。何本も持つ必要はない。

「それよりも己の力を磨け」

おじいさんは、桃真にとっては父であるが、それ以上に、戦いを教えてくれる師匠という印象の方が強い。

杖を持つが肉体に衰えは見えず、飛ぶように山を下りていくおじいさんに、桃真は敬意を払う。

山を下り、夕日の中を人など通ることのない河原を歩いているとおじいさんが立ち止まった。

片手を上げて姿勢を低くする。

杖の仕込み刀をゆっくりと居合いの構えにするのを見て、桃真も脇差しを軽く握った。

「なんじゃ……よく見えぬ」

視力は衰えたかもしれない。桃真はそんなことを考えながら目を細める。

すぐ側の茂みに気配を感じる。

かさかさと音がして、何か動いている。が、見えない。

……速い。

茂みから出て、たたたたと接近してきたとき、おじいさんより先に桃真が動いた。それは身に染みた戦闘術がなせる反射的な動きであつたがために、相手などよく見ていない。

脇差しの一閃で仕留めようとしたとき、

「待て！」

おじいさんが制止した直後、何かが桃真に飛びついた。

「なんだ？ 誰だ？」

飛びついたのは女の子のようだったが、おじいさんは、

「犬じゃ」

「犬？ これが……いぬ？」

いや、どう見ても女の子だ。

長い髪を束ね、綺麗な瞳に可愛らしく顔、柔らかい肌……どこをどう見たら犬のだらうと思ったとき、

「耳と尾があるじゃろう」

確かに、頭には耳がある。腰には尾がある。

十六年間ここに住んでいるが、こんな犬は始めて見た。

「なんじゃ、知らんのか？ 犬神だ。いぬがみ餌をやるなよ、懐かれるとついてくるからな」

「犬神！？」

馬鹿な、神さまがこんなにも近くにいるなど……しかも唐突に現れて襲われた。

おじいさんはさっさと戻って来いと言い残し、先に行ってしまう。しがみついて離れない犬神から助けてほしかった桃真だが、それを言う前に犬神に拘束された。

それに懐かれるなど言うが、もう遅い。

胸に頬を当てて、何度もこすりつけてくる。

その行為が、愛らしくも淫らしい感じがする。

わかった、この雌犬、盛っている。

尾を振る犬神はうるうると涙をなじませ、桃真を見つめる。

青眼で、年は十三、五才といったところだろうが、神様なのだから、もっと上のはずだ。上等な羽織を着て、腰からは奇妙にも尾が生えていてしきりに振り続けている。また、頭の耳はぴんと伸びて、何かを欲しているような表情を浮かべている。

正直、今までずつとおじいさんとおばあさんと暮らしてきたから、同姓の同年とは話せるも、女の子に対しての免疫のない桃真は、とろんとした目を向けるこの犬神の女の子をどう扱っていいのかわからず、無駄に興奮した。

「のう、お前が妾の願い叶えてくれるなら、妾はお前に力を貸すぞ？ どうじゃ？」

「願い？ なんのことだ？」

「わかつておるだろうが？ この時期に入ると体が火照る。一人でするのは寂しい……」

かぶつと首筋を甘噛みされたとき、どうしようもない感情に襲われた。それが愛情なのか、諦めなのかは桃真にわからない、初めての感覚だった。

「ここら辺では若い者はお前だけだ」

耳元で囁かれた。

桃真はこのとき、おじいさんに教えられた、拷問の耐える術を思い出した。

それが意外にも効果を発揮させ、犬神の声や仕草に反応することになくなった、と思っていたら、

「おぬし……女を知らぬのじゃな？」

かつと顔を真つ赤にした桃真は、こちらを見る犬神と目を合わせまいと明後日の方向を見る。

「心配するな、妾がすべて教えてやる……」

……拷問に耐える術は無効化された。

「桃真、餌をやるなど言っただろう」

犬神を連れて帰った桃真は、天国と地獄の両方を見てきたような顔をしていたが、傍らにいる犬神は満足そうな顔をしている上に、桃真と腕を組んで離れようとしなない。

「いやいや、妾は桃真なる青年と契りを交わした。桃真は妾の願いを叶えてくれた、今度は妾が桃真の願いを叶える番じゃ」

笑みを浮かべて話す犬神だが、桃真は魂を抜かれたような顔をしていて、はっと何かに気づいたおじいさんは、持っていた杯を桃真の股間に当てた。

「おっ!？」

「そんなことで腑抜けておるな!」

湯を入れた桃真は、目の前に広がっていた桃源郷が一瞬にして消え、いつも通りの表情に戻った。

「ご老体、妾の婿になるやもしれぬ男にその仕打ちは……」

そう言っつて、犬神は桃真の股間を撫でてやった。

「やめろ!」

また顔を赤くする桃真。

久しぶりに感情的なつた桃真を見て、おじいさんはにこり笑い、

「明日は赤飯ですね」

と、おばあさんが言う。

「昔から比べたら犬神も減った。地の守護神が消えたおかげで、向
ここの村では不作続きじゃ」

伊月いつきというのが、ここ周辺の村の地を統べる犬神、目の前にいる
女の子の名前だ。

伊月は、不埒ながらも桃真と関係を持ったが、前々から桃真には
興味があつたという。

というのも、おじいさんが桃真は鬼を倒すと騒いでいたからだそ
うだ。

「桃真よ、お前に人間にはない力を持っている。神さえ恐れる力だ。
その力があれば鬼も倒せよう。妾はそれに協力してやろう。まあ、
契約じゃからのう」

あぐらをかき、酒を飲み、あははははと大声で笑う伊月に、
桃真はもう何の関心もなかった。一時の感情とはいえ、あんなこと
をしてしまった自分に嫌悪感はあるが、それももうすぐ消える。

夜の闇は桃真を孤独にはしなかった。

こつやって騒いでいても、冷たく死の臭いを感じさせる死者の声
が聞こえ、桃真に願いをぶつけてくる。

苦痛ではないが、悲しい。

杯を持ったまま、桃真がうつむいたのを見た伊月は、

「願いを叶えてやれ」

心を読まれたのか、伊月の言葉は桃真の深く刻み込まれた。

「願いを叶えてやりたいと思う。自分の力が人のためになるのなら
使ってみたい」

「うむ、では明日にでも行こう」

ぽんと膝を叩く伊月は、桃真に酒を注ぐ。

「なにが？」

「鬼退治じゃ。明日、出立する」

「明日！？」

が、おじいさんもおばあさんも驚かない。二人とも、そろそろ桃真に鬼退治の話を持ちかけようとしていたのだった。

「吸魂の力を持つお前なら、我ら犬神一族、他の一族の恨みもはらしくれよう」

ははつと寂しく短い笑いに、桃真は、ああ、そうか、この世はそれほどの危機を迎えているのかと、自分が狭い視野でしか世界を見ていなかったことに気づいた。

「そうか、鬼退治だな。僕はそのために育てられた。そのための力かもしれない」

握り拳を作り、火に照らされ、哀愁漂う桃真の顔に、伊月は素で惹かれた。この男なら頼りなる。伊月にとって、人間の男に惚れるなど驚くべきことだった。

「……決まりじゃ。桃真よ、死んでも悔いが残らぬよう、今日は好きだけ妾を抱け！」

大声で笑うおじいさんとおばあさんに対し、桃真は気分が冷めてしまい、風呂に入ると居間を後にした。

「むう……初^{うい}い奴じゃ」

その貳

……まさか、本当に鬼退治に行くとは思っていなかった。

実際に鬼を見たこともないし、戦い方だって知らない。鬼退治に行った三人の姉は帰ってこない。鬼がどれほど強いのか見当もつかないが、自分が死ぬとは思えない。

死者が、鬼がどういう存在かを教えてくれる。

小さくとも身の丈は桃真二人分、大きい鬼は家を踏みつぶすという。抵抗して戦おうとした者もいたが、無念にも散った。だからこそ鬼に対して恨みを持つのだ、だからこそ桃真に託すのだ。

我々は戦う。そのために魂が必要なら、我々の魂、好きなだけ使え！

強い言葉に喚起されたと言えばそうだが、何より、伊月の言葉以外にも響いている。

一族の恨み……現に多くの人が死に、神さまさえ殺されている。もしも自分に鬼を倒すことができれば、世界は恐怖から救われる。

これはただ正義に目覚めたわけではない。

帰ってこない三人の姉……死んでいるのなら声が聞こえてもいいのに、今まで一度も聞いたことがない。だから、生きているのかもしれない。

桃真は、そんな希望を持っていた。

「なにを一人で考えている！」

がらつと戸を開けて入ってきたのは、一糸まとわぬ姿の伊月だった。

「なっ、なんだ、風呂なら一人で入れ」

「なにを照れる？ 今更恥ずかしがることもなかるうに」

背を向けようとした桃真であったが、一瞬、伊月の姿に見取れてしまった。

白く綺麗な肌、体型は子供であるが、表情には女としての魅力を

持ち、胸は申し訳なさそうに膨らみ、腹は括れができています。

桃真には十分魅力的だった。

「恥ずかしいだろう」

やっとのことで背を向ける桃真だが、伊月は桶で頭からお湯を浴びて風呂に入る。

「お主は妾の夫になる気はないか？」

「なにをいきなり……会って日を過ぎぬというのに、契りなど結べるか」

伊月はくすつと笑みを浮かべ、大きな背中の桃真を抱き、胸をぴたりと当てた。

ぞくつと身を震わせた桃真であつたが、なんだか、そこには暖かさがあつた。先ほどとは違い、伊月に懐かしい暖かさを感じた。

ただ、その懐かしさがなにかはわからない。

「聞いたぞ？ 桃から生まれたから桃真という名らしいな？」

「……馬鹿な話だ。桃から生まれるわけがない」

落ち着いた桃真は、伊月から離れ、湯船から手を出して湯気の逃げていく窓を見る。

「そんなことはあるまい。妾は無花果から生まれたと言われたぞ？」

桃真の隣に移動した伊月は、ぴくぴくと耳を揺らす。

「無花果から？ 何の洒落か、僕にはわからない」

「大地から生まれた、ということじゃ。もしかしたら、お前も何かの神かもしれないな」

「僕が神なら、鬼を皆殺しにしている」

「それもよからう……しかし、お主はどう見ても人間じゃ。ここは他の男は違って、立派だったぞ？」

ずっと触れてみせると、桃真はひどく焦り「や、やめる！」と、ばしやばしやと暴れるが、おもしろくなつた伊月は正面から桃真に抱きつき、両手を首に回して、鼻先がつくくらい近くで、

「なんじゃ？ 妾が嫌いか？」

先ほどと同じだ。拷問に耐えられる自信がない。

第一、こんな拷問に耐える術は習っていない。

だからといって抵抗しないわけではない。

「そういうわけではない。場所を考える」

これが精一杯の抵抗だった。

「床の上ならいいのか？　なんとも女々しいのう、男なら獣になってみる」

濡れた髪、頬、体……それにきりつと怒ったような眼差しは、また別の意味で美しかった。

「僕は、いけないことをしている気がする……」

目を反らす。

「容姿が問題か？」

耳が垂れた。

確かに、問題大ありだ。

自分も子供だが、伊月はもつと子供だ。それに相手は犬神……神さまだ。人間とは違う、犬の耳に尾を持つ。

その部分を桃真は、なんとなく可愛いと思った。

「それもある。第一、明日に出立するというのに……」

「楽しいことは嫌いか？」

軽く接吻され、抵抗はむなく打ちのめされた。

自分は弱い存在かもしれないと垣間見た瞬間だった。

……代わりに桃源郷を見た。

「……」

「腑抜け顔じゃのお？　せつかく布団を一枚にしてもらったというのに」

月明かりが眩しい、眠れそうにない。

障子越しに射す光は一枚の布団に寝る桃真と伊月を照らす。

どうしてこうなったのか、布団を敷いたおばあさんに聞いてみた

い。

布団の中で何度も伊月から離れようとしたが、結局はしがみつかれた。

あきらめて、天井を見ながら、

「……鬼を、見たことが？」

突然の問いに、手を伸ばし掛けた伊月は動きを止めた。

「んっ？ おお、見たことあるぞ」

「どうだった？」

雰囲気が静かになった伊月は、うつ伏せになり、障子の向こうの月を見ながら、

「一族全員で戦った。神狼じんろうの眷属である妾たちだが、鬼は強大だ。数で劣るし、はじめから力負けしていた」

「全滅か？」

「見ろ、妾は生きている。妾を含めて何人かが生き残った。それぞれ離れて暮らした。妾はこの土地が好きだった」

「そんな鬼を倒せるのか、僕は不安だ」

「なにを言う？ そんなんでは勝てぬぞ？ それにな、妾はお主なら勝てると思うて協力しているのだ」

「欲求の果てを僕にぶつけておいて？」

自分の言ったことに恥ずかしくなり、桃真は伊月に背を向けた。伊月にはそれがたまらなく母性本能をくすぐった。可愛い奴だと、いじめたくなつたのかもしれない。

「発情期ならば仕方あるまい。嫌ではなかつた？」

不適な笑みを浮かべ、桃真の肩に触れる伊月は、細身だと思っていたが、意外にも筋肉のある体だと知った……二回も抱き合つたというのに。

「お主は鬼を倒せる。お前は一人ではない。吸魂の力があるではないか？ 軍勢となりて鬼を討て、鬼神となつて鬼を斬れ」

ぐつと肩を掴まれたとき、伊月の気持ちが素直に伝わってきたようだった。

一族をばらばらにし、この世を混沌に陥れる鬼を倒してくれ。鬼はこの世に生きるすべての敵だ。

そしてまた、死者の声が聞こえた。

鬼は、本当に悪なのだ……。

鬼に苦しむ人々のために戦う。力を持つ自分を、おじいさんとおばあさんはこのときのために育ててきた。

決心したとき、伊月の手を優しく握ってやり、気持ちを伝えた。伝えたつもりだった。

が……、

「しかし、お主は本当にいい男だ……」

背中から抱きつかれても抵抗しようと思わなかったのは、桃真はもう、この犬神に取り憑かれていると観念したからだ。

「……明日まで生きていれば、僕は鬼を倒せるだろう」
なぜだか自信が出てきた。

「妾は一生お主の元にいってもいいぞ？ うん？」
それだけは勘弁だった。

第二章：出立す

朝早くに起きて、おばあさんと一緒に荷をそろえた。まるで今日出発するのを予期していたかのような手際の良さと、旅に必要な品が揃っていた。

「お前は自分で刀を作ったようだが、これは銭別だ。持って行け」
「これは？」

桃真の身の丈と同じくらいの長さ、柄には赤い帯が巻かれており、鍔が小さい刀。

鞘には文字が彫られており、

「毘沙門刀」

桃真は、昔おじいさんが話してくれたことを思い出した。

「その昔、鬼に恐怖を与えた侍がいた。その男が帯刀していたのが毘沙門刀だ」

鞘から抜かれた毘沙門刀は、黒く鈍い光を放ち、きいんとち小さな音を立てて振動した。

「鞘に戻せ！ 頭が痛くなる音じゃ！」

頭の両耳を押さえて、大声を上げる伊月に、これは役に立つと桃真は感心した。

「鬼を斬るための刀として生み出されたと言われている。なぜわしがつっていたのかなど聞くな」

どうやらこの刀には特別な力があるのだろう。伊月は刀に興味があっても触れようとはしない。

「ありがとう、必ず倒してみせる」

「これも持って行け」

台所からおばあさんが出てきて、小さな袋を手渡した。開けてみると丸い何かが入っていた。

「昼飯？」

「吉備団子じゃ」

「なんでまた吉備団子なんじゃ？」

ひょいとおまみ食いした伊月に、おばあさんはあつと声を上げた。
「それは惚れ草が練り込んである。何かあったときに使えと思うて

……」

「惚れ草など……なにに使う？」

異性であればどんな相手でも一口にて惚れさせる能力を持ち、この辺りの崖にしか咲かない貴重な薬草なのだが、この吉備団子の数からしてどれほどの惚れ草が使われたのか、見当も付かない。

「暗殺術にて紅がよく使う。相手を魅了するときに」

などと説明するおじいさんだが、桃真が察するに、このおじいさんもこれを食べたことがあるのだろう。

「しかしなんじゃ、妾は別に変わらぬぞ？ 時間が掛かるのか？」

桃真を見て言う伊月に、当人は目をそらした。

「それはお前さんが、すでに桃真に惚れておるからじゃよ」

くすくすと笑うおばあさんは、やっぱり赤飯にしておいてよかったと言った。

「なんじゃ、やはり妾とお前は夫婦になるしかあるまい？ のう？」

嬉しそうに尾をぱたぱたと振る伊月は、桃真の腕に身体をぴたりとくっついて上目遣いで見てきた。

「だが犬はいらん」

真顔で言うおじいさんに、桃真は、やはり最後まで味方だったと感動した。

「番犬としては優秀じゃろう？ それに妾がいればこの辺りは豊作続き、この男に変な虫が付くこともあるまい。のう？」

「……一応、考えておくよ」

下手に断りでもすれば口論になる。出立の日にもめ事は勘弁だ。

おばあさんの作った赤飯を、桃真は疑問を抱きながら食べた。伊月はめでたいと言って赤飯を食べたが、なにがめでたいのか理解しかねる。

「鬼は北の北、鬼ヶ島に住むという。道中遭遇することも多くなる

だろうが、まあ、一度北行け、あそこは小鬼が多いという」

小鬼の意味が違うぞ。

どうしてまたこんなにも緊張感がないのだろうか。伊月もそうだが、おじいさんもおばあさんも嬉しそうだ。

その答えを、伊月は茶を飲みながら言った。

「桃真なら鬼を皆殺しだ。これでこの世は平和になるのう」

……馬鹿な、どうしてそこまで過大評価できる？ 僕の力を見たことがあるとでも言うのか？ 魂を吸収し、己自身を鬼神のごとく変化させることも、魂を集中し、足軽の軍勢を作ることでもできるが、正直、その力だけで鬼を倒せるとは思えない。

笑顔の三人を見て、桃真は手をふるわせながら茶を啜^{すす}った。

そして……、

「わしから言えるのは、嫁はおしとやかな人にしろ。女暗殺者や犬っころは駄目だ」

玄関に出て、旅立とうとしたとき、おばあさんと伊月の両方に殴られた。

「……わしが言えるのはそれだけだ」

……おじいさんをこんなにもしろいと思ったのは初めてだ。

「いいかい、危ないときは逃げる。何度でも機会はある。死ぬんじゃないよ」

おじいさんとおばあさんと抱擁を交わす桃真は、

「もう、安らかに眠っていいよ」

「ありがとう……桃真」

すると、おばあさんとおじいさんの体が透けた。桃真の腕から離れた二人は赤い、小さい魂が空へと舞い上がっていった。

それを当然のごとく見ていた伊月は、

「……いつ？」

空に消えていく赤い魂を目で追う。

「二年前に、二人とも一緒に死んだ。つがいの鳥は、一方が死ぬともう一方もすぐに死ぬという。声を聞いたとき、もう少しだけ一緒

にいたいと思った」

「あの二人にとって、鬼なんてどうだってよかったのかもしれないのう。とにかくお前を一人前に育てたかった。だから魂がさまよった。そんな感じがするな」

そうかもしれないと、伊月の言葉を素直に受け止めた桃真には、おじいさんの形見である毘沙門刀と、おばあさんが作ってくれた吉備団子が残った。

「もうここに帰ってくる必要はない。行こう、鬼退治に？」

「うむ。さっさと倒して、早々に輿こし入れしたいのう？」

歩き始めると、伊月は桃真と腕を組み、じつと誘惑的な目で見つめてきた。

見返す桃真に、逆に伊月が顔を赤くしてしまった。

このような仕草を見せられては、桃真も可愛いとしか思えないではないし、守ってやりたいと思うてしまうではないか。それに、感情がすべて耳や尾に表れてしまうから伊月の気持ちたちが直接伝わってくる。それに、尾をこちらに絡ませてくるだけ、今どいう気持ちかわかってしまう。

「……悪くないかも」

「んっ？ なんじゃ？」

「なんでもないよ」

そして、旅が始まった。

が……、

「……問題は勘弁だ」

啞然としているのは桃真だけではない。いかなる状況にも驚かないと思っていた伊月が、どうしようという表情を向けてきた。

道中、北に伸びる山道を進んでいたときだ。もう少しで村だといふところで目の前に、畏にかかった翼を有する女の子がいた。

巫女衣装で、雉のような翼は、広げると桃真二人分近くある。そ

の翼をばたばたと羽ばたかせ、目には涙を浮かべて必死になって罨から逃れようとしていた。

桃真と伊月は罨にはまる瞬間を見ていたのだが、あまりにも間抜けな捕まり方だったため、助けてやろうかと迷った。

広い道幅のここで、普通、皿の上に乗った団子を食べようとする者はいない。いないのに、目の前で泣きながら足に絡まった縄を外そうと必死になっている奴がいる。

「うつく、えつく……どうして、なんでわたしがこんな目に……」

大変な目に合っているな。そう思ったのだが、

「おっ、団子を食いおったぞ」

なんと手を止め、ひょいっと団子を手にして食べた。

捕まっけていても食欲はある、なんて強情な娘だ。

「もう、外れてよお。ひつぐ……」

「のう、ここは人として助けるのが人道的か？」

「あれが人間なら助けるが、下手なこととして獵師と揉めるのも勘弁だな。獲物には黙って狩られてもらおう」

「桃真……意外にも冷徹な男じゃな」

目を細め、桃真の意外な一面を見てしまった伊月。

「もう、外れて……あっ」

「こちらに気づいたぞ」

ぴくりと翼をふるわせ、きらきらとした目を光らせてこちらを見してきた。

「お、お腹空いて、お団子見つけて、そ、そしたら——」

「いや、見ておったからわかるわ」

赤く頬を染めるその娘は、また人一倍大きな滴を目に浮かべた。

「み、見てたのに、助けてくれないのですかあ？」

「獵師に見つかって一悶着起こしても、なあ？」

と、伊月を見る。

「この者がこういう言うのでは、妾も手がだせん」
目線をそらし、すまぬと態度で示す。

「同じ獣人けものふしではありませんかあ？」

かちんときた伊月であつた。

確かに耳と尾を有する獣人ではあるが、こっちは神さま。

「獣人ではないわ、妾は神じゃ」

拗ねる伊月は、

「行くぞ桃真、こんな奴を助ける義理はない」

「まっ、待って下さいよ！ ごめんなさい。お願いします、助けて下さい、何でもしますから！」

次の瞬間、伊月の目がぎらつと光り、桃真は背筋がびりびりしたのを感じた。

何かを企んでいる目だ。

それがなんとも怖くて、襲われた昨日を思い出し、同時に興奮が蘇つてきそうになってきたので、耐えた。

「助けてやるとも。ただ、本当に何でも言うこと聞くか？」

側に寄り、指で顎をあげて問う伊月は、獲物を捕らえ、それをいたぶる獣——獣であることには間違いないだろうが、なぜだが桃真は、伊月にこのような仕打ち、弄ばれたような感覚を味わったような気がした。

「何でもしますからあ、このままじゃ獵師にあんなことやそんなことやとされて、二度と男の人なしでは生きられない体にされちゃいます」

「む、むう……それは、いかな」

そのための罠なのかと、伊月は眉をひそめ、まじまじと娘を見る。桃真から見ると、伊月は綺麗、この娘は可愛いといった感じた。身長は桃真と同じくらい、背の高い方だ。短い髪だが、赤いひもで束ねている。びくびくとおびえる目は赤色、翼は折りたたまれて震えている。

ただ不思議なのが、なぜ赤と白の巫女姿なのか、ということだ。「早く、早くう。獵師が来ちゃいますよ」

そそくさと縄を外す伊月も、同情したようだ。

「あー、助かりました。本当にありがとうございます。このお礼はいつか。ではっ！」

ぱつと翼を広げて背を向けたところ、伊月は羽交い締めにした。

「な、なんですか？」

「何でも言うことを聞くのだろう？」

耳元でささやかれ、やつと伊月が危険な存在であるとわかったらしく、もしかしたら獵師に捕まった方がまだよかったのかもしれないと思った。

「おぬし、名前は？」

「永紅えいくです……」

「では永紅よ、なんでも言うことを聞くと云ったのじゃ、妾たちの願いかねてくれぬか、のう？」

「でも、あたし、これから神社に帰らないと……」

「神社？ 何の神じゃ？」

「佐島さまです」

伊月は、久しぶりに佐島の名前を聞いたとはしゃいでいた……ように見えたが、なんだか怒っているようで、無理やり永紅の手を引いて山道を歩き、大きな村に着いた。

「おりゃ？ 永紅では……誰じゃ、あの犬っころは？」

と、村人がこちらに気づいた。

自分の村から出ることもなかった桃真は、初めて訪れた村で驚いたのに加えて、人で溢れていたので少々戸惑った。

村では永紅というのは名が知られているらしい。

「犬に狩られたか？ この犬っころ、手を離さんか！」

鍬を持ったおじいさんがかつとなるも、伊月を怒らせると怖いのは、桃真はなんとなく理解していた。

「下がれ小童が！ 妾は犬神の伊月、地を治める神じゃ。不作を願

うならばその鍬で叩くがよい！」

すると、鍬を捨てたおじいさんは、地に額をつけて謝った。それに続き、村人が頭を垂れた。

村の大通りにいた人全員が、子どもまでも見よう見まねでに正座し、頭を下げた。

神さまの威厳をここで使うな……。

頭を垂れた村人を横目に、村の奥に見える鳥居を眺めた。

「鳥が鳥居を通る……なんちゃって」

お茶目な部分を見せた永紅だったが、翼をがぶりとかじられた。

「きゃあ！　かつ、噛まないでくださいよ。びっくりしますから」

「下らんことを言うな」

鳥居をくぐり、長く急な階段を上った先には、

「永紅、お客さんかい？　……あら、これは伊月殿、ずいぶんと久しいな」

それほど大きくもない社のすぐ横には、今まで見たこともない大きな神木が植えられており、その根本で酒を飲む、背中に翼を有する女が一人。その酒を注ぐ女が五人いた。

噂に聞く遊郭のようだ。

周囲の桜の木とは逸しており、神木は幹が太く、緑の葉で着飾っている。

「都から追い出されたと聞いたが、まさかこうもへんぴで、こうも近くにいたとは……この女たらしが」

永紅は伊月から逃げるように走り、佐島という神さまに抱きついた。

永紅と似たような衣装だが、裾が長く、上等だが露出の高い伊月の服とはまるっきり逆の服を着ている佐島は、妙な魅力があるものの、何か違和感がある。

どうやら、性別は桃真と同じようだ……。

「お団子があつて、罨に捕まって、それで……」

と、泣きながら説明する永紅の頭を撫でてやる佐島は、頬を伝う

永紅の涙をぺろりと舐めた。

「気色が悪い……」

身震いし、佐島という存在が本当に神さまなのかと疑問に感じた。

「同感じゃ。佐島よ、その者、永紅を借りるぞ」

「永紅を？ ……おお、何でも言うことを聞くと言ったらしいな」

あつ、永紅は振り向き、伊月を見る。

怯えた鳥と、それを狩ろうとする犬のような関係になり始め、永紅は完全に怯えている。

「永紅というその鳥の娘、癒え巫女であろう？」

癒えの巫女？ 聞いたことがある。

体液に治癒力があり、致命傷すら瞬時に癒すという。

永紅はその力の持ち主？

「さすがは犬神殿、洞察力は素晴らしいものだ」

「妾とこの男、桃真は鬼退治に行く。その娘、連れて行くぞ？」

「おつ、鬼退治！？」

さて、永紅と佐島の反応が気になる。

桃真はこの展開が面白くなってきた。

風に桜の木が舞い、花びらが桃真の頬についた。

「鬼退治だなんて、あたしには無理ですよ！ あたしは何の役にも立ちませんよ」

反論する永紅は、すぐるように佐島を見るが、当の佐島はにやりと笑みを浮かべ、

「連れて行け、この子なら役に立つだろう」

「えっ！」

思わぬ展開に驚いた永紅は、どうしようと伊月と佐島を何度も見返し。

困ったぞ、さあ、どうする？

なぜまたこんなに面白いのか、桃真でも不思議だ。自分は伊月と同じような属性なのかもしれない。

「言うことを聞かないのなら、猟師に連れて行くぞ？ それとも僕

が獵師になるぞ？」

洒落のつもりだったが、言って失敗した。

「お前には妾がいるではないか」

臍を思いつき蹴られた。

「佐島さまあ、どうしてですか？ あたしは役立たずですか？」

佐島にしがみつく永紅は、本気で行きたくないようだ。それもそうだな、鬼退治に行くと言い、ついてくる者はいないだろう。

「永紅よ、お前の一族は鬼によって全滅させられた雉戦神きしせんじんの末裔。それに、お前の力は彼らの役に立つ」

「そ、それがあの人たちと行く理由にはなりませんよ」

「鬼を殺さぬと、お前の呪いも解けないぞ？」

呪い？ 永紅は呪いをかけられているのか？

「でも、鬼なんかと戦ったら死んじゃいますよ？」

「お前も神の眷属なのだから、そう簡単には死なないさ。永遠に血に染まったままでいいのかい？」

ふるふると頭を振る永紅には、呪いという問題があるようだ。

それを知ってしまったても、伊月は連れて行くようだ。

桃真から見れば、厄介が増えただけにすぎない。

「永紅は役に立つよ。伊月、終わったら私の元に戻ってくる気はないか？」

杯を持ち上げ、笑う佐島。

「ない！ まあ、昔話は帰ってからでいいだろう？」

「ふっ……お前は変わらないな」

「なにがじゃ？ 話は酒の席でと決まっておるぞ？」

「違う。鬼退治に行つて帰ってくるという根性だよ」

「……」

やはり、鬼とはそうとうものなのだろう。

「お前の根性と、永紅の出立に、乾杯」

佐島は、杯を掲げ、並々と注がれた酒を一気に飲む。

「うう、鬼退治だなんて……準備してきます」

一応、覚悟は決めたようだ。涙を拭って御社へと入っていった。
「ところで、隣にいる私好みの殿方は誰だ？」

ぞわぞわと、足から頭の天辺まで虫の井戸に埋まってしまったような感覚に襲われ、一步退いた。

「妾の夫じゃ、手を出したら地槍を食わすぞ」

眉をぴくぴくとする伊月の横で、桃真は何も口を出せない。

「すまない。あまりにも神々しいものでな、見取れてしまう」

ふと、桃真は自分の手や足を見て、

「僕が？　僕が神々しい？」

「おお、やはり桃真は神か？」

伊月は自分が誉められたようにうれしそうだ。

「いや、神ではないだろう。けれども、何かしらの力を持っているだろう」

佐島も神さまなのだろう、吸魂の力をわかったことには感心する。
「準備できました。本望ではありませんが、自分の言葉に二言はありません。佐島さまの言葉にも逆らうわけにもいきません。道中、よろしく願います」

さほど変わらないが、旅衣装に着替え、弓を背負ってきた永紅だが、肝心の矢は持っていない。

「矢はどうした？」

「永紅に矢はいらない。光の矢を打つ。それが彼女の呪いである……」

注がれた酒を飲み、昼の太陽の光にまぶしさを感じた佐島は、永紅を送り出すことを、まるで使命だったかのように納得している。

桃真は、一瞬、おじいさんを思い出したのは、この男が人間ではないからだろう。

「おお、そうだ。永紅、ちとこちらに来い」

伊月はまたにやにやとし始めたのに、それに永紅は気づいていない。

「？」

こちらに寄ってきた永紅は、はてなんだろうと疑問を抱いているのだろう。

桃真もなにをするのかわからない。

「途中で逃げられるのもかなわんからな」

……ああ、そういうことか。

伊月に見られた桃真は、渋々腰の袋を手にし、

「一個食え」

「なんですか？ あつ、お団子！」

団子が好きなのか、なんの疑いも持たずひょいっと一個を手にして食べる永紅は、うん、おいしいと頷いて桃真を見た。

あれ、なんだか、変な感じがする……。

体が熱いし、心臓が高鳴る。桃真を見れば見るほどおかしくなっていく。

外見からも、頬は赤く、かすかな甘い息を吐く永紅。

昨日の伊月みたいだ。

「むう、お前に惚れていてよかったわ。でなければ不埒な女になっていた」

元から不埒だよ。

「おの、その、役に立つかはわかりませんが……」

と、桃真の手を取る永紅は、

「よろしく願います」

ちゅつと、指先が唇に触れた。

新しい。と、桃真は素直に感じた。

「仲間にするために惚れ薬か。やることが大胆だ」

かかかと笑い、佐島はさっさと行けという手振りをする。

「では、佐島。次に会うときは鬼のいない世じゃ」

「ふふつ、楽しみにしているよ」

手を振る佐島は、やっと厄介が消えたとばかりにため息をついた。

「あなたは……」

今度はしっしつと手を振った。

なんてこった、厄介を押し込まれたなんて……。

階段を下りる間、なかなか手を離さない永紅を気にすることもなく、また頭を下げる村人を後目に、桃真達は北へと向かう道に出た。「すぐく、体が熱いです。桃真さま、ど、どうしましょうか？」村を出てすぐ、永紅は我慢ならんとばかりに、伊月とは違う豊富な胸で迫ってきた。

しかも桃真さまと呼ぶ。この吉備団子、とんでもない威力を持つていやがる。

「男は多くの女を体験した方がいい、そのことに妾は反対せぬ」腕を組まれて言われても、桃真にその気はなかったが、いきなり林に倒された。

衣服をはぎ取られ、永紅に身を任せてしまったとき、おばあさんはこの吉備団子作りの達人で、本物の女暗殺者だと確信した。

「さっ、佐島さまとは、ち、違いますう……」

顔を真っ赤にする永紅に、桃真も我慢できなかった。

「おっ、おー、むっ、むう……辱めじゃな」

それは僕の台詞だ。

それでも桃源郷はしっかりと見た。

これが、本当の旅立ちだったとは、誰にも言えない。

第三章：小鬼

人が多く通る街道に出たとき、茶屋を見つけた桃真は座敷を借りて休んでいた。

それほど疲れていたのと、伊月と永紅と佐島の話聞いたからだ。

お茶と大量の団子を注文した永紅に、呪いや癒えについての話を聞く。

「ああ、はい。あたしの一族、雉戦神は体液に癒しの力があります。数年前に鬼によって滅ぼされ、鬼を滅ぼさない限り、あたしは……」
「昨日の夜でわかったが、伊月はかなり”飯”を食う方だ。華奢な体でよくそれほど入ると思うほどである。」

茶屋でなにを注文したかと思ったら、うどんを大盛り、上げ饅頭、天ぷら、それに米を茶碗一杯。

どれだけ食う気なんだ。

そんな伊月も呪いには興味を持った。

「あたし、呪いを解かない限り、子供が産めないのです……。うつく……」

泣きながらも団子は食う。

甘いものが相当好きなのだろう。

しかし、子供が産めないとは、身内にそんな惨いことをするとはこの娘も難儀なことだ。

横になり、茶をすする桃真は、

「誰に呪いを？」

ちらつと伊月を見ると、ものすごい勢いでうどんを食っている。
麵を食い終わるとそこに米を入れて食うという、桃真には新しい食べ方だった。

「虫の息だった名前も知らない同族です。お前が鬼を滅ぼさなければ、我々は滅びるとか……。ひどいですよね」

そんなことをと言い、また団子を食う。

どいつもこいつも食欲があつて健康な女の子じゃないか。
うつ伏せになつて、あくびをして大きく伸びをした。

…… あんなところであんなことをするものじゃない。

「若いくせに元気がないのう」

食べ終えた伊月は、桃真の腰を揉んでやつた。

「下だ、もう少し下、そこだ。あー、気持ちいい……」

本気で癒される。

「ところで、伊月と佐島はどういう関係だった？」

「なんじゃ？ 氣にのうて仕方ないか？」

また面白そうに、茶化すように問い返す伊月。

これだ、これが弄ばれているように感じる。

「別に、話したくなかつたらそれでいい」

あえて突き放すことで、伊月の感情を揺らす。

「まあ、佐島とは大した関係ではない。都に住んでいたとき、よく酒を交わした」

「それだけ？」

強く腰を指圧された。

神さまだからかは不明だが、結構な力だ。

「それだけじゃ」

「戻つてこいと言われたらどう？」

今度は力が弱くなつた。

「少しの間、あいつの世話になつた。…… まだ、あいつが“化ける”前だ」

“化ける”前か。

女らしい顔をしているのだ、相当の男前だったに違いない。

しかし、まったく、旅立つてから一日と経たずしてこの有様だ。

厄介は増えるし、なにより鬼退治という厄介が一番の問題だ。

おまけに、ここにいる厄介達が高飛車だったり呪い持ちだったり
とどうしようもない。仲間はほしいが、もっとまともの奴を希望す

る。

「ごちそうさまです」

食べ終えた永紅は、桃真の顔を見てにこつと笑った。意図はないのだろうが、純粹さには惚れる。それに、伊月とは違つてちゃんと胸と呼べる胸がそこにはあつた。

吉備団子の効力はもうない。即効性がある代わりに持続性がない。だが、なにやら桃真を気に入ってしまったようだ。何かが佐島さまと違つて立派だつたらしい。

ナニかが違つて……。

「ほれ、行くぞ。次の村に着けば宿で休める」

ぺしつと頭をたたかれ、よいしょと立ち上がる桃真。

なんだかおじいさんの口癖が移つたようだ。

あの歳でよくここまで育ててくれたと、一瞬だけ感謝した。

刀二本、脇差し二本、その他の武器、武具を帯び、勘定を済ませて茶屋を出ようとしたとき、

「……んっ？　なんだ？」

茶屋の外が騒がしかった。

道行く人が、一度は足を止めるも、皆早々に立ち去っていく。

「小鬼が出たんじゃよ」

茶屋のばあさんが、慌てることなく湯飲みや皿を片づけながら言つた。

えっ？　なに？　小鬼つてそんなに無視できるほど弱いのか？

疑問を抱きながら人だかりができている方に行くと、

「おっ、鬼ですよ。あたしたち一族を滅ぼした、鬼……」

がたがたと震えて伊月にしがみつく永紅に、

「鬼は恐ろしい。すべてを滅していく……」

永紅と抱き合う伊月。

目の前にいる子鬼というものを、初めて見た桃真だが、それが凶悪には見えなかった。

鉄の小さな棍棒を持っているが、どこからどう見ても人の子だ。

しかも倒れている。

……嘘だ！！

こんな奴が鬼だと？ 背丈なんて伊月と変わらないくらい小さく、人の子と変わりないと思ったが、よく見ると額には小さな角がある。「死んでいるのか？」

「ぴくりとも動かないぞ？」

赤い服を着たこの小鬼、確かにまったくもって動かないので、桃真が鞘でつついてみると、

「……うつっ」

「生きてるぞ！？」

「うわあああああ！？」

蜘蛛の子を散らすように逃げていく人波に乗じて、伊月と永紅も離れた。

唯一、子鬼のそばにいる桃真だけが冷静だった。

「桃真、気をつける。相手は鬼じゃ！」

「鬼退治に行くと言った当人がそれでどうする？」

情けない。ただ震える子犬ではないかと思った。しかし、実は小さくと強いのではないか？ 伊月達を見てそう感じた。

「と、桃真さまっ！ 鬼が立ち上がりましたよ！？」

「あっ？」

ぬっと立ち上がった鬼は、少し前屈みになり、ふらふらしながら近づいてきた。

手には棍棒、子供とはいえ、あれで殴られたらただでは済まない。柄に手を当て、居合いの体勢を取ったとき、

「お腹、減った……」

男の子か女の子か、どっちだったろうか。

小鬼が倒れるとき、そんなことを考えてしまった。

「鬼だぞ？ こやつは鬼だぞ！ 鬼は凶悪じゃ、今すぐ殺せ！」

「そうですそうです！ 鬼は滅するべきです！」

「妾一族の恨み！」

「あたしの呪い！」

さらに、頭には死人の声。

鬼を殺せ。我らの願い、鬼を殺せ。

桃真は額にしわを寄せ、んんつと、うなり声を上げていた。

先ほどの茶屋、ばあさんは鬼を座敷に上げてても気にもしない。天然なのか呆けているのかはわからない。

桃真は、まさに本当の子鬼を目の前にして殺すなどできなかった。

「ご、ごちそうさまです……」

隣で食事を済ませた子鬼。

形見は狭いが腹が減ってはなにもできない。小鬼は恐縮して桃真以外と目を合わせる事ができない。

ちやぶ台を間に挟み、目の前には、この牙で噛みつき粉々なしてやろうかとはかりに睨みを利かせる伊月。

おもいつきり翼を広げ、威嚇している永紅。

二人とも、小鬼が弱いと知ってからの行動だ。

どいつもこいつも根性がない。一番鬼に挑む意欲があつた伊月すら、小鬼に怯えていては仕方がない。

小鬼は二人に睨まれ、どうしようかと、すこしずつ桃真の側に寄り、その背中に隠れた。

「妾の婿を人質にするか！」

「桃真さまを帰してください！」

涙ぐんだ子鬼はびくつと身を震わせ、桃真の服を掴んで離そうとしない。

「落ち着け。ところで小鬼、お前はここで何をしていた？」

「母ちゃんに置いて行かれた。鬼なら自力で帰って来いって……」
じゅん、ときた。

桃真も小鬼と同じような思い出が残っている。

おじいさんに握り飯一個、脇差し一本だけ渡されて崖から落とされた。

三日三晩かけて上り、家に着いた。
今から四年前の話だ。

「俺、今年で十六歳だから、熊の十体殺して来いって……」

十六歳……僕と同じ年。しかも、熊を十体も殺してこいとは、なんて母親だ。いや、これが鬼なのだ。

「ほれ見ろ、やはり鬼ではないか」

「でも俺、熊なんか殺せない。五日くらい何も食えなくて、気づいたら、倒れてた」

「そうか、つらかっただろうが……僕たちは鬼退治の途中でな」

「えっ!?!」

桃真から離れ、隅っこで縮こまる子鬼に忍び寄る二人。

「悪い子はいねがあ」

「角持ちの子はいねがあ」

迫る伊月と永紅。

どう見ても二人が鬼だ。

「助けてもらったことにお礼は言います。でも鬼退治は諦めて下さい」

「……命乞いする鬼はいねがあ!」

「ひいひいひい!」

がたがたと怯える子鬼と、詰め寄る伊月と永紅に飽きられる桃真だった。

「やめろ」

二人とも「はい」と素直に話を聞くのはいいが伊月の爪は鋭く伸び、永紅は弓を引いていた。

「小鬼、名前は?」

やはり安心できるのは桃真だとわかったらしく、ぐっと服を掴む。
「赤鬼の呂鬼^{ろき}」

まあ、赤鬼と言えば赤鬼だ。

髪の毛が真っ赤だ。

「そうか、呂鬼か。なあ、呂鬼、鬼ヶ島はどこにある？」

「ごめんなさい。俺、鬼ヶ島には行ったことはないんです。ただ、都から近いと聞いたことがあります」

「鬼でも、色々あるんだな」

「そうだよ、俺たち赤鬼や青鬼は平和に暮らしている。人間は誤解してるよ、俺たちだって襲われてるんだ」

「襲われる？ 誰に？」

「黒鬼と白鬼」

「黒鬼……」

伊月は何か思い出したかのようにふらっと視線を上げた。それに永紅も、

「白い、鬼……」

二人とも、いやな記憶を思い出してのか、ふと明後日の方向を眺めている。

重い空気が流れ始めた。

「黒鬼も白鬼も、赤鬼や青鬼とはまったく違う。体も大きいし、力もある、赤鬼や青鬼では勝てない」

「同族内で派閥でもあるのか？」

「はつきり言つて、赤鬼と青鬼は弱いです。人間よりも強いかもしれませんが、鬼の中じゃぜんぜん弱い。そんな弱い俺たちを、黒鬼や白鬼は……」

弱い者は弱い者なりに生きろ、ということであろう。

おじいさんも言っていた。

弱い者を強くすることはできるが、所詮それは元が強い者に追いつくだけで、強い者を強くすれば最強になる。

その最強が自分だとは言わないが、桃真も弱い奴は嫌いだ……ただ、見たこともないものに恐怖を抱くことはある。これは弱いではなく、無鉄砲ではないということだと解釈している。

「人間が鬼を退治するなんて無理ですよ。あなただって、俺には勝

てませんよ」

かちん。

桃真の眉間にしわが寄り、こめかみに青筋が浮く。

こんな子供に。負ける気はない。

「おい呂鬼よ、僕を倒せるのか？」

「やつ、止めた方がいいですよ」

と、呂鬼は棍棒を持って立ち上がり、茶屋から出て行った。

まさか、逃げるのか。

追いかけてみると、小鬼は茶屋の隣の小さな崖を見上げていた。

次の瞬間、小さな棍棒を振り上げ、

おい、まさか……、

「うるおおおおおやああああ!!」

振り落とした直後、凄まじい音が響き、軽く地が揺れた。

呂鬼がいた場所には土煙が起こるも、すぐに風がさらっていった。

そんな、これが、これが鬼の力なのか……。

崖に大きな凹みが出来上がっていた。

あんな小さな棍棒で、あんな子供が岸壁に大きなくぼみを作って

しまった。

伊月は久しぶりに身震いし、昔を思い出した。

「俺でもこのくらいの力があります。黒鬼や白鬼がどのくらいなのか……想像できますか？」

「……まあ、その程度だろうな」

失望したかのような桃真に、呂鬼、伊月も永紅もぞくつとした。

性格が変わったようだった。

男女の関係に恥じらい、存在感が薄いのに喋るときは喋るという

特異な存在であった桃真が、こんなにも冷徹な雰囲気を出すとは、

伊月には思えなかった。

「鬼と言っても、こんなものか……」

ははっ、と短く笑ったようだった。

伊月の、桃真は危険だという、密かに思っていたことが現実とな

った。

吸魂という力を持つのだ、そんな男が女々しく弱い男な訳がない。「僕の想像していた鬼とは、だいぶん違うな？」

毘沙門刀ではない、もう一本の餓牙刀ががとうという刀を抜き、ずっと中段で構えた。

居合いの横一線。

何の変化もないと伊月は感じた次の瞬間、空気が斬れた。

呂鬼は開いた口がふさがらない、といったところだ。

持っていた棍棒を落とし、足に力が入らず、地に腰をついてしまった。

ゆっくりと、ものすごくゆっくりと、崖が動いた。

信じられなかった。

目の前の岩山が凄まじい音を立てて地に落ちた。

「なんてことだ……人間がここまでできるなんて」

崖には綺麗な切断面が残り、斬られた岩は向こうの道を塞いだ。

「それでも僕に勝てるか？」

呂鬼はふるふると頭を振った。

上等だ、白尾にだろうが黒鬼だろうが叩き斬ってやる。

桃真の中で、鬼というのは一撃で山を破壊するほどの力を持ち、見たこともない巨大な姿で、誰もがおそれる地上最強の生物だと楽しみにしていた。

桃真が生きてきた中で、一番強かったのがおじいさんだった。そのおじいさんでも鬼は強いと言った。だから鬼がどれほどのものと、興奮したこともあった。

しかし、自分と同一年の赤鬼の力を見て愕然とした。

こんなものなのか？

残念ながら自分は常人ではない。出生からして異常であり、吸魂の能力は自分に神に近い力を与えた。

岩山を斬ることができるのは己本来の力であり、そこに吸魂の力が加われば……、

「鬼は倒せる」

驚愕したのは呂鬼だけでなく、伊月や永紅も、桃真とは一線をおいた関係を持つと考えると考えた。

「すっ、すごい！ それなら白鬼だって倒せる！」

目の前に希望を見つけたように興奮し始めた呂鬼は、桃真の手を取り、涙を流した。

「でも、お前も同じ鬼だからな」

「えっ？」

鬼退治とは、そういうことではないか。

「おっ、俺たち赤鬼一族も協力します！」

「でもな、鬼退治って……」

そっということではないのか。

「あなたのような人間を紹介すれば、みんな鬼退治に協力してくれます！」

「しかし、鬼だし……」

おそらく、そういうことだ。

「……桃真さん、でしたよね？」

「ああ」

「平和に暮らし、争いを好まぬ生き物を無情にも殺すのですか？」

笑みを浮かべるが、冷静な口調で話す呂鬼は怒っていた。

桃真は、鬼退治はすべての鬼を殺すことだと言っているが、危害を加えない鬼だっている。

それを殺すという桃真が鬼に見えてしまう。

額に角が生えている、つまり鬼。鬼退治をするには鬼を全滅させる必要がある。

「平民を殺して楽しいですか？」

「お前のどこが平民だ」

「桃真さん！ 協力するって言っているでしょう！」

「そんなものは必要ない」

「どうしてですか！？」

「同族殺しを、させるわけにはいかない」

「あつ……」

しかし伊月からしてみれば、そんなことを桃真が本気で言っているとは思えない。

なぜなら桃真には、自分と同じような匂いがするのだ。

楽しみを他の者にわかるつもりはない。

永紅もまた、桃真には恐怖にも似た感情を抱いている。

「話はわかった。しかし鬼は僕たちだけで倒す」

「桃真さん……」

ぐずつと目を潤ませる呂鬼の頭を、桃真は撫でてやった。

「飯は食ったんだ、家に帰れ」

颯爽と歩き出す桃真。

それを追う伊月と永紅を見て、呂鬼は、彼らなら必ずやってくれるだろうと確信した。

しかし桃真の心情は見事伊月に読み取られていた。

こんな面白いことを、他人に任せるわけにはいかない。

伊月も永紅も、桃真の不適な笑みを見ることはできなかった。

が……、

その日の夜、宿屋で休んでいた伊月は、空に浮かぶ満月を見てうずうずとして落ち着かず、尾を振り続けた。

永紅は満月を見て団子を思い出し、空腹を覚えた。

その一方で、桃真は装備の一切合切を外し、毘沙門刀、餓牙刀の手入れを始めた。

温厚な桃真の顔が、刀身に映った歪んでしまった表情を永紅は見失しまい、以前、鬼に襲われたときのことを思い出してしまった。

「飯の前に湯浴みでもするかろう、永紅、行くぞ」

「あつ、はい……」

伊月は永紅の心情を読み、気を使ったのだ。

そして、一人になりたいという桃真の気持ちも察して……。

障子が閉まる音がしたあと、桃真は、

「はぁ……おじいさん」

感情を表すようなことはするな。気持ちは常に心の内に潜め、例え想いを寄せる者が危険な目に遭おうと、我慢するのだ。

これは、自分の感情という拷問に絶える手段であったが、鬼の力の程度を知ったとき、調子に乗ってしまった。

自分の力を過信するわけでもない、むしろ信じていない部分がある。

鬼は倒せる。そういう自信や確信がある中、最も重要なことを、

桃真は忘れていない。

鬼退治に行ったきり、戻ってこない三人の姉。

唯一残された家族と会いたいと、なぜだがまた感情的になってしまっ

……。ああ、やはり、家族を恋しいと思う。

「あんな姿を、まさか見せるとは……」

一人気まづくなる桃真だが、壁に耳ありという言葉をおぼえていた。

「桃真さま、やっぱり反省してましたね」

「当たり前じゃ、温厚で優しく、“立派”なのが桃真じゃよ」

「いつ、伊月さん。それは恥ずかしいですよ」

顔を真っ赤にしながら、永紅は翼を振るわせた。

満更でもないのだ。

第四章：鬼、現る

始まりは宿屋の夜だ。

男女の宿泊に気を使う仲居はいないが、一応と間を遮る屏風が置かれていた。

桃真は布団を敷いたあと、屏風で伊月と永紅から身を守る。

「……なんじゃこれは！ 言いたいことがあるならはつきり申せ！」

屏風を蹴り倒し、桃真に噛みついたのは、もちろん伊月である。

屏風の下敷きとなった桃真だが、無視して眠ろうと精神を沈める。

「起きぬか！ こら！」

「伊月さん、ほかのお客にご迷惑ですよ……」

なだめる永紅だが、屏風を置いた桃真には文句がある。

自分たちに不安があるのだろうか。

「別に言いたいことなんてないさ。ただ今日は眠い。疲れた……」

「疲れたとは……男らしくないわ！ 体力がないと鬼は倒せないぞ

！」

「関係ない。我慢しろ」

「が、我慢だと？ そういう意味ではないわ！ 勝手に寝ろや！」

屏風はそのまま、伊月はがばつと布団に潜り込んでしまった。

実は期待していた永紅は、しょぼんとしてしまい、翼をたたんで布団に入った。

まったく、毎日あんなことをしていたら体が持たない。

屏風に重みを感じながらも、桃真はすぐに眠った。

死者の世界に……。

「確かに、我々を殺したのは黒鬼と白鬼だ。赤鬼や青鬼は見たこともないと言っている」

死者を統べる死者、由恵^{ゆえ}。

ここは白い世界。座布団が二枚、座っているのは桃真と由恵。鍛え上げられた肉体、白髪^{しろがみ}の混じった短髪、髭^{ひげ}が生えており、胸着に似た衣類を身につけている。

柔らの達人であつた。

初めて会つたときはそんな印象を抱いた。

「黒鬼と白鬼を倒す。それが目的でいいのか？」

「それでかまわない。我々は、鬼を倒さない限り浄化できなくなつてしまった。……情けない」

胡座をかき、由恵は、いつの間にかそこにあるお茶を手にする。

「お前の仲間はなかなかおもしろい。犬神に雉戦神。強い味方だ」

「だが、あれは異常だ。体が持たない」

「ふふっ、おもしろいではないか。嫁の心配が減つたな」

そう言つて、由恵は左の目を撫でる。

由恵は両目がない。

鬼の爪にやられ、言葉では表せない傷ができている。

本人は、もう少し近くにいたら顔の半分は無くなつていたという。鼻や口が残っているだけまだよかったと、何度か桃真に話した。

「そろそろ寝ろ、屏風の下で」

「そつする」

ここは現実の世界ではないが、脳は覚醒したままなので、休んでいることにはならない。

それにこちらに意識を集中していると、体に変化があつても感じない。この状態で死んだら、そのまま魂が浮遊してしまう。

言つてしまえば由恵と同じ存在になつてしまう。

魂が肉体に定着する感覚のあと、体に重みを感じる。

屏風が邪魔だなど目を開けたとき、

「狩られておるぞ？」

腰の上に伊月がいる。

浴衣からのぞかせる、月明かりに照らされた白い肌。すこし汗ば

んでおり、いたずらそうにちろつと舌を見せた。

「味をしめるとつい手を伸ばしてしまうのが犬じゃ」

かぷりと首元を甘噛みされたとき、この女にはかなわないと再認識した。しかも隣から永紅がこちらを見ていた。

「……馬鹿な」

「何を言うか、おまえが悪い、あつ……」

……しかし桃源郷を見た。

二回も。

「……」

「どうした、食わんのか？ 美味しいぞ？」

朝食は確かに美味そうだ。味噌汁の匂いが食欲をそそるも、もう少し体力のつく、そう、肉が食いたいと桃真は思った。

「朝の食事は大切だと、佐島さまもよくおっしゃっていました」

一応食べるが、今日の夜が不安で落ち着かない。

屏風が駄目なら部屋を……いや、余計な金を使うわけにはいかない。路銀だつて、本当なら一人分だ。

桃真一人なら野宿してもよかったのだが、この二人はそれを許さなかった。

なんとかして金を稼がなければいけない。

どうしようかと、鬼よりも不安なことを考え食事を進める。

両隣の間抜けな性格がうらやましい。

朝食を終え、部屋で準備をし、宿を出ようとしたとき、

「北に向かう？ やめとけ、大猿がいるぞ」

ふと、旅姿の男二人と、一人の村人の会話が耳に入った。

大猿？ なんのことだ。

気になり、会話に口を挟む。

「すまない、僕たちも北に向かうつもりなのだが、大猿とは？」

「ああ、北を通って都に最短で行くに洞窟を抜ける必要がある。ここからなら一番近い道なのだが、そこには大猿がいる」

「大猿？」

「半身、岩に食われた猿だよ。昔から悪さをする猿で、岩に封じられたって話だ。とにかく怪力らしいが、さすがに岩に食われちゃなあ」

この男が何を言っているのかよくわからない。

都からが一番鬼ヶ島に近いと呂鬼は言っていた以上、都に行く必要はある。

今は都に行って情報がほしい。

それに金もほしい……。

「岩に食われているとか、大猿とか、聞いただけではようわからぬ」
犬耳を振るわせる伊月を見て、男はびくりした。

「迂回しましょうよ？ 怖いですよ」

翼を振るわせる永紅を見て、別の男がびくりとした。

「迂回するのとどの道を行けばいい？」

桃真の腰の二本の刀に二本の脇差しをびくりとした男が、

「山に沿っていくしかないな。洞窟なら三日でつくが、迂回すると七日はかかるぞ？」

四日間はもつたない。

大猿など、よくわからないが洞窟を抜けることを選択する桃真に伊月は賛成するが、永紅は必死になって抵抗する。

「やめましょう。あぶないですって！」

「近道があるならそこを通るほかないだろう？」

「時間がないわけでもありません。大猿って、鬼より強かったらどうします！？」

男たちが去ったあと、伊月と永紅は人の多い通りで口論を始めた。獣人同士の口げんかは、端から見ると異様だ。

あの二人の仲間とは思われたくない。

着物に身を包む伊月と同じような獣人もその光景を見てくすくす

と笑いながら通り過ぎていった。

「鬼を退治するのに猿におびえてどうする？ お前は臆病すぎるのじゃ」

「呂鬼くんにあったときは自分だって怯えてわたしにしがみついていたじゃありませんか！」

「それはお前が抱きついてきただけじゃろうが！ 妾の所為ではない！」

恥ずかしくなってきた桃真は、

「いい加減にしろ。洞窟を抜けて都に行く。文句は言っな」

「そうじゃそうじゃ、桃真がついておろう？」

桃真が顔から火が出るほど恥ずかしいことを言った。しかし永紅ならこれくらい言えば諦めてくるだろうと考えたのだらう。

「そうですけど、でも……」

ここで口論などするつもりがないので、吉備団子を永紅の口に押し込んだ。

「んぐつ！ ……またあ、こんなことするう」

涙をにじませるが、伊月が桃真の腰の団子を食べたあと、

「……言う通りにします」

この吉備団子を永紅に食べさせると、従順にさせることができるらしい。

悪い気分ではないが、むずがゆい。

「行くぞ」

伊月も永紅も黙って桃真について行くことになったのだが、実際、伊月は大猿に興味はあるが同時に恐怖もあった。

本当なら永紅との口論にわざと負けて迂回しようと二人で一緒に桃真を言い負かすつもりだったが、それが桃真の吉備団子で見事打ち消された。

むう、あの吉備団子と毘沙門刀は厄介だと今になって思った。

しかし桃真は北に進み、遠くの山を拝みながら洞窟を目指す。

「しかし、お前も度胸があるな」

「別にそういつつもりじゃない。早く都に行きたいだけだ」

「なにを焦っている？ 鬼ヶ島は逃げないぞ？」

「違う。早く鬼が倒したいわけじゃない」

唯一の肉親が生きているかもしれない。そういう希望がある。

今まで気にもとめなかった家族という存在。おばあさんとおじいさんが亡くなったとき、ふと心に穴が開いたような虚無感が生まれた。たとえ目の前にいても、それは偽りの存在、本物ではない。

家族に会いたい。

感傷的になってしまふのは、まだ“声”を聞いていないからに違いない。

「しかし岩に食われた大猿とは、想像もつかないな」

いつの間にか手にしている握り飯を頬張る伊月。

どこから銭を得たのかと心配になり、腰に手を当てると吊していた袋がなくなっている。

「お前、いつの間に……」

伊月の腰に袋が吊されている。

しかも軽そうだ。

「これか？ 先ほど落ちていたのを拾った。誰のかは知らないが、結構入っておったぞ？」

当たり前だ。それは自分が貯めた全財産。野宿をすればだいぶ生き延びることができたというのに、この二人はかなりの消費癖がある。

絶対に金を預けることはできない。

「馬鹿者が、それは僕のものだ」

奪うも、やはり軽い。

今夜は絶対に野宿だ。文句を言うものなら勝手にしてもらって結構。

路銀がなくなれば鬼退治の前に死んでしまう。

悩む顔を見せる桃真に、伊月は無言で握り飯を差し出す。

「次、こんなことが起きたら、毘沙門刀の最初の餌食になってもら

う」

鞘からすこしだけ刃を抜く。

桃真には聞こえないが、嫌な音が聞こえるらしい。

二人は強く耳を押さえ、顔を歪ませた。

「わかった！ わかったからやめてくりや！」

大声を上げて何とか音を打ち消そうと努めるが、それも虚しく鳴り止まない耳鳴りに永紅は、心の底からやめてくださいという表情を見せ、桃真にしがみつく。

「なんでもしますから！ だから刀を収めてください！」

涙目で懇願されては断ることはできなかったので、仕方なく鞘に刀を収める。もう少し懲らしめてやりたかった。

「その刀は恐ろしい……。頭が割れそうな音がするわ」
「僕には何も聞こえない」

今度この刀がどれほどの切れ味なのか試す必要があるものの、鬼と対面するまでは二人をけん制するためのよい道具となってもう他ない。

村から出て、山道を歩く際中、永紅はずっと疲れたと言って何度かその場で何度も足を止めることがあった。その度に伊月が永紅に文句を言い、泣きそうになる永紅を桃真が宥めた。こんなことを繰り返しながら進んでいると分岐が見えた。

「右、迂回道、真ん中、洞窟、左、呪海村を迂回して洞窟……呪海村？」
むら

「その昔、一つの村でとてつもないはやり病が猛威を振るい、村のほとんどが死んだ。はやり病が過ぎ去ると、今度は原因不明の早死に、旅人は寄るとそこで死に、村人が狂人になって殺しを始める。これは呪いと呼ばずなんと呼ぶ？」

そんなことをすらすらと述べる伊月だが、そういえば、伊月は神さまであり人間ではない。一体、どれほど生きているのかこんど聞いてみたい。

「いつしか旅人は近づかなくなり、また、村人も集落を出ることが

なくなった。以後、そこは呪い海、呪海村と呼ばれた」

「詳しいな」

「しばらく放浪したことがあってな、そりゃ知識も増えるものじゃ」

「そういうものか？」

ここで永紅は、桃真が妙に呪海村に興味を持っていたことに気がつき、

「ささつ、皆さま迂回して都に向かいましょう？」

「そうだな、呪海村を迂回して都に行こう」

「えっ！？ だから、どうしてそうなるんですかあ？」

「この世界の見納めになるかもしれない。どうせなら寄ってみよう」

「わたしは呪い持ちですよ？」

これ以上呪われては勘弁だと言わんばかりに、永紅は涙を浮かべて必死に抵抗する。けれども、桃真と伊月が左の道を進むとこれ以上ここに留まるわけにいかないので仕方なくついていく。

伊月の腕を掴み、気のせいか周囲が暗いことにより一層の恐怖を感じる永紅。

「空気が淀んでいる」

「確かに重いのが、嫌な予感がする」

桃真は左側に帯びる刀に手を当て、いつでも抜刀できる姿勢で前に進む。と、止まった。

伊月も止まり、姿勢を低くする。

「……なんですか？ なにかいるんですか？」

「これ、静かにしろ」

道が狭まり、風が木々の葉を揺らす。

聴覚と嗅覚の鋭い伊月は、桃真に下がれと命じ、森の奥に気配を感じると言った。

「人ではない」

「獣か？ 鬼のような鋭い殺意ではないが、いやじゃのう、むずがゆい敵意じゃ」

「子供だ」

次の瞬間、桃真は伊月に初めて会ったときのことを思い出した。森の中から桃真に飛びかかってきたのは、鋭い爪を向けた獣人だった。

桃真は、刀は抜かなかったが、鞘で防ぎ、横へと投げ飛ばした。すかさず伊月が攻撃を仕掛ける。尾と耳をぴんとは張り、両腕が熊のように変化した。桃真の頭ほどある握りこぶしを作って襲いかかるも、獣人はひょいっと軽く跳んで避けた。

「……なんじゃ？ 獣の子じゃ」

戦いへの緊張感を維持していた伊月が、相手の姿を確認するとその警戒を解いて腕を戻し、尾はすつと垂れた。まじまじと獣人を眺め、相手の技量を見極める。

丈の短い衣服に、伊月のような耳と尾っぱ。

その尾はすらりと長く、猫のようなしなやかさがあるものの、今はぴんと張られ、腰を曲げ、姿勢を低くして大股でいるために下着が見える。

猫の獣人だ。

「おい子猫、なぜに襲ってくる」

桃真は鞘を持ったままだが、柄に手を当てることなく、猫の獣人を指さす。

息が荒く、猫特有の瞳がぎらりと桃真を睨んだ。

「うちの村になんの用だ！ 入ってくるな！」

「用などはないが、なぜだ？」

「旅人は呪いを持ちこむ、これ以上村を荒らすな！」

「……呪いというのは他から持ち込まれたのか」

納得する伊月の後ろで、実際に呪いを持っている永紅は、村に行ったら呪いが解けるかも？

村が呪いを吸い取ってくれるかも？ などという呆れた考えが浮かんだ。

「確かに興味本位で村に近づこうとはしたが、別に旅人が呪いを持つてくるわけではないだろう？」

「呪いを持ちこむから村が滅びるんだ！」

「聞き分けのない小娘じゃ、呪いというのは相当の力の持ったものが命がけで行うものじゃ。ただの旅人が村全体に呪いをかけることなどできるものか」

「じいちゃんもばあちゃんも旅人が来たせいで村はやはり病になったと言っただけだ！ お前たちも村を呪う！」

「ばかげたことを……そうじゃ、妾たちなら呪いを解けるかもしれない」

「はあ？」

突拍子もないことを言う伊月に、桃真はもちろん、呪い持ちの永紅も驚いた。

特に永紅は、自分の呪いを消したいために、伊月に言葉を信じようとする反面、伊月のことだから洒落を言っているのだと、一瞬だけの希望をすぐに捨てた。

「それでも妾は地を治める神。その土地に呪いがあるのであれば解くことぐらいできるじゃろう」

「神さま？ あんた、獣人じゃないのか？」

「貴様と一緒にするな。それでも犬神さまじゃぞ？」

ふと、猫の獣人は姿勢を正し、ゆつくりと伊月に近づく。

同じ耳と尾を有する者同士、信頼できると思ったようだ。

「本当に呪いが解けるの？」

このとき、永紅は、本当に伊月は呪いを解くことができるかもしれないと信じていた。それは目の前にいる猫の獣人も同じだった。

桃真は自分の村が、そういうええはやり病も土地が枯れることも不作もなかったことを思い出し、伊月は本当にそういう力があるのかもしれないと思った。

「まあ、見てみることにはわからん。案内せい」

半信半疑の表情で眉を下げる女の子は、尻尾をゆるりゆるりと揺らし、どうしたものかと悩んだ。

「……村には時々鬼が現れる」

「鬼？ 僕たちは鬼退治に行くところだ」

「鬼退治？ あんたたち、馬鹿？」

「神さまに向かって馬鹿だと？ 小娘、呪い殺すぞ」

すると女の子はびくりと身を震わせ、ここで一番安心できる存在として桃真を選び、袖を掴んで桃真の陰に隠れる。

「桃真さまにはどなたにも好かれますね」

ちよつと永紅は妬いていた。

「兎にも角にも、村へ連れ行け」

こんなところでぐずぐずすることに苛立った伊月は、女の子を強い声で急かす。

「う、うん」

桃真の手を握り先導する女の子。

「ところで、子猫よ、名前は？」

鞘を腰に戻し、可愛らしい子猫の耳を見ながら尋ねる。

「わたし？ わたしの名前は美卦^{みけ}」

「僕は桃真、こっちの犬ところが伊月、鳥が永紅」

「犬ところとはなんじゃ」

きつと眉を吊り上げ、尾をぴんと伸ばす伊月を無視し、

「今でも村には呪いが？」

「今はね、呪いなんかないんだよ？ 村は普通なんだ。でもね、村のみんなが旅人が呪いを持つてくるから避けてるの」

美卦と呼ばれる女の子は、たれた耳をぴくぴくと動かし、桃真の顔を見て不安な表情を浮かべる。呪いなんてないとは言うが、美卦も村が呪われていることを必死になって隠しているのがわかる。

「それで、鬼が現れるとは？」

「鬼はね、呪いを食うために村に来るんだ。呪いを食べて力を増す、そんなことを言っていた」

「その鬼とは、どんな姿をしている」

「真っ白な髪に角がある。女の鬼を中心に七体の鬼がいる」

「女の鬼に、七体の鬼？ ……強いのか？」

「強いよ！ 女の鬼は身の丈の丈の大刀で母屋を破壊するもん！」

桃真は赤鬼の呂鬼を思い出し、白鬼が強いとはいえ、それほどもないだろうと過信評価する半面、いざというときには吸魂の力を、初めて戦闘で使うことになるかもしれないとも考えていた。

「桃真の初陣じゃな」

「白鬼の力がどれほどのものか、試させてもらうさ」

「わたしは援護に回りますから、どうぞがんばってください」

「一応、戦う意志はあるようだ」

「まあ、桃真さま一人で余裕でしょうから」

こんな会話を軽く話す桃真たちに、美卦は鬼と同じように恐ろしくなった。特に桃真を持ちあげる二人から、この桃真は相当の力の持ち主だということはなんとなくわかった。けれども、相手は鬼だ。人間が相手にできるほど生半可な相手でないことを、その肌で味わっている。

村についたとき、桃真は、自分の村と変わらないくらいの大ささで、人がそれなりにいたと懐かしさを覚えた。とても呪いと鬼に怯える村には見えなかった。

「おばあちゃん！」

桃真の手から離れ、くわを持つおばあさんの元へと走っていた。

「美卦や、どうした？ 誰じゃ、あれは？」

目を見開き、驚くおばあさんは村人を大声で集める。

わらわらと集まる村人のなかに、さびれた刀を持つ若者までいる。目つきが厳しく、敵意は明らか。桃真と伊月は対して反応を見せないが、永紅は敵意むき出しの村人に怯えてしまった。

「あの女の子、犬神さまだつて。土地の呪いを解くことができるかもつて」

「神さま？ 犬神さま？」

村人の表情には希望の光が見えた。けれどもそれを信じることにできない、特に若者は小さな声で「嘘だ」とか、「馬鹿な」などと言っている。

「一応、地治神^{ちぢしん}であるからに、村に呪いがあるなればそれを見ることはできるぞ」

「犬神さま。確かにこの土地は呪われています」

群衆の中から、杖をついて歩く老人が現れた。

頭の毛はなく、長いひげの、おそらく長老であろう。

「この地の呪いは鬼によつてかけられたもの。鬼は土地の精気を吸い取り、己の力とする。ここは地力が高いのじゃ」

「地力？」

と、聞きなれぬ言葉に、桃真は伊月に尋ねる。

「地の力じゃ。この力が高い土地は豊作に恵まれ、病も起きない。

桃真よ、妾がいた村はどうじゃった？」

さきほど考えた、伊月が神であること。

「鬼は何年もこの土地の地力を吸い、土地は痩せこけ、病も起きた。わしらはこの地の血となり肉となり、土地を癒すことをやめると、鬼はわしらを皆殺しにする」

「むごいことを……ここから逃がさないと？」

「呪いは鬼じゃ。鬼がいなければ、わしらは平和に過ごすことができる。犬神さま、わざわざこの村においでなさって下さいましたこと、ありがとうございます。しかし鬼を倒さぬかぎり村の呪いは解かれません」

「そのことじゃが、呪いを解くよりも簡単じゃ。ここにおる男、この桃真が鬼を切り殺してくれる」

「な、なんと!？」

伊月の大きな態度に、桃真は内心、この馬鹿野郎と声を大にして言いたかった。

「この男、吸魂なる力を用いて鬼に対して絶対的な力を持つ。なに、案ずることはない。鬼が現れた日、鬼がここから消える日じゃ」

「なんとお、本当に神さまはいらっしゃったか……」

ぶわっと涙を流し、長老はその場に跪いた。

「どうか、どうかわしらをお助け下さい」

額を地につけ、頭の上で合掌する長老に申し訳なくなった桃真は、そばによって膝をつき、

「頭を上げてください。微々たる力ですが、僕たちは鬼退治を目的とするもの。できるかぎり、やってみましょう」

村人全員が土下座して桃真に手を合わせるも、桃真の心境は、もう言葉では表せないほどあわわわっ……な状況だった。鬼と対峙してみたとは思うものの、こんな口約束を軽くしてしまった伊月、いつかの夜、めっちゃめっちゃにしてやる……。

桃真一行は今日、この村に泊まることとなり、まずは桃真の心配する路銀の消費が抑えられた。

その夜、大したもてなしもできないといいながら、村の人は大事な食料を多く使って豪勢な料理を目の前に出してくれた。

「桃真殿は、どこ出身かな？」

村で一番大きい長老の家で、数十人の村人が酒を桃真に注ぐ中、一人の若者が顔を赤くして尋ねてきた。

「南の名もない村です。僕は孤児で、おじいさんとおばあさんに育ててもらった」

「あたしと同じだね」

桃真から見ても、孤児という言葉に抵抗も偏見もなく、自分が孤児であることを隠すつもりはないが、普通なら伏せておく事からであるのはわかる。美卦というのは、まだ幼く、孤児という意味を知らないかのような言い方だった。

「しかし、ここより南の村に鬼が現れるようなことはないのだろうか？　なぜ鬼はここから動かない？」

上座に座る長老に、桃真は首を伸ばして尋ねるが、聞こえていない。隣にいた美卦が大きな声で言うと、長老は、

「鬼は神のいる地を恐れておるようじゃ。この地は地力が高く、神さまもいた。しかし神は鬼にかなわず祠に逃げてしまった。祠には強力な結界が張っており、人も鬼も入ることができぬ」

「鬼が睨むほどの地力じゃ、地治神も相当の力を持っていたと思う

が、なんという名の神じゃ？」

遠慮なく飯をむさばるように食う伊月は、口にもものを含んだまま聞く。

「志乃っていうの、すっごく仲が良かったんだ」

友達の名を呼ぶかのように言う美卦は笑顔だった。

「志乃？ 雷撃神らいげきしんの志乃か？」

表情を曇らせ、食べるのをやめた伊月は美卦を見て、そしてここにいる全員を一望してから桃真を見た。

「なんだ？」

「雷撃神の志乃は、神の中でも一、二を争うほど強力な力を持つ神じゃ。地治神であるからその土地から出ることはできないとはいえ、鬼に負けるとは思えぬ」

「さて、その前に、地治神は土地を出られない？ 伊月は、お前も地治神だろう？」

「元々はある土地にいたが、鬼に襲われてお前の村にやってきた。土地に縛られることはないのじゃ」

「それで、その雷撃神というのは？」

「天候を操り、雷を落として敵を炭にする。強い神じゃったわ」

「確かに、志乃さまは強い神さまじゃった。しかし地力を奪われ、その力のほとんどを奪われた。神さまの力は信仰心と土地の力と言うが、わたしの思いが足りなかったのじゃろうか……」

「地力は地治神とって生命線じゃ、志乃の力が衰えるのもわかるが

……」

「わかるが、どうした？」

「ここの地力が高いのはわかるのじゃが、そう簡単に地力が吸い取られるかと思うのじゃ。まだ力があるうちに鬼どもから地を守るこゝとができたのではないのかと思う。それにのう、鬼は神のいるところには近づかぬのじゃろう？」

「あつ、志乃は、いっつも寝てるの。あたしが行ってもずっと寝てるの。あたしはただそばにいただけで楽しかったから」

にっとなつて笑つて見せる。

「それじゃ、決定じゃな」

「寝ているところを襲われた、そういうことか？」

「おそらく。明日、志乃が結界を張るといふ祠に行ってみようきや？ 力になつてくれるだろう」

「それは、願つてもないことだ」

杯に注がれた酒を飲み、桃真はその夜を過ごした。

桃真は一つの母屋を借りてそこで眠ることとなつたのだが、

「……気づいたか？」

永紅は酔っぱらつて完全に眠っている。起きる気配などない。

「ああ、二人じゃな」

「鬼に味方する人間がいるとは……」

寝返りを打ち、伊月の方を向く。

「妾らが鬼の討伐に失敗しとき、仕返しを食らうのはこの連中だ」

伊月も眠そうだ。布団の中で、桃真の目を見る。

月明かりの夜に、二人が村の外へと向かつていく足音に気付いた

桃真と伊月は、すぐにその二人の考えを見抜いた……というより、

こつこつ事態を想定していた。

「追うのか？」

「ああ、裏切り者は許されない」

「そのまま鬼を斬つてこい」

くすりと笑っている伊月の顔に、もう何度惚れたことだろうか。

素直な伊月は好きになつた桃真はの中で、本当に興入れを考えるようになった。

「やれるなら、やってみるよ」

暗闇の中で桃真は起き上がり、装備を整える。

持つていくのは脇差と、神刃と名付けた手裏剣を数本。衣服も身軽で、外羽織を捨て、黒い内衣で闇に紛れる。それでも暗殺家で育つた桃真だ。戦いはもちろん、暗殺術も得意である。

「妾もついて行こうか？」

すこし起き上がる伊月であつたが、

「いい、鬼と接触するつもりはない。密告者を捕らえるだけだ」

「そうか、気をつける。自身の力を信じるのじゃ」

「わかつてるよ」

口元を黒い布で覆い、家から出ると、桃真の気配が消えた。

「暗殺者か……」

布団の潜りこみ、目を閉じる。

桃真は二人の人影のすぐ後方にぴたりと離れなかった。月明かりが少々邪魔だが、普通の人にこちらの気配を悟られることなどありえない。

足音はもちろん、息をする音すらも聞こえない。

「今さらだが、本当に行くのか？」

「当たり前だ。あんな人間に鬼が倒せるものか」

「けれども、両脇にいた獣人は神さまだと言つし、本当に鬼を倒してくれるかもしれない」

若者二人、やはり鬼どもに密告するつもりだ。けれどもその意は決しておらず、迷いがある。

今のうちに戻るであれば桃真も布団の中で眠るつもりだが、二人の足は止まらず、村を抜け、桃真がきた山道とは反対方向に進む。この方向に鬼がいるというなら、地形をしっかりと覚えておこう。

「はあ、本当に大丈夫なのか？ 鬼は俺たちのことを信じるだろうか？」

「次に鬼が地力を吸いにくるのは明後日だ。その前に言わなければ、あいつらは鬼に殺され、そのあとは俺たちが殺される。俺は死にたくない」

確かに、鬼を倒せるかはわからない。けれども、対決する前に殺されるのは勘弁だ。

この者ども、村に戻るつもりはないようだ。

桃真が動く。

音もなく接近し、一人の後ろから口を押さえ、もう一人の脇差を

向ける。

「声を出すな」

脇差を突き付けたまま、森の中へと誘導する。

刀を突きつけられた者は驚きで声を上げることができず、躓き、腰をつく。口を押さえられた者も、どうしようもなく、暴れる様子はない。

桃真は二人を並べ、膝について口元の布をずらして、

「鬼が怖いのはわかる。が、いつまで逃げる？」

「お、お前が鬼を倒せるわけがないだろう」

怯えて声が震えているも、自分の意見はしっかりと述べる意志は認める。

「僕も、自信はないが、一生このままでいいのか？ 誰かを救うには誰かが犠牲になるしかない。いつまでも神さま頼りで生きていけない」

「もつともなことを言うが、鬼を倒せなかったら、仕返しは俺たち向けられる。このままはいやだが、死ぬのはもつといやだ」

「……わかった、僕が鬼を倒す。確実に」

「ただの人間だろう？ どこからその自信が出てくる？」

もつともな意見だ。

この者たちを説得させるには、自分の力を発揮しなければならないだろう。

桃真はため息をつき、

「僕には、鬼を倒すことのできる力がある」

密告者二人を囲むように、ぐぐと地面が盛り上がりはじめた。

何事かと、二人は抱き合い、震える。

土の中から、月明かりに鈍く光る髑髏が現れ、肉を持たぬ、骨だけの人ならざる者が数体、姿を見せた。

声を出せぬほどの恐怖が二人を襲い、がたがたと震え、声など枯れたかのように喉から息が漏れる。

人ならざる者は月の光りに照らされ、肉がつき、鎧をまとい、刀

を持つ武者となり、その瞳は血のように赤く、人の姿をしているのに、とても人とは思えぬ雰囲気を持つ。

「鬼の力に拮抗できる力だ。本来であれば裏切り者は殺すが、僕は人殺しじゃない。僕たちの目的は鬼退治だ」

いや、違う。帰ってこない姉を見つけ出したい。

内なる思いを潜め、そんなことを言う。

「ほ、本当に、倒せるのか？」

「倒す」

「……」

ようやく信じたか。

桃真の作りだした動く屍、桃真が死士と呼ぶ者どもは風に吹かれた砂埃のように崩れされ消える。それを見てまたびくびくする二人の若者は、桃真を神さまではないのかと勘違いした。

鬼を絶するために生まれた神。

二人に手を貸し、三人で村に戻る間、

「明後日、鬼がここにくるのか？」

さきほどの会話を思い出す。

「鬼は定期的に村にやってきて地力を吸い取っていく。明後日がその日だ」

「鬼は近くにいるのか？」

「鬼はこの先の洞窟にいる」

「洞窟？ 大猿がいるという洞窟か？」

「違う。もっと東だ。そこを根城にして、北の都の周辺の村を襲っている。南には神さまが多い」

それは知らなかった。もしかしたら、桃真がいた村の周辺が安全だったのは、伊月という神さまがいたからかもしれない。

「地力を吸うということは力を溜めるとのことだ。その前に鬼に攻撃を仕掛ける……いや、雷撃神に地力を脅し、この土地を守ってもらう方がいい」

「志乃さまは美しい神さまだった。俺たちの悩みを聞いてくれた」

「ああ、でもいつも寝てばかりだった。だから鬼に土地を奪われた」
「神さまの所為にするな」

二人はこそこそと家に戻っていくのを確認して、桃真は伊月たちの元へと戻る。

「どうじゃった？」

「ああ、説得したよ、力を見せて」

装備を取り外して布団の中にもぐりこむ桃真。

「それで、どうだった？」

「明後日に鬼が村に来る。それに、鬼の居場所もわかった」

「明後日か。志乃はなにをしてるのか、まったく……」

「そんなに強いのか？」

「妾など足元にも及ばぬ。強い神で、慈母じぼとまで言われた」

「慈母？ 天照大神あまてらすおおかみのことだろう？」

「天照が祭られているのが都だ」

「だから鬼には襲われない？」

「そういうことじゃ。この地の中心を守る」

「神さま頼りはやめろ、か……」

「なんのことじゃ？」

「いや、なんでもない……」

そう言つて、桃真は目を閉じた。

しかし眠ったわけではない。白の世界、由恵のいる世界に入る桃真は、由恵に聞きたいことがあった。

「鬼というのは、ほとんどが人の姿をしているのか？」

いつもとおなじ、座布団にお茶、それに今は囲炉裏がある。火がついているが、暖かさはない。ただの幻影、虚無、この世界に本物はないもない。目の前にいる由恵さも、虚像なのだ。

「少なくとも。額に角を有する」

「女の鬼とは、これまた厄介だ」

「鬼は女の方が強い。気をつける、我が教えた戦い方を思い出せ」
この世界で由恵と戦い、鬼に対する戦いを習った。感覚としては

十年、二十年の歲月、ここでは時間という概念がない。いつまでも居続けることができるが、魂を奈落に持っていかれるかもしれないと、由恵は長い間桃真を留めておかない

「攻撃は流し、身体を動かし、一撃で仕留めようと思うな」

「だが、毘沙門刀は人ならざる者を一刀両断するという」

「あの刀を知っているのか？」

「無論、鬼を滅殺するために作られた刀と言われる、有名な刀だ」

「誰が使っていた？」

「鬼牙・新之助」

「……噂に聞く、鬼から生まれ、鬼を殺す男か」

「奴は人と鬼の間に生まれた混血種であり、鬼である自分に疑問を抱くも、悪とする鬼を斬った」

「本物の戦人か……」

「お前も、鬼神となるのだぞ？」

「わかっている」

その貳

「眠れたか？」

「……熟睡したことはない。いつもどこかで警戒している」

「難儀じゃのう」

先に起きた伊月は、桃真の横で正座をして起きるのを待っていた。そこにどんな意味があるのかはわからないが、なんとも可愛らしい仕草ではないか。

桃真が起きると、すつと額に唇をつけてから永紅を起こしにかかる。

「さつさと起きろ」

「んっ？ あっ、はい、生きてますよ？」

「なにを言うてる」

三人はまた長老の家で朝食をごちそうになり、美卦の案内で雷撃神の志乃が眠る祠へと向かうことにした。村の中で、桃真は昨晚鬼に密告しようとした二人を目撃したが、二人はそそと家の中に入ってしまった。昨晚のことを村人に知られると居場所がなくなってしまう。

「犬神さまは志乃と友達なの？」

「いや、知っているというだけじゃ。会うのは初めてじゃ」

「どういう容姿をした神さまですか？」

両手に餅を持つ永紅は、ちよつと二日酔いのようで、ふらふらと歩くが食い意地はある。

「すつごく綺麗。胸もおっきいし」

「ほう」

桃真が興味を示す。

「なんじゃ？ 女子は胸で決まるわけじゃないぞ？」

「そんなこと、一言も言っていないだろう？」

「顔が言っているわ」

実際、桃真は伊月の胸よりも永紅のような豊満さがある方が好きだ。

桃真たちは、昨晚、二人の若者が向かおうとした山道から離れ、道のない山を登り始めた。こんな道を進むなど、本当にこの先に祠があるのだろうかと桃真は考えた。

山道に慣れている桃真、伊月と美卦だが、永紅はそれほどではなく、またもや疲れたと言いだした。

「そこにいると鬼に食われるぞ」

「そ、それはいやです」

ふんばって山を登る。

「ほら、祠が見えてきた」

なんてことのない、一見はただの洞窟だが、美卦が祠の前で止まり、手を出すと、結界というものが張っている。

透明だが、確かにそこにはある。

「まるで硝子じゃ」

「硝子？」

「西洋から伝わった、透明な板じゃ」

「志乃、この祠から出てこようとしないの」

桃真も触れてみたが、弾力があり、刀では突いても斬っても破壊できそうにない。

「どうやって中に入る？」

「この結界の中には入れぬ、大声で叫んで志乃を呼ぶのじゃ」

「出てこない気がする？」

「そうじゃな、出てこないかもしれない」

「……犬神の伊月と申すが、志乃殿、出てきてくれぬか！」

試しに大きな声を出してみる。果たして声が届いているのかさえわからない。

「無理だ、出てこないさ」

そのとき、

「だれー！ー！」

洞窟の向こうから声が響いた。

「おい、すぐに反応したぞ」

「誰にも言わないけど、志乃はね、女の子が好きなの……あたし、何度かいたずらされたの」

悲しいのか、うれしいのか、子供でもそんな複雑な顔をできるのかと思う桃真は、一歩足を引き、問題には関わりたくないと思意思表した。

「あらら、問題児ですね」

二日酔いのくせに、妙に冷静な永紅は最後の餅を食べ終わると、そばにあつた岩に腰掛ける。

「神さまってみんな問題があるのか？ 伊月、お前が説得して来い」

「なっ！ へんなことをされたどうする？」

「僕に変なことをしただろう？ 同じだ」

「お主……」

「ご指名なんだから、行つてこいよ」

桃真が祠に手を伸ばすと、先ほどまであつたはずの結界が消えてなくなっている。

「……助けにこいよ。妾はお前を好いておるのじゃからな」

無表情に、伊月は恥ずかしさもなしに言う。

むっ、そんなことを言うか。

すこしだけ、桃真の頬は赤くなつたが、伊月は気づかなかつた。

「わかつた」

真剣さのうかがえる桃真の声に、伊月は安心したのか、微笑み、祠の中へと姿を消す。すると、ふわっと暖かい風が桃真たちに吹き、また結界が張られたことを知る。

「これでは助けにいけない」

「見殺しですか？」

「あいつの根性だから、志乃という神さまだつて倒すかもしれな」
永紅と話し合っている間、美卦はそこらへんに生えた薬草や山菜を取りながら時間を潰した。

そんな美卦を穏やかな気持ちで見っていた桃真は、育った村の山も、こんな感じではなかったのだろうか、風景を重ねてみた。思いもしないところで懐かしさというものは訪れる。たった数日間の間で、桃真は田舎への思いと、未だ生きているかもしれない姉を考える。どんな人なのだろう？ それよりも、今、どうしているのだろうか？ 鬼に倒され、この世にいなければ声を聞いてもいいはずだ。鬼を倒すのを諦め、どこか争いのないところで暮らしているのだろうか？

足元に生えていた草をちぎり、草笛を作って吹いてみる。いまいち音が出ない。おじいさんが教えてくれた、犬を呼び寄せるという音を思い出しながら草笛を作り、吹く。

綺麗な、長い音が出たすぐに、

「呼んだかー！！」

祠から伊月の大声が聞こえ、まだ無事であることを知る。

少なくとも、犬の特徴はやはり持っているようだ。

「まだか？」

桃真は祠の前で大声を出す。

「事情が複雑じゃ、桃真よ、入ってこい」

境界は消えたのだろうか、宙を手で突いてみるとなにもない。

桃真たちは祠の中に入っていく。

「暖かいな」

祠の中を進むと、松明に火が灯っており、また乾いた暖かい空気が桃真には邪魔だった。こんなところに神さまが籠っているとは情けない限りだ。

「おお、桃真。どうしたものか、話を聞いてくれ」

広い空間には、畳があり、家具が揃っていた。

周囲には松明の火に、小さな川が流れており、村の母屋よりも住みやすそうな印象を受けた。

雷撃神志乃と対して座り、差し出された茶をすする。

装飾品で飾られた白桃色の長い髪に、清楚な白い衣装。手には扇

子を持ち、高級感あふれる厚い座布団の上でしくしくと涙を流していた。

「何があつた？」

「うむ、それがのう、ちと難しいのじゃ」

「難しい？」

「志乃どのは、鬼に恋心を抱いておる」

「はあ？」

意味がわからない……わけではない。美卦や永紅には理解できないようだったが、なんとなくであるが、桃真には想像がついた。話を聞くと、やはり桃真の想像通りだった。

志乃はこの地に攻めてきた女の鬼、白鬼の咲鬼さきに恋をした。志乃の求愛はものすごいもので、それこそ鬼を倒すのではないのかという勢いだったと本人は語る。しかし求愛は失敗し、咲鬼に激しく拒否され、故に志乃は悲しくなりこの祠から出てこなくなったという。「わたしは好きだって言つたのに、咲鬼は神などと付き合えるかとわたしを避けた」

甘つたるい声で言う志乃は、桃真を直視することはない。

「そりゃあ、そうだ」

志乃のそばで楽しそうな笑みを見せる美卦、志乃といえるだけで満足のようだ。

桃真、伊月と永紅は、泣きながら志乃の用意した茶を飲みながら、しかし祠というだけあつた豪勢で住みやすそうだと感心する。

「わたしは咲鬼が好きじゃ、どうしてこの想いを受け取ってくれぬ

……」

ときどき、志乃は美卦のふとももに手を当てて撫でる。

それを、桃真、伊月、永紅は気持ち悪いと感じた。

「この土地だが鬼に支配されている。地治神なら守るべきだろう？」

胡坐に手を当て、ぐつと声を張つて言う桃真だが、志乃はすすつと避けて美卦の肩に手を回す

「男は嫌いだ、荒々しい」

「何を言うか。その荒々しさがいいのではないか」

ぴんと耳と尾を張って、自慢げに言う伊月に永紅が賛同するも、桃真にはどうにも恥ずかしい。

「それに、咲鬼であれば、あんな土地くれてやる」

「志乃どの、それでも雷撃神か？ 本来は戦いを好む神ではないか？ 鬼を倒せ、民が苦しんでおるぞ？」

鋭い眼光で志乃を睨み、伊月は少々感情をむき出しにする。それでも志乃は、扇子で口元を隠し、どうしてものかと美卦を何度も見る。

「子供に頼ってどうする？ 鬼は明日に来るといふ。地力を吸い、力を蓄え、戦うべきだ」

それでも気持ちの固まらない志乃に、だんだん苛立ってきた桃真。険悪な雰囲気を知した永紅が、なんとかその場を取り繕うと面白いことを言うが、誰一人としてその表情を変える者はない。美卦でさえ、今の状況がどのようなもので、みんなが緊張し、重要な話をしていると知っているのに。

「……咲鬼は、わたしに振り向いてはくれないのか？」

ずっと伊月に視線を向ける志乃であったが、伊月の答えは志乃が期待したものではなかった。

「無理じゃ」

「……鬼は悪じゃ、それはわかる。しかし、咲鬼は失いたくない」

「男を好きになれ、それが解決策じゃ」

「むづ……そうだな、鬼を斬るのは世の為だ……」

悩み悩む志乃に、押しの一手がほしいところだが、あいにく桃真にはその一手が思い浮かばず、ただ志乃の気持ちがかかわることを願うだけだった。

「わかった、役立つのであれば、わたしも戦おう」

「決まった。力を蓄え、明日に備えよ」

「そうする。のう、伊月どの、一晩わたしと一緒に過ごさぬか？」

「無理じゃー！」

激しく拒否されたことで、志乃は顔面蒼白になり、美卦の膝の上でおいおい泣いた。

「神さまは怖い。あんな女が神の中でも強い力を持つとは信じられない」

美卦を祠に置いたまま、桃真たちは村に戻った。

毘沙門刀と餓牙刀をそばに置き、明日の戦いにそのために念入りに刃を研ぐ。その光景を見かけた村人は、鬼との戦いが近いのだと感じ、また、刀を研ぐ桃真の顔が恐ろしく、誰も近づこうとはしなかった。

伊月と永紅もまた、桃真の顔に恐怖を感じた。

ろうそくの火に照らされる桃真の、眉間にしわを寄せる顔と、鈍く光る刀。

なぜだかはわからないが、毘沙門刀は振動し、嫌な音を出すことはなかった。もしかしたら、桃真の意志によって刀はその真価を発揮するのではないのかと、隣で神符しんぷを書く伊月は考えていた。

「そんな符が、役に立つのか？」

「それでも神が書く文字には力が宿る。ほれ」

和紙には“火”の文字が記されており、ふつと床に投げるとちろりと燃えた。突然のことに驚いた永紅は、びくりと伊月を見る。

「火災地獄と書けば、そりゃあこの家一軒軽く燃え消せるわ」

「さすが神さま、頼りになる」

「妾はお前が頼りじゃ」

「わたしの頼りでもあります」

「神さま以外に、僕は誰に頼ればいい？」

「お前の力に頼ればいい」

「ふつ、おもしろいことを言う」

緊張していたのが、伊月に伝わってしまった。迂闊だったと思うが、正直、伊月の言葉はうれしかった。すこしでもこの緊張感を和らげてくれる。それに、伊月は神符を懐におさめるとぴたりとくっついて離れない。永紅がそれを見て嫉妬し、反対側から桃真の首に

腕を回す。

「吉備団子、食べていいですか？」

そういう気分になりたいのと、小さな声で囁かれ、仕方なく吉備団子を取りだす。

「日持ちする団子だ」

おばあさんの料理技術は素晴らしいものだ。干し肉同様、団子はその歯ごたえと味を残したままだ。

「……おいしい」

蕩けた声、吐息、豊満な胸、今にも泣きそうな目……愛おしくて仕方がない。けれども明日の戦いを控えてこんなことをするのは、やはり嫌悪感がある。やってはいけないことをやっているようで、それでも感情は高まり、興奮する。

「明日は決戦になるのだぞ？」

「死んだら、こんなこともできなくなる」

こんなところを村人に見られてはかなわない。

桃真は母屋の奥、台所に隠れた……。

「桃真さま、やっぱりすごいですよね」

「立派じゃ立派じゃ、鬼に勝てるぞ」

おそらく初めてであろう、一本のろうそくの光りの中で、二人にまじまじと見られた。恥ずかしくて両手で顔を隠したほどである。

二人はそれだけでは飽き足らず、色々といたずらをしてくる。抵抗しようにも体に力が入らない、手足が痺れてくる、頭がぼうつとしてくる……。

「可愛いですねえ。桃真さま、可愛いですう」

「可愛いとか言うな……」

「初^{うい}い奴、初^{うい}い奴。のう？」

「聞くな……」

そんなこんなを夜遅くまで続けて、就寝したときには、桃真の明日への戦意は極限に近いくらい低くなっていた。

「もう、思い残すことはありません」

永紅の寝言だが、桃真もそんな感じだった。

「焦るなよ」

「……わかつている。緊張はするさ」

「毘沙門刀は、お前の心に反応する。闘心をむき出しにしても怒りは見せるな」

「難しいことを言う」

「毘沙門刀の力を信じろ、その剣は、人ならざる者を斬る刀だ」

「人ならざる者？ 伊月や永紅か？」

「彼女たちには、音として毘沙門刀の力を感じるのだろう。仲間に危害を加えないように、毘沙門刀を制御せよ」

由恵の言葉を心に刻む。

「呼ぶのだぞ。我々を、呼ぶのだ」

「わかつている。必ず召喚する」

「鬼を殺すのだ」

そうして、桃真は覚悟を決めた。

翌朝。

目が覚め、村に出てみると村人は誰もいなかった。いるのは長老と、美卦、それに志乃だけだった。長老は朝食の用意された今で、重鎮のごとくそこに座り、桃真たちを待っていた。志乃にべったりとくつつく美卦は、昨日、何をされたのかを定かにする表情を浮かべていた。

「志乃どの、機嫌はいかがかな？」

座り、まだ温かさの残る味噌汁を飲む。

「昨日でだいぶ地力を回復した。しかし、咲鬼と対峙するのは気が

引けるなあ……」

「まだそんなことを……」

「鬼が攻めて来る前に地力を吸い、力を蓄えるのだぞ？」

「わたしが治めていた頃に比べると地力は低い、力を取り戻すにはもう少し時間がかかる」

「鬼が来たらそんな暇もないな」

長老からは妙な緊張感が漂っている。村人としてただ一人、ここに残っているのだ。緊張するのは当たり前だ。それを察知した桃真と伊月は、もちろん、鬼に対する恐怖がある。

朝食を済ませ、村から出て鬼が根城とする洞窟の方に目を向け、鬼を待つ。待っても来なければ、こちらから攻めていくだけだ。桃真は常に刀に手を乗せ、岩に腰掛けて沈黙を続けた。戦いの前の精神統一、というわけではないが、ただ気持ちを落ち着かせたい。

志乃は村の中心で正座し、この地の地力を吸収し続けている。

「本当に、鬼と対決することになるなんて……」

怯える永紅は弓を片手にそわそわと落ち着きがない。それは当たり前だが、伊月は神妙な面持ちで、地に胡坐をかき、目を閉じている。

「怖いのか？」

「……妾か？ そうだな、ちと怖いな」

「僕も、正直落ち着かない」

「鬼を見れば、もしかしたら冷静になるかもしれない。お前は十六年間、戦いだけを学んできたのだ、いざというときは冷静になるものだ」

「よく知っているな」

「村にいた頃から、お前のことは気になっていた」

「僕が？」

「その力だ。神をも彷彿させる力、圧倒的力、鬼を殺す力」

「俺は人の子ではないのは確かだ。桃から生まれたらしいからな」

「神か……神かもしれないな」

「なんの神だ？」

「厄払いの神？」

「厄払いか……なるほど、あるかもしれない」

ははつと笑った桃真が、その表情を消した。左手で鞘を握り、右手を柄に乗せて立ち上がる。さすがの永紅も気づいた。弓を握りしめ、矢を放つ姿勢を取ると、なんと手には光りの矢があり、永紅は三本の光りの矢を弓で同時に引く。また伊月は片手に神符を持ち、右腕の肘から先が黒と銀色の体毛に覆われた。鋭い五本爪を持つ獣の腕が現れた。

「なんだあ、あの人間は？」

どんどんと地を響く足音が近づき、桃真たちの目の前に鬼が現れた。

人間に近い容姿、しかし体格は桃真の三倍以上、巨大な黒いとげとげしい棍棒を担いで村の手前で足をとめた。似たような、七体の、黒い体に白い髪、口には牙、額に角を有する鬼が笑みを浮かべている。七体の鬼の後ろに、白く短い髪を持ち、額に二本の角、自身の身の丈の倍ほどある巨大な両刃の剣を軽々しく持つ。身の丈は桃真よりも低いのだが、威圧感は強烈だ。強風の中で必死になって立っているように、桃真は耐えた。

「ほう、人間に神二匹、珍しい組み合わせだ」

黒い瞳、黒い羽織を着て、胸元を開けて魅力的、だと桃真は感じた。

「小僧、そこをどけ」

「引かぬ」

笑いかけた鬼たちが沈黙し、棍棒を両手で持つ。

「小僧……喧嘩売ってんのか？」

「喧嘩で済むと思うのか？」

「……意気込みは買ってやる。だが、私たち鬼を甘く見すぎだ」

女の鬼——咲鬼は大剣を振り上げ、勢いよく地に向けて振り下ろす。

地が碎ける音と同時に土煙が立ち上った。視界を奪われたその瞬間、桃真は餓牙刀を抜き、疾駆する。伊月も桃真を援護する形で走り、永紅が狙いを定めずに光の矢——光矢^{こうや}を乱射する。
「いてっ！」

土煙の中で声が聞こえ、桃真は中段で刀を構え、声の方へと走り、切り上げた。

手ごたえがあつたが、致命傷を与えてはいない。すばやく三步引き、代わりに伊月が三步進み、神符を鬼の体に張る。

「なんだ？　ぐわあ！！」

念を送り、神符の効果を発動する。

土煙がかき消えるほどの巨大な爆発が起きて、黒煙を上げる鬼が一体、そこに立っていた。

土煙が消えたおかげで視界が開けたのは、桃真からしたら、ある意味で不利だった。暗中歩法という暗殺術の技があり、相手に気配を悟られることなく接近する歩法である。桃真はそれが得意だった。それにあの巨大な鬼、予想通り動きが鈍い。棍棒での攻撃も予備動作が大きく、隙だらけだ。短く、一撃を与えたら引く方法で倒せる自信があつた。

伊月の“爆ぜる”と記された神符を貼られ、直撃を食らった鬼はしばらく直立していたが、手に持つ棍棒が轟音を立てて地に落ち、鬼は膝をついた。

「喰鬼^{くつき}！？」

「貴様あ！！」

桃真の予想に反して、鬼は意外に弱い。攻撃力は高いかもしれないが、防御力はそれほどでもない。桃真が斬りつけた胴体は、傷が深く、伊月がそこに神符を貼ったことで内部から爆発した形だったため、鬼の胸部がほとんどない。

「き、気持ち悪いですう」

永紅が口元を押さえる。確かに、あんな死に方は勘弁だ。

残った鬼どもの殺気が桃真の胸を貫く。咲鬼も、眉をひそめ、大

剣を握る手を強める。

「小僧…… やってくれたな」

「所詮、鬼など、この程度だ」

餓牙刀を鞘に戻し、毘沙門刀を握る。伊月と永紅が嫌な音が聞こえると思っただが、抜刀したとき音はしないものの、振動し、鬼たちは毘沙門刀に威圧感を感じた。

「由恵、今こそお前たちの力を発揮するのだ」

自分自身に気合を入れて、力を解放する。

死士の召喚。

土から骨だけの人ならざる者が数十体現れ、肉を持ち、鎧で身をまとい、刀を持つ。人の形をしているが明らかに人ではない死士が死者の目を鬼に向ける。

「死人を召^よぶとは、貴様、人間か？」

一体が一步引き、くつと声を上げた。

「貴様たちを殺す者だ」

さらに、桃真は魂を吸収し、自身の体を強化する。

ぐぐつと肉体が一回り大きくなり、長い髪が逆立ち、目が、血のように真っ赤になる。それだけではなく、着ている衣服まで変化した。

「餓鬼が……！」

一体の鬼が棍棒を振り上げて走ってきた。桃真も疾駆し、振り下ろされた棍棒を毘沙門刀で流し受け、振り返りざまに鬼の背中に毘沙門刀の一閃。

「ぐつ、この……」

鬼だって人間と同じ体のつくりをしている。

大きく倒れる鬼を見て、死士がとどめに刀を鬼の胴体に突き刺す。十数体の死士が鬼を惨殺し、血肉を浴びて、残る鬼を睨む。

鬼が驚愕の表情を浮かべ、咲鬼が、

「ただ者じゃない、焦るなよ……」

すっと動いたと思うと、瞬時に桃真に近づく。

桃真の鼻元まで顔を近づけ、笑みを浮かべる咲鬼。

角がなければ綺麗で澁刺とした女性だと、咲鬼の顔を見て感じてはみたが、戦っている最中にこんなにも冷静なのは、やはり伊月の言うとおりでと思った。

腰の手裏剣を握り、こめかみ目掛けて突き刺そうとしたが、咲鬼が離れ、代わりに五体の鬼が棍棒を振り上げて迫ってきた。死土が桃真の前に出て、まさに死兵のごとく桃真の身代わりになって棍棒の餌食となる。

伊月が投げた神符が鬼の腕や体に張られ、効果を発揮するも、大きな爆発だけを上げて鬼どもは永紅の神符に注意を向ける。永紅の光矢は鬼の皮膚に深く刺さるも、物体を持たないためにそれほどの威力を持たない。それでも、鬼が動きを止めるだけで桃真には十分だった。

毘沙門刀の威力はすでにわかった。昨晚まで思っていた鬼に対する恐怖もほとんどない。それでも、一体を倒すためには伊月、永紅の援護が必要だ。鬼が今、桃真を最も警戒する中で、伊月や永紅に牙を向けられると守り切れるかが問題だ。

志乃どの、早くしてくれ……。

ここで雷撃神の力を発揮しないと、自分たちが鬼を倒すときには満身創痍になっているかもしれない。巨大な体躯を持つ鬼は隙が多く、今の桃真なら倒せる。けれども咲鬼の動きは早く、大剣を脇差のように扱い、攻撃している最中に受ける斬撃は強烈だ。咲鬼が視界に入った瞬間、桃真は餓牙刀を抜き、それで防いでも、

「くっ！」

真横に吹き飛ばされた。

死土が援護に入るも、死者に桃真ほどの力はない。鬼の動きを鈍らせることができて、倒すことはできない。

「桃真！」

伊月が桃真の足元に“爆煙”の神符を投げると、爆発が起き、黒煙が神符から舞いあがって視界を失った。

立ち上がり、桃真が厚い鬼の胸板に毘沙門刀を突き刺した。戦場で、突きという行為は危険だった。刺して抜けなくなったら武器を失うことになるも、毘沙門刀はすっと入り、すっと抜けた。

「……！！」

声を上げることなく死を迎えた鬼であつたが、桃真は右腕に鋭い痛みを感じて後退し、永紅の光矢の援護もあつて鬼たちから離れることができた。咲鬼が大剣を振り回し、黒煙を吹き飛ばす。

「やはり人間だ」

桃真の右腕からおびただしい血が流れ、永紅はそれを見て顔を青くした。

「桃真さま！」

血はすぐに止まった。吸魂により体が強化されており、治癒能力も高まっている。それに肉体自体も鋼と化すというのに、咲鬼の大剣は毘沙門刀と同じようにあつさりと桃真を斬つたのだ。

「あの鬼……闇での戦いを知っている」

伊月がすばやく桃真に寄り、傷が癒えていることに驚きながら、爆ぜる、火炎地獄と記された神符を握りしめる。

「闇での戦い？」

「あの斬撃、影ノ身家に通じるものがある」

「なんだと？」

確かに、桃真はおじいさんの攻撃を感じた。空気を斬るような鋭い斬撃に、闇の中での動き、感じることはない気配。だから桃真は咲鬼を目で追うことで攻撃を防ぎ、避けていた。それでも闇の中で戦うのは、他の鬼どもには不利だと考えたからだ。

「志乃どのにはなにをしている？」

「咲鬼は意外に強い、まさか桃真が傷を負うとは……」

「傷くらいは覚悟していた。それもすぐに癒える」

「咲鬼を倒せるか？」

「倒せる。もう少し力を解放してみる」

真紅の瞳の、巨大な肉体を持つ桃真は、伊月からも永紅からも衝

撃的な容姿だった。その衝撃を消し去ったのが鬼の先制攻撃であったが、今こうやってまじまじと見ると、正直、桃真には鬼以上の恐怖がある。

「骨のある人間だ。その力も、技もいい。しかし、鬼に勝てると思うな」

咲鬼は、大剣を地に刺し、腕を組んで微笑んだ。

「なめるなよ、俺の力はこんなもんじゃない！」

自称がいつも僕の桃真が、俺と言って咲鬼に突き進んだ。鬼どもは散開して桃真を囲もうとするが、四体の、先ほどとは違う死士が四体の鬼の前に地から現れた。

「貴様を殺す」

死士の中でも、名のある死士四体。生前は鬼を倒し続けた武士であり、普通の死士とは違って、容姿、戦い方、その力も違う。

それぞれ異なる武器を持ち、死んだ故に、もう二度と死ぬことのない体を手に入れたことで死の恐怖を捨てた究極の戦人。

「殺せ！」

号令を出せば、死士は動く。刀、双剣、鬨斧、槍、を持つ死士は各個鬼に対して攻撃を仕掛ける。

「この死兵が！」

鬼の棍棒を軽々とかわし、刀で四肢を切り、動きを止める。

一方は戦斧で棍棒を防ぐところから弾き返し、胴へと思いつきその刃を喰い込ませる。

弱いわけがない。一体の死兵に数百人の魂が込められた、いわば怨念の塊……化け物だ。

四人の死士は鬼と対等に戦う、そして桃真自身も魂を吸収し、体から精神までが強化される。握る毘沙門刀がうなり声を上げるがわかる。鬼を殺せ、血を吸いたいと囁く。毘沙門刀に感じた生の脈動……この刀、生きている。

形状が変わる。生きた刀、毘沙門刀の刃が熔け、咲鬼が持つ大剣よりも巨大化して見たこともない刀が現れた。

自分でも綺麗だと思っていた栗色の長い髪の毛が銀色に光り、歯を食いしばり、鬨気というものが目に見えた。青に近い靄が桃真を包み、頭部から鋭い、鬼とは違う角が伸びる。

「桃真……」

伊月は桃真の名を呟き、ただ見ていた。

桃真は変化した毘沙門刀を肩で担ぎ、姿勢を低くして咲鬼を睨む。

「……」

無言。瞬足、至近距離に接近、咲鬼は驚き、跳んで距離を取るが、その腹部には痛みが、血が滲む。

桃真は手裏剣を咲鬼の腹部に十数本も刺した。それを気づかなかった咲鬼は、苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべ、手裏剣を抜き取り、大剣を振り回してにやりと不敵な笑みを浮かべた。

咲鬼は桃真と同等の速度で身を動かし、軽々しく大剣を振り上げる。

毘沙門刀を両手で握り、咲鬼の攻撃を受け、地に足がめり込む。

重い斬撃ではあるが、今の桃真にはなんてことはない、中腰の姿勢で餓刃刀を抜きとり、大剣を持つ手を斬り落としてやろうとしたが、咲鬼は恐怖心から大剣を離してしまった。

まずいと、咲鬼の顔には書いていた。

勝機だ。

咲鬼の大剣を踏み越え、跳んで会心の一撃たる毘沙門刀の横一閃振り上げられた刀は咲鬼の頭を切ることはなく、桃真は身をひねって咲鬼の左腕を斬り落とした。

「がつ!?!」

小さく息をもらし、千鳥足で二歩、三歩と下がる咲鬼。

血は黒く、桃真は、鬼を殺したという感触を、ここで初めて味わった。そして、毘沙門刀には一滴の血もついてない……血を吸う刀だと、恐ろしくもなった。

「頭かしら!」

隙を見せた鬼どもに、死士が斬り、刺す、殺す。

二体の鬼が攻撃をかわし、お互い背を合わせ、伊月と永紅に棍棒を向ける。そのときだった。急に風が吹き、雨雲が空を埋め尽くした。と思つたら、凄まじい光と共に轟音、そして鬼が黒く焼け、倒れた。

稲妻が落ちたのだ。

「咲鬼……なんと、腕を失ったか？」

志乃である。

雌雄の決するときになって、やっと出てきたか……。

桃真は志乃を見ることなく、咲鬼を警戒し、毘沙門刀の握る力を強める。

「気色の悪い神が、何しに来た？」

志乃は悲しいとばかりに、扇子で口元を隠し、長い十二単に似た衣服を翻して涙を見せておいおいと泣いた……ふりをした。

「咲鬼、すまぬな、やはり鬼は悪だ」

「当たり前だ。人の為などと抜かす神が……人を支配し、楽しき世を作るべきであろう？」

それが鬼の目的なのか？

桃真にはまだわからないが、今となって敵は咲鬼一人。この状況で、桃真は冷静になり、あることを思い出した。

なぜこの咲鬼は、影ノ身に伝わる技を持っているのだ？

「咲鬼、貴様、なぜその技を持つ？」

肩で息をして、血の噴きでる腕をもう片方の手で必死に止めようとする咲鬼に、もう余裕はない。潔く死を選んだのかは不明だが、地に腰をつけ、近づく桃真を怯えてような目で見える。

「技、だと？」

「俺の名前は、影ノ身・桃真・諫之神。南の小さな村で育った」

「影ノ身！？」

その驚きように、桃真はいやな予感がした。

「鬼退治に向かつて帰ってこない姉を捜している」

「はっ、はははははははっ……！」

その笑い声に、傷の痛みも、桃真に対する恐怖心もなく、純粹に面白いと感じて笑った。桃真にはそう思えた。伊月がそばに寄り、これ以上、何も聞かぬほうがいいと言った。

桃真も分かっていた。もとより勘の鋭い男だ、この事態が、この咲鬼がどのような存在なのか、信じたくも聞きたくもないが、咲鬼は口を開いた。

「影ノ身・咲希・鬨之鏡……。私が、まだ人間だった頃の名前だ」

「……嘘だ」

「嘘なものか、これを、お前もおじいさんに貰っただろう？」

咲鬼は黒い血に濡れた手を懷に入れ、あるものを取りだした。

それが桃真に決定的な衝撃を与えた。毘沙門刀を握る手が震える。永紅がどうしたのかと不思議そうな顔をして桃真の隣に立つ。伊月が、なんて声をかけるべきなのだろうかと迷い、結局は永紅と共に桃真から離れることを選んだ。

死士が、桃真の感情を読み取り、干渉すべきではないと地に戻る。

お前が決める。

由恵の声。冷たくも、選択を用意した。

桃真も震える手を懷に入れ、青い色をした勾玉を手にした。

「蒼血晶から作った、おじいさんの勾玉だ。これで信じたか、弟よ」

咲鬼はせき込みながら、腕から血を流しながら笑った。志乃は顔を歪ませ、桃真を見た。

この青い勾玉は、おじいさんが作ってくれたものだ。桃真の姉に当たる者たちもこれを渡しており、守護石として非常に珍しいものを加工したのだ。これを持っている者は、桃真と、そして姉だけである。

「お前が探している姉は、私だ」

「……」

「驚いたか？ そうだろうな、人間が鬼になったのだから」

「……なぜだ？」

「ふふっ、知りたいか？」

その前に咲鬼は死ぬかもしれない。このまま話を聞かずに咲鬼を見殺しにすることを、桃真にはできない。それに、姉と知ってしまった以上、斬ることに躊躇する。震える体、助言を求めることの許さない選択。

生かすのか？ 殺すのか？ 違う、正確には、生かしたあとに殺すという、ただ一つの選択。

それを実行するは桃真だけだ。

「……どうした、聞きたいのか？」

「今は生かす。話を聞いたら殺す」

「そんな真似を、私がすると思うか？」

「影ノ身の者なら、拷問の技も習っただろう？」

桃真の鋭い眼光に、観念したかのように咲鬼は目を閉じて倒れた。

「咲鬼！？」

「気を失っただけだ」

鬼を倒すのには変わりない。話を聞いて殺すだけだ。

由恵が何を言っても、これだけは自分の意志で解決する。

「……どうするつもりだ？」

「……わからない」

戦のあとというのを初めて味わった桃真であるが、予想どおり、気持ちの悪いものだ。心に嫌悪感が残るのに、体の血肉すべてを失ったような間隔と、突きつけられた真実への戸惑い。または苛立ちか憤怒。

姉と語る……いや、姉に当たる咲鬼——咲希の話を聞かなければ殺せない。まだ、殺せない。

なんと声をかければいいのか？ 伊月は、自分の一族を滅ぼした鬼、桃真がひそかに探しているという姉を目の前にして戸惑っていた。永紅は事情がまったくわからない。志乃、美卦と一緒に

茶を飲みながら、本当にどうしたものか一緒に悩むふりをした。

村人は鬼がいるという恐怖から、桃真たちのいる母屋には決して近づかない。

咲希を母屋に移し、手当てした……というか、志乃は切り落とされた腕を拾い、神の力を使って腕をつけて治してしまった。桃真としては、敵に情を見せるようなことはしたくない。腕を戻し、また戦うためになつたら面倒だ。それでも志乃の意向により、反対であったが傷を癒した。

今は眠っているが、その角は鬼そのもののものだ、決して油断してはならない相手……本当は気持ちを打ち明け、鬼と戦う友となると思っていた桃真には、姉なのではないのかと、抱いていけない家族愛を持ち始めていた。

複雑な事情なのはわかる伊月である。しかし、鬼を退治するという大義名分を持つ以上、この行為は間違いなのではないのか？ そんな疑問を抱く伊月であるが、今は、なにもできない。桃真にける言葉さえ見つからない。

桃真は、この鬼を殺すことができるのか？ そのとき、自分は鬼を殺せるほど力を発揮できるのだろうか？ いや、鬼は殺せる。さきほどだって、一対一での対決なら問題はなかった。ただ桃真が心配だった。桃真の力に不安はなかったが、桃真の意識には不安だった。己の力を過小評価し、自信のない桃真が戦えるのだろうかは思った。けれども、実際、桃真は鬼の力を凌駕した。吸魂の力、元より強い桃真に圧倒的な力を与えた。その力には恐怖した。正直に、桃真が怖くて、一瞬、動けなくなった。あれほどの恐怖感を味わったことはない。巨躯と力と眼光と威圧感を持って鬼神のごとく闘う桃真……鬼を絶する神。

絶鬼神……なんと桃真に合う名だろうかと、一人伊月は思った。

「……動けぬ」

咲希が目を覚ましたが、動けない。伊月が書いた“束縛”の神符が体中に貼られており、あれほど強くても動くことはほとんどでき

ない。

「聞きたいことがある」

回収した、神刃と名付けた手裏剣を握りしめ、桃真は問う。

「なぜ、鬼になった？」

「そのことだったな」

ここにいる全員を一瞥したあと、咲希は目を閉じて、

「なぜ鬼を倒す？」

「……平和を望むから」

「それがお前の望みか？ 本当にそれを望むのか？」

「それがどうした？」

「^{きょうだい}姉弟を探しているというのに？ それが目的ではないのか？」

「……否定はしない。現に、姉に会えた」

「私を姉と認めたか」

「否定はしない」

「……鬼を倒す目的が見つからない。鬼を倒して平和だと？ そんな大それたことを、一人の人間ができるわけがないだろう？」

くすりと笑い、もう一度この束縛から逃げようと身を動かすも、今は神の力からは逃れられない。逃れる力がないのが現状だった。

「……」

「いいか、鬼は力を持つ。神さえも倒すことのできる力だ。その力があれば、この世を支配し、自由に生きることができる」

「自由？」

「おばあさんとおじいさんに育てられ、鬼を退治しろと言われ、旅立たされる。お前は、疑問を持たなかったのか？」

「……」

「お前は馬鹿か？ 無理やり戦いを教えられ、鬼と戦え、などと、疑問を持つのが当たり前だろう？」

「……」

「洗脳されているのだよ、お前は。おばあさんとおじいさんに……」
「違う」

咲希の言葉をさえぎり、桃真は、

「死者が、鬼に殺された死者の声が、お前たちを倒せという。それが洗脳だとしても、現にお前たちは人を傷つけ、殺す。それを悪と見なさない者がいるのか？ 戦える力があるというのに、それを鬼に向けていけない理由があるのか？」

「……その力でこの世を支配すれば、思い通りだ。この世で自由に生きることができる」

その考えは、桃真にはなかった。

「あんた以外の姉はどうなった？」

「……知りたいのであれば、鬼退治を続ける。続けられるのであれば、な」

また、笑った。

自由を求めるから鬼となった？

「どうやれば鬼になれる？」

「……人の心の奥には鬼が住んでいる。その鬼を覚醒させるのは簡単だ。わかるだろう？ 感情が爆発し、怒りに満ちれば人は鬼となることができる」

「それは精神的な問題だ。容姿が鬼になるわけではない」

「鬼の契約を結ぶのだ」

「契約？」

「興味がるのか？ 鬼と契約し、その力を得る。鬼神とでも言うべき存在か？ 鬼にも神がいる。その鬼と契りを結び、力を得ることができる。代償などはない。鬼になれば、気分が良くなる。すべてを破壊しても、逆らう者はいない。絶対的力だ。それは同時に自由を得たことになる」

「力ですべてを手に入れるのか？」

「これほど簡単なことはない。私は自由がほしかった。それだけだ」

「それだけで、鬼に？ 悪となる鬼になったのか？」

「お前と私では価値観が違う。私は、自由を求めるために鬼となった。その程度の代価交換だったら、私には安いものだ」

「あなたは、それでも影ノ身の一族か？」

「今は鬼だ」

「鬼がやられたとき、あなたは表情をゆがめた」

「なにが言いたい？」

「鬼でも慈しむ心、悲しみの心があるのではないのか？」

「……」

「鬼は、僕が思っている以上に非情な生き物ではないようだ」

「……くだらない」

一人で悩みたいと、桃真は母屋を出た。村の中を歩くが、村人は桃真の姿を見ると怯えてしまつて、すぐに家の中に入つてしまう。

……姉を殺すのか？

由恵が問う。

違う、鬼を殺すのだ。

鬼となつた姉を殺すのか？

鬼を殺すのだ。

姉を殺すのだ。

「黙れ！」

村人に聞こえなかったのが幸いだ、桃真は村を出て、鬼が根城にしていたという洞窟へと歩を進めていた。もう話を聞いたから用はない、殺すだけだ。

自分に殺せるのか？ あ的首元に刃を向けることができるのか？

鬼を斬るのに、まるで人を斬るように悩む。罪悪感が心を満たそうとしている。

感情を捨てろ、非情になれ、鬼神となるのだ。

由恵の言葉は最もかもしれない。この迷いはなんだ？ なんの迷いだ？ あれは姉ではない、鬼だ。それを殺すことは正義なのだと解釈しているし、この世がそれを望んでいる。

殺すのだ、鬼を殺すのだ。

洞窟を見つけた桃真は、中に入ってみて生臭さに顔をしかめた。血の臭いだ。こんなところで住んでいたなんて信じられない。鼻

が引きちぎれてしまいそうだ。鬼というのは、こういうところに耐性があるのか？

暗い洞窟を進んでいくと、ふと明るい所に出た。天が裂け、光が差し込んでいる。

「……？」

そこには何もなかった。鬼なりの生活感があると思いきや、あるのはたき火の跡だけが残っている。いや、待て、書物がある。

奥に、石のしたに赤い本が置かれており、ずいぶん痛みが激しい。手に取り、項を開く。

鬼神の如く。

誰が書いたかわからない書き物だ。

己の心に眠る尾の意を目覚めさせる方法、鬼を取り除く方法。

「……」

鬼はときに表面化する、鬼を抑えるために強い精神力を養う必要がある。鬼の存在を認め、鬼の力を味方にせよ。

鬼が、なぜこんな者を読む？ ああ鬼の中で、本を読みそうなのは咲希だけだ。

人間に戻ろうとしていたのか？ 人間になりたいと思っていたのか？

書物を持ち、村に戻る。

自由を求めて鬼となったというが、今は人間に戻りたいのか？

咲希は、自分が生まれる前に鬼退治に行った。最低でも十六年間を過ごしているわけだが、肉体に衰えは見えない。長い間、鬼になり続けたようだ。鬼となつてから、人に戻りたいと考えさせられる事態で起きたのか？

「これは何だ？」

書物を咲希の前に置くと、咲希は眉をひそめ、動揺したのが丸わかりだが、無表情を保とうと必死だ。桃真は、やはり読んでいたのは咲希だったかと笑みを浮かべて咲希のそばに座る。

「人間の戻りたいのか？」

「……貴様には関係ない」

「さきほどは、どれほど鬼が魅力的だと話して置いておいて、本当は人間に戻りたいのか？」

「……」

桃真の言っていることがまったくわからない伊月は、桃真が持ち帰った書物を手に取り、読む。伊月はああ、なるほどと声を上げ、何度も頷き、動けない咲希の額をぺちぺちと何度も叩く。

「……」

先ほどの言葉とは裏腹に、咲希の内心は複雑だった。自由を求めるために力を求めた、力を求めるために鬼と戦い、鬼神との契約を結んだ。それから最高だった。自由を手に入れ、やりたいことをやった。ほしいものを手に入れた。さらなら自由がほしくて力を手に入れようと地力を吸い始めた。一本だった角が二本になった、そこら辺の鬼とは比べ物にならないほどの力と権力を得た。さらに自由を求めるために力を得ていったが、その度に、失ったものがあった。

鬼退治は一人で旅が続けたが、咲希は一人ではなかった。多くの人が咲希を支えた。あ那时的暖かさはうれしかった。咲希がほしかった自由は、そういう人たちに囲まれ、過ごすことだった。しかし、実際に自由を手に入れると、今まで優しかった人たちは、怯えた目で見てくる。暖かく迎えてくれることはなかった。

そんなとき、人に戻りたいと思った。そして村を一つ破壊したとき、ある本を見つけた、目の前にある鬼神の如くという本を。

「鬼神なるものと契約を結んだそうだな？」

「それがどうした？」

「その鬼神を倒せば、契約は解かれるのでは？」

「……可能性は、ある」

「素直だな。本気で人間に戻りたいようだな」

「否定は、しない……」

それを望む。

まったく、この姉は強がりを見せただけか。

「志乃どの、この鬼を封印しておいてくれ」

「桃真!？」

立ち上がる伊月は、拳を握り、怒りを桃真に向ける。

「どういっつもりだ？」

志乃もまた不思議そうな顔をしたが、すぐに舌舐めずりするかの
ように扇子で咲希の足をつつく。

「やめろ、変態神」

「人助けだ。それとも、このまま死にたいのか？」

「……」

「桃真、ここで情を見せるのか？」

「……確かに、僕は情を見せた。この人は、姉だ」

「私は鬼だぞ？」

「契りがなくなれば、人となる」

「桃真! 情けをかけるな! 志乃どのことだ、騙され、またこの
世を破壊するぞ!」

「人になりたいと願うのだ、そんなことをしない。 そうだろう、

姉さん？」

「……私を、姉と呼ぶな」

洒落ではない、ここで鬼を殺さなくては、我々の犬神の一族は報
われぬ。このまま桃真の意見に賛成することはできない、桃真、妾
は鬼が憎いのだ。

「ここで殺す。鬼を殲滅するのじゃ」

「鬼神を倒せば鬼となった人は力を失う」

「そんなもの、待ってられるか」

「時間がかかるのは最初から承知の上だ。今さら、何を焦る？」

「お前に、鬼に殺された者の気はわからぬだろう」

「死者は僕に気持ちを寄せて来る」

「……」

そうだった、桃真は死者の声を聞くことができるのだ。忘れてい

た、桃真は死者の怨念を聞き続け、鬼を退治している。鬼に殺された者の気持ちを、桃真は痛いほどわかっている。それに、目の前には、ある意味、鬼に殺された姉がいるのだ……。

くつと眉をひそめ、死者の声が聞きたいと、犬神の伊月は思った。当の死者、由恵は、桃真の意見に乗り気ではなかった。しかし反対ではなかった。情を見せるなとは言うものの、鬼となった人を元に戻したいとは思っていた。元は人、鬼を殺しても、見方によっては人を殺すことだ。けれども、由恵は言う。

鬼となった人が再び人となったとき、周りの人はその人をどうするのだ？

今までやりたい放題やってきた鬼が人に戻ったとき、間違いなく復讐する。これは大きな問題だ。人に戻りたいと思う者もいれば、鬼のままで一生いいという者もいる。けれども、これは報いなのではないのか？ 鬼となり悪事のかぎりをつくしてきたのだ、人に戻り、復讐されようが、自業自得……とは、桃真には思えなかった。他人のことはどうでもいい、という考えを持っていたら、鬼退治などしていない。

「私を助けるのか？」

「おそらく、そうなる。志乃どのに可愛がれることだ」

「それは、勘弁だ」

笑いはしなかったが、咲希は、すべてが終わったかのように落ち着き、目を閉じて、寝息を立てた。それを見て伊月の表情が剣幕になり、無理やり桃真の手を引いて母屋を出たその瞬間、桃真の面を引っぱらいた。

「お前は甘すぎる。姉だから殺さぬだと？ あれは鬼じゃ」

「急に、どうした？」

「この世はお前が思っているほど甘くはないのじゃ。永紅を見る、身内が身内を呪うほど鬼を憎しむような世なのじゃ、親族がどうなるうと知ったことではない」

「……」

胸倉をつかみ、ぐつと顔を近づける。

「お前が殺さぬのであれば、妾が殺す。お前に期待した妾が間違っていたのじゃ」

「一族を滅ぼされたから、鬼を憎むお前は、僕に何を期待していた？」

「どういう意味じゃ？」

表情をなくし、疑問の念を浮かべる。

「お前の代わりに鬼を退治すると？」

「そうは言っておらぬ」

「僕のやり方だ、それを否定したいなら自分のやり方で旅を続ける。僕と離れて」

「桃真、お前……」

なにか言い返したかった、もつと強く頬を叩いてやりたかった。

けれども、桃真の言葉には重みがあり、ここで別れ、背を見せて歩いて、止まれということはなく、もちろん、追いかけることもない。意志の強いのは知っている、自分の言葉に責任を持つのが桃真である。

「……わかった。お前のやり方で旅を続けよう」

「気持ち、つらいだろうが、お前が一族を思うように、俺に残された家族、三人の姉だけなんだ……」

桃真の気持ち、わからないでもない。ただ、相手が鬼であること。それだけが、気がかりだった。はあと深いため息をつき、桃真の胸に額を当てて背に腕をまわして強く抱きしめた。

「お前、嫌なことを考えているな」

「なにが？」

伊月の頭を撫でながら、伊月の次の言葉を聞く。

「残った二人の姉も、鬼となったと……」

凶星を疲れ、桃真は手を止めた。

伊月が離れ、真剣な目を向けて、

「もしかしたら、鬼になっているかもしれないと、妾は思っただけじゃ」

「どうして？」

「お前の顔、咲希と話をしたときのあの表情、勘の鋭いお前だからこそ気づいたときの表情だった」

「意外に、見ているな」

「たまにじゃがな」

「そうだ、僕は、咲希の話と、死者の声が聞こえないことから、姉は鬼になったのではないのかと考える。憶測でしかないが、そう思えてしかたない」

「そのときは、咲希のようにうまくはいかないぞ？」

「わかつている。そのときは……」

腰の餓牙刀の柄に手を乗せる。

咲希は、志乃に可愛がられることとなった。地力を吸い、力を取り戻した志乃に咲希がかなうわけもなく、祠の中から出ることは許されなくなった。村人は、これでやっと平和になったと桃真たちに礼がしたいと何度も言った。あの、鬼に密告しようとした若者二人も何度もすまないと謝ったが、桃真は恐縮してしまった。

「これは、つまらない物ですが……」

と、風呂敷に包まれた古そうな木箱を持ってきた。桃真はそれを受け取るわけにはいかないと言ったが、伊月は、どうせだから貰っておけと肘で小突かれたので、仕方なく受け取る。

開けてみると、黄金色の輪が入っていた。

「これは？」

「その昔、罪を犯した者に罰を与えるために使われた、金剛輪と言うものです」

「おお、聞いたことがあるぞ。語句を決め、金剛輪をはめた者にその語句を言つと頭が割れるほど締め付けるらしい」

「試しにお前にはめていいか？」

「別の語句で取ることができると聞いたことがあるのう」

金剛輪を手にして、そんな便利なものがあるのかと、伊月と永紅を見る。なぜこっちを見ると伊月が首を傾げるが、永紅はぶんぶん頭を振る。

「そ、そんなものをつけなくても、わたしは桃真さまに従順ですよ？」

それもそうだ。この金剛輪の使い道は、道中考えることにしよう。村人全員が手を振り、桃真一行は咲希の不安を残しながら、大猿が眠るという洞窟へと向かった。

第五章：金剛輪

人が多く通る道に出たとき、桃真たちは茶屋で休むことにした。

茶屋には多くの人間と、狐の耳と尾を持つ獣人と胸が大きく、長い耳を持つ兎の獣人がいた。都に近づくにつれて、獣人の数も多く、その者たちは全員、腰に帯刀していた。旅の者なのは一目瞭然だが、それにしても背中に大刀を背負うあの兎の獣人は、か細い腕で刀を振ることができると不思議だった。

「なあ、伊月」

「んっ？ なんじゃ？」

茶を飲みながら山々の景色を見ながらのんびりとする伊月は、座敷で横になって休む桃真に視線を向ける。

「神さまと獣人の見分け方は？」

「お前、向かいの奴らが神に見えるのか？」

「見えない」

「なぜただの獣人だとわかったのじゃ？」

「それがわからないから聞いている」

「感覚でわかるのじゃよ。志乃を見たときも神さまだとわかったじやろう？」

「神さまの威光か？」

「まっ、そんなところじゃ」

きやあきやあと騒ぐその獣人の旅の一行に、なぜか桃真は興味を示してしまった。特にあの兎の獣人、男だからこそ胸には目がいっしてしまう。そんな桃真に気づいた伊月は、自分の小さな胸をさすり、はあとため息をついた。それに気付いた桃真が、慰めではないが、伊月の肩に手を乗せ、

「十分、お前も魅力的だ」

笑顔で言ってみせる。

「説得力がないのじゃ。永紅の胸も見るこの浮気者が」

「浮気者？　僕が？」

「桃真さまは浮気者なんかじゃありませんよ」

桃真の腕に胸を押しつけてくる永紅は、くふふつと笑っていた。まるで伊月にやり方で、徐々に、永紅は伊月に浸食されているのではないのかと心配になった。

「襲ってくるくせに」

「それはお前がいい男だからじゃ」

悪戯そうな表情。まったく、その笑みにはかなわない。

「もう少ししたら洞窟だね。ねえ、本当にやるの？」

笑いを声がやんだと思ったら、なにか真剣な表情で話しはじめた。
「当たり前じゃない。生死問わず賞金よ？」

……いいことを聞いてしまった。

身を起こし、例の洞窟の話をしている獣人の旅の一行に近づき、
「すまないが、今から洞窟に向かうつもりなのだが、賞金とは？」

「あら、聞いてたの？」

「聞いてしまった」

狐の耳と尾を有する女の子は、鋭い視線を桃真に向けた。警戒しているのか、それとも生まれつきの目つきなのかはわからない。

「洞窟の大猿の話は聞いたことあるでしょう？　退治すると都から賞金がでるんだって」

兎の角と胸と尾を有する女の子が、ちょっと間延びした、ゆっくりした口調で話す。

「賞金……」

伊月に使われた路銀のこともあり、銭に関して敏感になっている桃真。それもそうだが、昨日、一昨日は村のお世話になったが、これからそれが続くことなどない。鬼を倒して銭が出てくるわけがないのだ。そうになったらこの体を使って稼ぐしかない。

鬼を倒せたのだから、大猿くらいは余裕で倒せるだろう。

「伊月、お前が使った路銀の分、稼いでもらうぞ？」

「まさか、大猿退治か？」

「ちょっと、わたしたちが先なんだからね？」

狐の獣人が頬を膨らませ、桃真を睨む。

「倒せたら、の話だな」

善は急げ、だ。ゆつくりとお茶を飲む伊月を急かしながら、永紅が手に持つ団子をひょいっと自分の口に入れる。怒った永紅ではあるが、桃真に置いていかれるのは勘弁だった。それを見た狐と牛の獣人が追いかけるように茶屋を離れた。

「優狐と早兎美」

「なにが？ ああ、名前？」

桃真の両脇には伊月と永紅がいたのだが、その二人と割って入り、桃真の両腕に体を密着させた。

黄金色の長い髪、狐の耳と尾、鋭い目を持つ優狐と、白く短い髪の間から長い耳が伸び、ふわりと優しそうな雰囲気を感じることにできる早兎美は、伊月と永紅がむっとした表情を浮かべているのに気付かず、桃真の耳元で、

「大猿を倒せるの？」

優狐が聞く。

「それがどうした？」

「協力するから、分け前半分ちょうだい？」

早兎美が言う。

「……」

が、この二人にそれほどの戦闘力があるのだろうか？ どう見ても伊月や永紅の方が役に立つ。二人はこれでも神さまなのだが、二人はそのことに気づいていない。なんでもない和紙になんでもない墨を使って筆を走らせるだけで強力な神符となり、守護はもちろん武器としても強力だ。永紅もまた光の矢を放ち、空を飛ぶこともできる。二人とも、鬼との戦いで優秀な神であり、戦人があることが判明した。大刀を持つ早兎美とやらは戦えるとして、短刀二本を持つ優狐はどうしても強そうに見えない。それは見た目だけでなく、戦いを経験し、戦いのために修行を積んできた桃真の本能が囁いて

いた。

この二人は役に立たないだろう。第一に、大猿を倒すと賞金が出るというのも怪しい。洞窟に大猿がいるという話を聞いたとき、そんな話は出てこなかった。鬼退治に途中で大猿退治などするつもりはないが、倒せば人々の恐怖がなくなる、賞金がもらえるのであれば運が良い。

桃真はその程度にしか大猿の賞金を受け止めていなかった。

だから、協力するつもりなどない。

二人を振り払い、いつもの心地よさを求めて伊月と永紅に目を向ける。それが嬉しかったのか、二人は微笑み、桃真と腕を組んで歩く。

「桃真さま、なんだか誇らしげですね」

「両手に花だ」

「嬉しいことを言うのではないか」

「そうか？ まあ、あの二人とも協力していいのだが、裏切られるのが怖い」

「こんなときにこそ吉備団子じゃろう？」

「ああ、そうか」

腰の袋に手を入れると、まだ柔らかい。どんな素材を使えばこんなにも日持ちする団子が作れるのか知っておきたかった。

「二人とも、口を開ける」

振り返った桃真が手にしたふたつの団子に、優狐と早兎美はてなんのことだろうか疑問を抱き、なかなか口を開けようとしなかった。すると、伊月と永紅がずっと動き、優狐と早兎美の脇をくすぐる。

「あはははははっ！」

その隙に、桃真は口の中へひよいひよいと入れてやる。

「あつ、えつ、なに？ お団子？ あら、おいしい」

意外においしいと、二人は微笑みながら、そして桃真を見ながら食べると、なんだか、熱くなってきた。おかしい、熱い、ぼつとする、力が入らない、立っていられない。紅潮し、吐息が淫靡なも

のに変化して、桃真は、団子が熟成したか？　と思わせるほどのものだった。

「やだ、発情期、まだ先だったはずなのに……」

「わ、わたしも……」

「うむ、今さらだが危険な団子じゃ」

「魅了するだけでなく発情させちゃう危険なお団子ですね。でも好きです」

永紅はすっかりと桃真の吉備団子に惚れていた。本当なら毎晩食べて毎晩色々なことをやりたかったが、そんなことをしてはいつか本当に狂ってしまいそうで制限はしていたが、いざその団子を目の前にするだけでときどきしてしまう。

「なに、食べさせたの？」

「協力してもいい、賞金も分けてやろう。しかし裏切られるのが嫌だから、裏切られないようにするための団子」

「嘘でしょう……すつごく、なんか……」

「気持よくなりたいのじやろう？」

伊月が優狐の耳元で囁く。

「桃真さまはお上手ですよ？」

永紅が早兎美の耳元で囁く。

人が多く行き交いする道で、二人は自身の体を抱くようにして地面に伏せてしまい、はあはあといやらしく息をする。

「桃真、吉備団子の媚薬効果は恐ろしいな？」

「僕も、今になって怖くなってきた」

「な、なんでもするから、本当に、ちょっと、これ、とめて……」

「止めるって……」

さすがにこんなことになるとは思わなかった。地に伏せ甘い息を吐き、誘うような姿勢の美女二人を、このまま放置したよからぬ輩になにかされてしまう。吉備団子を食わせたのはこちらだし、ここは、吉備団子を食べさせると指示した伊月になんとかしてもらおう。

「おい、お前が食わせると言ったんだから、なんとかしろ」

「なんとか……それは桃真の役目だろう」

「こ、こんなところですか？」

「おい、二人とも、茶屋の隣に宿屋があった。そこで休もうか？」

「そ、そうする……」

くそ、面倒が起きてしまった。なんてことだ、吉備団子なんて食べさせるべきではなかった。なんでまたこんな二人に関わってしまった？ あのまま話を聞いただけ聞いて勝手に行けばよかった。話しかけるとは愚かだった。

伊月と永紅が二人に肩を貸し、なんとか先ほどの茶屋の辺りまで戻り、宿屋に入る。

それからは、もう、いつも通りだった……。

「あんな、団子、食べさせるから……この、ひきょう者！」

優狐にきつと睨まれて、ああだこうだ言われて、確かに、こんなことをしては男の恥だと考えたが、元はといえば、永紅のときも今回も伊月の所為だ。恨むなら、伊月を恨むことだ。

そうこうしている内に夕方になり、結局予定外にもこの宿屋に泊ることにした。部屋を同じくした五人は、それぞれの身内話をしながら晩の飯を進める。

「鬼退治？ 本当に、鬼退治？」

「もちろん、さきほどだって鬼を倒して来たところじゃ。その内の一体が強くてのう、さすがのこの桃真も斬られた」

あとで糸と針を借りて直してあげます。と永紅に言われたのでそのままにしていた。本当なら村で服に付いた血を洗い流したあとに直すつもりだったが、それ以前に咲希のことがあって問題にもしていなかった。

「さすがのつて、ただの人間なのに、鬼に勝てるの？」

「本当にただの人間だったか？」

「……むっ」

と、さきほどの行為を思い出し、桃真を見直す。団子の効果は個人差があるようで、優狐と早兎美はまだ吉備団子の効果が残ってお

り、まともに桃真のことが見られないでいる。酒には弱い人なのか
もしれない。ただ、桃真としては吉備団子に使い方はもう少し考え
る必要があるし、その部分で人間の判断をしてほしくない。

「それで、お前たちの目的は大猿か？」

「浪人だ」

「浪人？」

久しぶりに酒を飲みながら、桃真は話をする。

「女の獣人二人、珍しいか？ 遙か南の里から都に上京だ」

「その途中で大猿の話？」

「そういうことです」

ばくばくと並べられた料理を食べる早兎美には、どこか永紅と同
じような部分が見られる。ぴんと耳を張る早兎美は、料理以外に目
を向けることなく、聞かれたことをただ答える。

「女二人で旅するなんて、わたしには怖くてできません」

食事を終えた永紅は、今まで興味があつたものの手を出すことの
なかった、果物の種を使った強い酒に手を出す。伊月はちょっと驚
いた様子で、永紅の杯に酒を注ごうとしたとき、

「永紅、飲んだら次の日起きれなくなるぞ？」

「ど、どうしてですか？」

杯に口をつけようとしたとき、桃真が忠告した。

酒は飲むが、少量で酔ってしまうのだから、こんなものを飲んで
は倒れてしまう。

現に、酒の強い桃真でもこの酒は強いと感じる。

「吉備団子に弱い奴は酒も弱い」

「そんなことないですよ？」

と、一口つけたとき、くつと表情を歪めた。

「旨いか？」

優孤が聞く。

「あんまり、おいしくないです……」

が、もったいないという意地が出て全部飲み干す。

「知らんからな……」

一杯飲み、窓を開けて、三日月の光りに照らされる山々を眺める。心と風景を見ていると、村を思い出す。村で過ごし十六年を思い出したあと、すぐに咲希を思い出す。というより、咲希と別れてからずっと考えていた。無意識に、心の奥にしまっておいたが、何もなくこうしているとすぐにあの顔が浮かぶ。

皮肉も微笑んだときの顔に、今まで感じたことのない気持ちが心を揺さぶった。子供のころ、おばあさんの隣で寝ていたときのような安心感を、咲希から感じられた。ただ、心の奥では、あの角の存在を忘れることができない。

額から伸びる、鋭利な双角。桃真の持つ神刃に似ており、触れると手を傷つけそうで怖かった。あれは、忘れられない。

「とうしたんですか？　しょんぼりしちゃって？」

大そう酒を気に入った永紅は、杯片手に桃真の隣に座り、窓から同じ光景を見る。

「佐島さまのところから出てまだ日が浅いのに、こんな風景が懐かしく感じます」

「山と山の間に村があつて、その明かりがなんだか心地よい」

「他のこと、考えてましたよね？」

頬を赤くし、桃真に身を傾けて杯を飲む。永紅は思った以上に人の顔を見ている。勘は鈍く、鬼と戦ったときは不安だったものの、意外に活躍してくれた。そういうことを思い出しながら、桃真は永紅の杯に酒を注いでやる。

「咲希のことを、考えていた」

「ああ、お姉さん」

ちらりと桃真は伊月たちを見るが、三人は三人で話に盛り上がっている。なんの話かは、桃真には興味がなかった。

永紅は桃真と腕を組み、鼻先を近づけて、

「桃真さま、今は咲希さんのこと考えても仕方ありませんよ。志乃さまにまかせましょう？」

「それもちよつと不安だ。身動きできないところを、なんやかんや、いたずらされてるだろうな」

「報い、として諦めるんじゃありません？」

酔っているから、軽い口を聞く。

「かもしれない」

それでも、桃真には咲希の気持ちが少しだけわかるような気がする。今まで好きなよう生きて、好きなように自由を手に入れた。そして、好きなように悩み、人間に戻りたいと願った。彼女は、自由を手に入れるために鬼となった、それを軽い代償だと言った。だったら、志乃にいたずらされるくらいで人間に戻れるのであるなら、軽いものだ……と、思う。

それに、考えることはまだある。

「……」

「咲希さんのことが済むと、今度は……」

「お前、酒を飲むと鋭くなるな？」

「そうですね？」

くすくすと笑い、長い髪が邪魔だと、紐を取り出して髪を束ねる。綺麗なうなじが見えたとき、どきつとした桃真は、もう一度、一瞬だけ見たあと、なるべくそこに目を向けないようにと外を眺める。

「二人のお姉さんのこと、ですよね？」

「ああ、もしかしたらと思ってしまっ」

「そんなことを考えても、仕方ありませんよ？」

「全部仕方ないで済ませようとするな」

「だって、考えたって、本当に仕方ないですもの」

空になった杯が手からこぼれ、永紅は桃真の肩に首を預けて眠ってしまった。

「……困った神さまだ」

前髪を寄せて、永紅の顔をよく見る。

やはり可愛い顔をしている。伊月は、恥を感じたときや、油断したときにしかこんな顔を見せない。そこがまた男心をくすぐる。も

しかしたらそれも伊月のよく使う手なのかもしれない。

「わはははははっ!!」

大声を出して笑う伊月たち。とても今日の死闘を戦い抜いた犬神さまとは思えない。こうも簡単に切り替えることができる性格がうらやましい。

「はぁ、疲れた。湯浴みでもして寝るか」

「部屋は一つなのか？」

「割り勘じゃ」

「伊月、お前が路銀を使い込んだ所為だからな」

「わかつておるわ」

永紅を寝かせ、桃真は外衣を脱ぎ、すでに敷かれた布団の上に横になる。

「なんじゃ、もう準備ができたのか？」

たたつと走り、仰向けの桃真の上に馬乗りになる。

「……やめてくれよ、体が持たない」

「それでも男？」

優孤はふらつきながら桃真の横に正座して、顔を近づけて酒臭い息を吐く。

「……本気で、本気でやめてくれ。明日は大猿退治だ」

「それもありますから、伊月さん、優孤さん、お風呂に行きましょ
う?。」

「寝たら、いたずらされるぞ?」

耳元でささやかれ、桃真は久しぶりに心の底から恐怖を味わい身震いをした。

「さっさと行け」

「きゃっ」

伊月の尻を叩く。意外にも柔らかく、伊月本人もわざとらしく女らしい声を上げた。

「永紅は起きそうにない。桃真、戻ってくるまでに布団を敷いてお
け」

「ちつ、僕かよ……」

伊月たちが部屋を出た後、桃真は立ち上がり、永紅を抱き上げて布団に寝かせて布団を敷こうと押し入れに体を向けたとき、くつと袴を永紅に引っ張られた。

「一緒に、寝てくれませんか？」

ははつと笑い、桃真は膝について永紅の頭を撫でた。

「さびしくなつたか？」

こくりと頷く。

「いつもは佐島さまと一緒に寝てましたから、それに、桃真さまから出会ってからずっと一緒に寝ていますから」

「布団を敷き終わったら、一緒に寝てやるよ。伊月たちが風呂に行った、お前も行つてこい」

「そうします……」

のそつとたるそうに起き上がり、ふらふらと部屋を出ていった。

やっと一人になった。桃真は布団を敷き終わると、宿屋の仲居が食器類を片付けていった。それを見終えたあと、布団の上に寝転がり、目を閉じた。

その貳

「……どうした？」

「僕も鬼を退治し、この世を救うという大義名分を重く感じている」

「鬼になりたいのか？」

「まさか。ただ、咲希の言う、自由を求める気持ちもわかる」

「自由とは個個人によって解釈が違う。お前の自由はなんだ？」

「……さあな。伊月たちと農作物を育てながら過ごすことかな？」

「鬼を倒せば自由が手に入る。そうは考えないか？」

「もちろん、そう考えている」

「なら、問題はないだろう？」

「……いつか、獄劫犬ごくこうけんを呼び出すことになりそうで、怖い」

「獄劫犬か……凶暴な野獣だ、あんなものを召ぶとなると、お前もただでは済まなくなる。気をつけろ、お前は吸魂の力はまだまだだ」

「わかっている」

飯を食う必要はない由恵。

由恵は死人、存在しない存在。それなのに、由恵は自分の目の前に御膳を並べ、箸を持つ。

「なぜそんな真似事をする？」

「死人になっても、飯の味は忘れない」

そんなとき、話に関係ないが、桃真は、寝ている今、もしかしたら襲われているのではないのかとはっと目を覚ますも、部屋には誰もいなかった。ほっと安心して死者の世界に戻ると、由恵は飯を済ませて茶を飲みながら、煙管をふかしていた。

「のう、桃真。わしはお前が鬼を倒すのであれば、何も言わない。

我々の願いは鬼を滅すること。こう言っすがては悪いが、お前が鬼退治を放棄したとき、我々はお前の足に縋すがりつき、永遠の苦しみを与えるだろう」

「……いきなり、何を言うかと思えばそんなことか。……だろうな、伊月を見ればわかる。僕を許さず、僕が死んでも恨むだろうな」

「我々には、もう、お前しかない」

もう、お前しかない……その言葉に、桃真は妙に引つ掛かった。

伊月たちは風呂からあがってくると、火照った体を夜風で覚まそうと屋根の上へと昇って行った。やめとけと一応、桃真は言うが、永紅以外はそんなことを聞くがなかった。永紅は一緒に寝ましようとしてきたが、次は自分が風呂に入る番だと部屋を出たところで、廊下で仲居が何か話をしていた。

「今日、大猿の討伐に行つて三人が亡くなったそうよ」

「三人も？ 馬鹿ね、手を出さなければなにもしないのに……」

「帝さまが、大猿を倒したら賞金を払うと言つたのよ。最近のことよ？」

「前もそんなことを言つて、ここいらもにぎやかになったことがあつたけど、そういうわけでまた人の通りが多くなつたわけね」

「けが人がこの宿屋に運ばれたことだつてあつたんだから」

だからみな、帯刀していたのかと納得した桃真は、寝食いを持つて風呂へ向かう。

「……ああ、あの女ども、人の体をなんだと思っている」

加減を知らない連中だ、本当にその内、本当に死ぬかもしれない。

「……ふう、どうやら今晩は襲われずに済みそうだ」

桃真が戻ったとき、伊月たちは寝ていたが、ただ永紅だけが起きて、桃真が戻るのを待っていた。びくりと桃真は身を震わせたが、ただ一緒に寝たいと言つたので、しかたなく布団一枚、二人で眠る。「すつごく安心します」

にこりと笑うが、すぐに目を閉じて寝息を立ててしまった。永紅はぐつと体を密着させ、足を絡ませてくる。そちら側にその気がな

くとも、そんなことをされては歯止めがきかなくなる。ここは我慢して、疲れた、眠いと強く意識するとそのまま眠ることができた。

このまま、朝になることを願う……。

桃真の願いは叶った。

桃真はここにいる誰よりも早く起きて、宿屋の裏で餓牙刀を抜き、一人稽古する。仲居がそれを見て、区切りのいいところでお茶を持ってきた。汗をかき、井戸で水を浴びて部屋に戻る。

「……んっ？ 朝早いのね」

桃真の足音で目が覚めた優孤は、大きなあくびをする。障子を開けて、太陽光を浴びる。黄金色の尾を左右に振り、ぐぐつと背伸びをして着替えを始める。つま先で早兎美を蹴り起した。

当麻もそれに習って伊月を起こす。

「いたっ！ な、なにをする！」

跳ねるように勢いよく起きる伊月は、なんと裸だったが、慣れている桃真は、

「起きろ、行くぞ」

「……蹴ることはないじゃろっ」

まだまだ眠そうだ。伊月は桃真に蹴られても目を覚まさない永紅の布団にもぐりこみ、抱きついた。

「ん、桃真さま、いきなりすぎますよ……」

微笑み、ぎゅつと伊月を抱き返す。

寝ぼけている。

「永紅は温ぬくいのう……」

「えっ？ い、伊月さん？ ちょっと、離れてくださいよ！」

やっと全員起きたところで、朝食を取ったあと、各自装備を確認する。

「その刀、ずいぶん珍しいものだな」

と、優孤は自身の短刀の砥石で簡単に研ぎながら、桃真が持つ毘沙門刀に興味を示した。が、やはり伊月と同様に触れようとはしない。顔を近づけ、なにかと鞘の形を見たり、臭いを嗅いだりしてい

る。

「なにかわかったか？」

「わたしは、鬼と会ったことがある。でもね、赤鬼で、全然凶暴じゃないの」

「赤鬼なら会ったことがあるさ。弱弱い姿をしていた」

「それは置いといて、その鬼と、同じ臭いがするの。なんか、血、の臭いに近いかな？」

「血の臭い……」

毘沙門刀が血を吸ったのを、桃真は見た。心なしか、刀身が赤くなっているようにも思える。少しだけ抜刀し、その色は依然と同じ、鈍く光っていた。

「これは、恐ろしい魔刀だ」

「それで鬼を斬ったの？」

「溶けた飴のように斬れたわ」

「伊月、過大評価しすぎだ」

「本当に鬼を斬ったのかすらまだ信用できないのよねえ」

大刀を手に、柄に布を巻いていく早兎美は、目を細めて桃真を見る。その視線に疑わしい眼そのもので、桃真はちよつとだけむつとした。鬼を倒したのは事実であるが、それを証明する術はなく、ただ口で言うしかない

「桃真さま、腕を斬られました。あつ、服を縫うのを忘れてました」

永紅はぱちんと手を叩き、宿屋のおかみに針と糸を借りてきた。

「ささ、すぐに終わりますから」

「永紅は、縫物ができるのか？」

「これでも料理もできますよ？ 村では、みんなに優しくしてもらいましたから、色々なことを教えていただきました」

桃真は着ている服を脱ぎ、永紅に渡す。すいすいと針を進め、綺麗に縫っていく。

「うまいものじゃのう、妾は不器用でそういうのは苦手じゃ」

「心ががさつな伊月さんには一生無理です」

唯一の得意だと誇らしげに、永紅は伊月に食って掛かった。

意地を張る伊月も、

「妾だつて、嫁にいけば覚えるさ」

「桃真さまは、嫁にするなら家事ができる女の方がよろしいですよね？」

「と、桃真は、永紅と妾、どちらを嫁にする！」

意気込んだ物言いに、優孤と早兎美は圧倒されたが、くすくすと笑いを堪え、桃真の反応を窺うように見ている。その視線が痛いものの、伊月、永紅、そして優孤に早兎美の視線は矢の如く。桃真にはなんと答えればいいのか迷った。余裕な表情を浮かべ、服を縫う永紅に、顔を真っ赤に、今にも涙を流しそうな伊月……ここで下手な回答をすれば、どちらかに殺される。

こついうときに、どうすればいいのか、おじいさんが教えてくれた。

「まだ嫁はいらん！」

毘沙門刀を抜刀。

「きゃあああああああ！！」

全員が耳を閉じた。そうか、これは神さまに聞こえるのではなく、獣人に聞こえるものなのだ。いつか聞いたことがある、獣人は、その耳で人には聞こえない音を聞くことができる。だから毘沙門刀が発するという音を、彼女たちには聞こえるのだ。

「た、頼むから、お侍さま、刀をお収めください！」

優孤の必死な願いに、またも甘い桃真はすんなりと鞘に刀を戻す。

「こついうときだけ他の力に頼る……」

尾をしょんぼりさせ、伊月は心底悲しそうな顔をした。どうしてそんな顔をするのか、桃真はわかっていたが、ここでまため事を起こすつもりはない。内輪での問題はすべて鬼退治が終わってからだ。

「怖い刀、そんなものを持つてるなんて、やっぱり鬼退治をしているのかも」

「まだ信じてなかったか。さっさと行くぞ、獣人お二人の腕前を見せてもらおう」

くいつと顎を揺らし、伊月と永紅は優孤と早兎美を見てにんまりと笑みを浮かべる。試すつもりはないが、大猿退治をすると言い張っているのだが、それなりに力を見せてもらいたい。

獣人の二人は、顔をひきつらせて、もし大猿に敗れて殺されそうになったら、この人たちは助けてくれるのだろうか？ という不安に襲われた。

道を進み、山が近づいてきたと思ったら坂道になり、その奥に、洞窟があった。入り口は非常に広いが奥は暗い。桃真はそこら辺から棒切れ数本を広い、伊月に渡す。伊月は、胸から“焚き火”と記された神符を貼り付け、松明を作る。各々それを手にし、緊張しながら洞窟へと入る。その際、山を登って迂回してきた旅人に、

「大猿に食われる、やめておけ」

真剣な表情を向けられて、優孤と早兎身は怯んだ。

鬼を倒した実績を持つ三人は、余裕の表情を浮かべた。

桃真は、今まで自分の力を信じるのがなかなかできなかったが、徐々に信じられるようになってきた。それでもまだ、大猿に対して自分の力が有効なのか、という部分では過小評価している。ただし、本気になれば勝てる。

「ほらほら、進みなさいよ」

永紅に急かされるも、ゆっくりと歩を進め、松明片手に刀から手を離そうとしない二人はびくびくと、まるで仔狐と仔兎だ。

「だって、腕に覚えがあってもやっぱり未知の物体に恐怖を抱くのは自然なことよ？」

と、優孤。

「そうですよ、相手は民に恐れられる大猿。噂では鬼ですら怯えって言うんですから」

と、早兎美。

「この洞窟はどのくらい長いのだ？」

と、桃真。

「昨日聞いておきました。歩いて半日だそうです」

しっかり者だ、永紅は答える。けれども、手は桃真の服を掴んでいる。

「半日も？ それでも迂回するより近いわけだからな。しかし、誰がこんな洞窟を？」

「大猿だろうと、噂されていますよ？」

「すごい力だ。よく大猿退治に挑む気になったな？」

「そりゃあ、岩に食われて自由に動けないって聞いたからに決まってるじゃない」

「敵の様相を知ってこそ勝てる戦ができる。戦の基本だ」

「そんなの、わたしたちが知るわけ……んっ？ なんかい……」

「なんだ？ 大猿か？」
松明の明かりを前面に押し出す。こういう暗いところでは伊月や桃真は強みを見せる。暗殺術を会得していると桃真は気配で、伊月も敏感で気配を感じることができが、それ以上に鼻が効くも、決して洞窟の奥から感じるのは嫌な気配ではない。

「のう、桃真。妾には向こうにいる者が人にしか感じられないのだが……」

「僕もそうだよ」

人、ただの人の気配。殺気というものは感じないものの、大猿がいる洞窟を、明かりなしで通る者がいるわけがないと考え直し、柄に手を当て、姿勢を低くする。

伊月は焚き火の神符を取り出し、何枚かをふわっと投げるとそれらが壁に張り付き、明かりが洞窟を満たす。

「あら、女の人」

また女……僕は、女難の相でも出ているのか？

自身の周りにいる女性が全員、悪いというわけではないが、なんらかの問題があるという考えを、前方にいる女性を見て吹き飛ばした。

岩に食われた大猿、その意味がわかった。

「あれが、大猿？」

岩の壁に下半身を飲み込まれ、ぶらりと上半身のみが自由に動かせる状態。赤に近い短い髪は砂埃にまみれ、もう何日、いや、何ヶ月、何年もあの体勢のままで過ごしていた、という年月を感じる。

決して大猿には見えないが、人は見かけによらないのが世の中の常だ。警戒する桃真に対して、優孤は「あんなの簡単じゃん」と言っていた。その間違いを桃真は正そうとはしなかった。確かに倒すのは簡単かもしれない。敵は自由を奪われ、攻撃範囲は決まっている。あれなら餓牙刀の一撃で滅することができただろう。

臆病な永紅は弓を引き、ぐぐつと力を入れた。

一本の光矢が永紅の腕の程も太くなり、放ち、命中したのならただでは済まない。

胴体に巨大な風穴が開く。

「永紅、その場で援護しろ。優孤、早兎美、刀を抜け。気をつけろ、決して相手を甘くない」

「大丈夫大丈夫、これでも腕に覚えはあるから」

いや、危険だ。

目を凝らしてよく見ると、大猿は右手に小さな棒を持っている。

あれで角があつたら完全に鬼だ。

「桃真の言うことを聞いておけ、死んだら元も子もない」

早兎美は素直に桃真の話を聞いたようで、大刀を肩に持ち、いつでも振りおろせるように体勢も低く、優孤と一緒にゆっくりと進む。いざというときは永紅の光矢が大猿の頭部を貫くだろう。桃真ももちろん、伊月もいつでも攻撃できるようにしているが、あの大猿、優孤たちが近づこうとしてもまったく反応を見せない——と思った次の瞬間、がっつと身を起し、手にする棒を向けた。

棒が勢いよく伸びて、優孤の肩に直撃した。

「優孤！」

慌てる早兎美ではあったが、棒が横に振られ、早兎美は大刀で防

いだが、

「あつ！」

壁に弾き飛ばされた。

軽い振りだった。

長い棒の先端にそれほどの力が加わらないというのに、大刀を持つ早兎美が簡単に吹き飛ばされた。

「永紅！ 伊月！」

右手に神刃を四本持ち、餓牙刀を逆手で握りしたまま走る。永紅が強大化した光矢を放ち、そのあと三本同時に、何度か矢を放つ。大猿は棒を元の長さに戻し、今度は巨大化させて矢を振り払う。

桃真が神刃を投げ、棒の注意をそらしたところで、餓牙刀で棒を切り落としてやろうと思ったが、

「下がれ！」

いつのまにか、大猿は棒をもう一本持っていた。

「くっ！」

地に身を伏せ、伸びる棒の攻撃をかわした。

伊月の言葉がなければ、桃真は直撃を食らっていた。すぐに起き上がり、餓牙刀、毘沙門刀を抜き取る。

振動し、戦いの空気を感じた毘沙門刀は、敵は誰だと尋ねてきたようだった。敵は大猿、あの大猿だ。意志を送ると、突然大猿が棒を落とし、耳をふさいだ。

「勝機！」

餓牙刀と毘沙門刀を振り上げ、跳び、その胴を斬り裂いてやろうとしたとき、大猿は身をひねり、なんと両手で餓牙刀と毘沙門刀の刃を掴んだ。

「馬鹿な」

岩を斬り、鬼を斬る刀を、素手で受け止めた。

握っただと？ 引きぬこうにも、このまま斬ろうにもびくともしない。毘沙門刀が桃真の意志に応じ、激しく振動する。

「いたっ！」

毘沙門刀と餓牙刀を離した大猿の手からは血が流れた。

血が流れるのであれば殺せる。

大猿の表情が歪む。落とした棒を持ちなおし、きつと桃真を睨みつける。

むう、別嬪だ。ここに長いこといるのだから、顔は汚れているが、それすら吹き飛ばす跳びきりの美人。けれども牙を見せ、睨みつけられると怖さがある。じりじりと距離を開けるが、あの伸びる棒がある限り、距離を開けても意味がない、近距離での戦闘も怖いものだ。あれほどの怪力を持つのなら、ちよつとした動作でも気を抜けない。

「さつさと死になさいよ！ あんたらで百人目だ」

噛みつくように叫ぶ大猿の言葉が洞窟の中でこだまする。はてさて、なんのことを言っているのだ？

「……あつ、もしかして、呪いですか？」

はつと気づいた永紅が、弓を下げ、言った。

「呪い？」

「勘が鋭いな。あたしは鬼に呪われた」

「鬼に呪われた、だと？」

まただ、また呪いだ。女運が悪い上に呪いまで呼び寄せるなんて、吸魂の力の一種なのかと疑問すら抱き始めた桃真は、がくつと肩を下げて刀を鞘におさめる。

「なんのつもりだ？」

大猿が騒ぐ。

「呪いに関わるのもう面倒だ。お前を倒して帝から賞金をもらおうと思ったが、やめておく」

「貴様、あたしをなめるのか？」

「百人目、とか言ったな？ 百人殺さないと呪いは解けないと？」

「察しがいいな、百人殺さないと岩から抜け出せない」

不用心に桃真は大猿に近づく。

「桃真、危険じゃ」

大猿は棒を握りしめ、構える。それにお構いなく、桃真は大猿の前に立ち、その岩に触れる。

むう、永紅よりも大きい……。

目が胸元にいつてしまったが、すぐに大猿を食う岩を見る。大猿を浸食するように岩が伸びて、まるで生きているようだ。大猿の力があれば簡単に破壊できるのではないのかと思うのだが。

「その力があれば抜け出せるだろう」

「岩が生きている。あたしが攻撃すると岩があたしを締め付ける」
「ほう」

が、桃真ならこれを破壊できる自身があつた。そんなことを思ったのは、鬼に対して非常に有効的なのではないかと感じたからだ。軽く棒を振るだけであの大刀を軽々しく持つ早兎美を吹き飛ばし、隙のない攻撃で桃真を攻めたあの技。味方にできるのであれば、ここで救つてやつてもいい。

言うことを聞かなければ吉備団子……さて、金剛輪、金剛輪をここで使うのだ。

懷から取り出した金剛輪を見た大猿は、一体なんだという顔をしているが、すばやく桃真が頭にはめたとき、まずいと感じたらしい、金剛輪を取ろうと思ったが、ここで棒を捨てたらやられる、しかしこの金剛輪にもなにかあると、どうしようもなく棒を振り回す。

「伊月、どうすればいい？」

「語句を決める、その語句で金剛輪はしまる」

「語句？　しまり？　なんのことだ？」

「天罰」

桃真の一言。

「……？」

何も起きない。そう思った瞬間、大猿が顔をしかめる。

「いたたたたたたっ！！」

思わず得物である棒を落とし、金剛輪を外そうと必死になるも、馬鹿力でも外れそうにない。顔を真っ赤にしているのは、痛みに耐

えているのか、それとも外そうと力を入れているのか、大猿は諦めて荒い息を立てて桃真を睨んだ。

「てめえ、こんなことをして、ただで済む——」

「天罰」

「いっただああああああ！」

ぶんぶん体をねじり、金剛輪の痛みから逃れようとしたが、結果としてそれはできなかった。桃真のはめた金剛輪は、天罰の語句に対して反応し、大猿の頭を締め付ける。怪力の持ち主であるこの大猿でさえ外すことのできない輪を、長老はどこで手に入れたのだ？ その光景を茫然と見ているだけだった。桃真が鬼を倒したということ、どれほどの力を見せてくれるのかと、すこしばかり期待して優孤と早兎美であったが、見て見れば、大猿の頭に黄金色の輪をはめて、天罰と言っただけだ。しかも、天罰と発すると大猿は苦しそうな顔をする。

一体、何が起きたというのだ？

「一応聞くが、お前が大猿か？」

「そうだよ、この輪つかを外せ」

「僕たちはこれから鬼退治に向かう。どうだ、一緒にこないか？」

「馬鹿か、あたしは鬼にやられたんだ。呪いが解けたら山の奥で静かに暮らすさ」

「鬼に復讐したいと思わないか？」

「鬼に復讐された」

「なら復讐しよう」

「てめえは馬鹿か？　いくらあたしが怪力持ちでも、鈴鬼りんぎには勝てない」

「鈴鬼？　女の鬼か？」

咲希が浮かんだ。

「そうだよ。くそつ、どうなってる、外れねえぞ」

桃真と話している間、ずっと金剛輪と格闘する大猿に対して、女の鬼に、嫌な予感がして仕方なかった。

「第一、あたしはここから出られ……何をするつもりだ？」

気づけば、大猿の得物を桃真が足で手の届かないところに置いている。本人は、中腰で居合の体勢、毘沙門刀が震える。

「こ、殺すのか？ このくそやろう！」

慌てて棒を拾うとするが、ひょいっと永紅と伊月が手に取り、
「どうやって伸びたのじゃ？ からくりか？」

二人して棒に興味津津だ。

「てめえら、こら、返せ！」

「動くな、外せば腕の一本じゃ済まなくなる」

「どういつつもりだ！？」

「助けてやる、仲間になれ」

「なっ……」

まさに目にもとまらぬ速さ、神速、一瞬のうちに、鞘から刀が五度抜かれ、六度おさまった。ここにいる者、誰も桃真の太刀筋を見ることができなかった。

なんと速い、太刀、この者、ただの人間ではない。大猿は、自分の身が軽くなったことを感じて、次の瞬間、顔面から地に落ちた。

「岩が、斬れた？」

下半身にまわりつく岩はぼろぼろと砕け、尻から細く長い尾を伸ばした大猿は自由を得た。

西洋の、体に密着する服を着ている大猿は、立ち上がろうとしたが、長い間動かさなかったために膝が震え、すぐ腰についてしまう。

「や、やった！ これで自由だ！」

しかし大猿は、なんとか壁に手をかけて立ち上がり、背を向けて逃亡しようとした。

「天罰」

「いたたたたたたたっ！」

が、そんなことを桃真が許すわけもなく、岩に食われたときとは比べ物にならないほど、戦闘力は下がっていた。腰をついたままで

は思い通りに棒も使えない。

「大猿、名前は？」

「いったあ、なんだよこれ？」

「名前はなんだ？」

「あつ？ ああ、大猿神の橘花きっかだ」

「ぷっ」

笑ってしまったのは、大猿神を名乗る橘花と桃真以外だった。

「か、可愛い名前のう？ 橘花、誰が付けた名前だ？ あはははっ」

「伊月さん、笑ったら可哀そうですよっ」

「わ、笑うな！」

顔を真っ赤にするも、得物は伊月と永紅に取られているし、立てない。反撃したい衝動を何とか抑えたと思ったら、ふるふる身と身を震わせ、うとうなり出し、驚いたことに、涙まで流した。

「お前たち！？ 気にするな、泣くな、なっ？」

くわっと桃真が四人を叱咤するも、笑い声はやまない。橘花ちゃんと言つて、桃真はぐしぐしと涙をぬぐう橘花の頭を撫でてやった。「お前、あたしなんか助けてくれるし、笑わないし、優しい奴だな」ぽつと、今度は別のことで頬を紅潮させる橘花に、伊月がぴたりと笑い声をやめ、

「桃真は妾の婿じゃぞ！」

警告、のつもりだろう。

さきほどまで強気だった橘花、今は囲まれどうしようもなく、唯一の味方と見た桃真の袖を掴んだままだ。

そつえば、呂鬼もこんなことをしていたな。

「ねえ、どうするの？ 大猿討伐でしょう？」

優孤は、生きても死んでも構わないという話だと再度桃真に言ったら、それでは橘花を連れて行こう、そう言った。しかし、このまま橘花を連れていけば牢獄に入れられる……と早兎美はごちゃごちゃ言いだした。

「怪力の持ち主だ、牢獄なんて簡単に破壊する。それなら僕たちと行動させた方が利だと考えるさ」

「あたしを、連れていくの？」

「鬼退治だ、お前の力が役に立つ」

橘花は、すこし悩んだ顔を見せた。鬼の呪いを解かれた恩はあるし、こんな目に合わせた鬼にも復讐したいという気持ちがあるが、また鬼に呪いで掛けられたらたまったものではない。二度とこんな洞窟で過ごすものか……さて、この頭の輪がある限り、この男から逃れられない。

悩むなどの、意味のないことだった。

この輪の締め付けは異常だ。頭がか割れてしまいそうだ。どんなに力を込めて取ろうとしてもびくともしない。信じられないほど頑丈だ。

「……どうせ、嫌って言ったら輪を締めるんでしょう」

ぺたんと座りこみ、橘花のご機嫌斜めに吐き捨てた。

「そうだな、断ったらその頭の金剛輪が頭を締め付ける」

「もう、断ることできないじゃない」

ということ、橘花を旅の供として迎え入れたが、橘花は自力で立つことはもちろん、歩くこともできない。仕方なく桃真と永紅が肩を貸し、洞窟を進むこととなった。

意外に背が高くと、長身の方の桃真と永紅は橘花を見た。その橘花は二本の棒を楊枝ほどに小さくして、髪の毛の中に隠した。

「その棒、自由自在に扱えるのか？」

「如意棒にょいぼうか？ そうだよ」

「ずいぶん便利な道具じゃのう」

「誰から分捕ったか知らないが、鬼から奪ってやった」

「お前、鬼を殺して呪いをかけられたのか？」

「そうだよ、あいつらは、人は愚か神さまであるあたしたちまで殺しやがった。復讐だよ」

「返り討ちか？」

「百人殺したから、百人殺さないと呪いが解けなかった」

徐々に歩くことに慣れてきたのか、橘花は一人であること言って両手を上げて背伸びをした。軽く跳び、体を慣らした。

「傍若無人、死ぬことのない凶悪な大猿と聞いたけど、飼い馴らすのは簡単なもののね」

呟いたつもりだったが、優孤の言葉は橘花の耳に入ってしまった。橘花は頭から如意棒を取り出した。如意棒は太く、長くなり、伸びて優孤の髪をかすめた。

「ひっ！」と声を出した優孤に、橘花が、

「あたしは、首輪をつけられた犬でも、籠の中の鳥でもない」

明らかに伊月と永紅を見てのことだったが、逆に二人がむかつとしてきつい目つきになる。問題が起きる兆候だと悟った桃真は、さりげなく毘沙門刀の柄を握り、かちかちと音を鳴らす。

「な、なにもしませんよ？」

いち早く早兎美が両手を上げて無抵抗の意志表示を示すも、伊月と橘花の間には完全なる確執のようなものがある。犬猿の仲の、まさにその光景を目撃している。

「身内で騒ぎを起こすなよ。……ったく、行くぞ」

いつまでも付き合っていられない。

伊月と橘花の間に永紅を入れることで喧嘩が起きないように中和しながらも、今度、とても大きな面倒が浮上してしまう恐れがあるは明らかだ。こんなとき、どんな対応を取ればいいのだろうか？ ため息をつき、桃真は肩に重荷が乗ったようなつらさを味わいながら暗い洞窟を歩きながら、また、女運が悪いと感じた。

……うるさい、うるさすぎる。

長い洞窟を越えた先で、洞窟を迂回する旅商人を見かけ、もう洞窟に大猿はいない、ここにいると言ったら腰を抜かした。

洞窟が安全になったという事実はすぐに広まり、都から使者が現れ、その確認をするほどだった。大猿を見たことをない者は、橘花を見てもなにも反応を見せないが、旅人などは旅商人と同じく、腰を抜かしていた。

「あたしって、そんなに恐れられてたんだ……」

とぼとぼと町中を歩く中、橘花は物珍しそうに露店や、綺麗な着物を着た女性に目を向けていた。時々、橘花を見て、大声を上げて逃げる者がいて、橘花はその者を見て言ったのだった。

「当たり前だ。鬼と同じことをしたんだ」

「あつ……」

橘花は、はつと我に返ったかのように、感情のない表情を浮かべた。もちろん、桃真は意図して言った言葉だ。どこかでその事実を教える必要があったわけだが、こんなにも早く言うつもりはなかった。それに、橘花が、意外にも涙を流す心が弱い乙女であると知ってしまったため、慎重に機会を窺っていたが、つい思っていたことを言ってしまった。

ひどく悲しそうな顔をして、肩をすくめて歩くようになった橘花は、自分の行いが鬼と同じだと、確かに感じた。鬼は人を殺し、一族まで手に掛けた。だから復讐したのだが、逆に呪いをかけられ、人を百人殺さない限り呪いは解けないと言われた。だから人を、関係のない者を殺したが、考えてみれば、鬼と同じことをしてしまった……。

「悔い改めるつもりがあるのなら、鬼を退治しろ。僕たちに協力して」

「協力するから、この輪っか、取ってきてくれる？」

「取ってもいいが、条件がある」

「条件？」

この条件というものを、伊月と永紅はもちろん、優孤、早兎美も理解していた。四人とも紅潮し、耳も赤くする。ここで、女が男に惚れる瞬間が見られるのか？ 体が火照り、疼き、発情する瞬間は、

同姓であつても見とれてしまう煌々とした様がある。

女性は、こういったときに一番輝くと、四人は思っているのだ。

「これを食え」

桃真が手にするのは、もちろん団子だ。その団子をまじまじと見たあと、匂いを嗅いで、

「旨そうな匂いだ」

「待て、それを食わせるのは宿屋についてからじゃ」

経験上、ここで優孤や早兎美のようになってもらっては困ると、

伊月は吉備団子をしまいうように言う。

「なんだよ、宿屋ってどういうことだよ？」

「まあ、それはあとのお楽しみということ……」

永紅の笑みに疑問を抱く橘花であったが、なんのことさっぱりわからず、如意棒で耳をかいて首を傾げる。

桃真一行は、明日、都へと向かうことにして、今晚はこの町の宿屋で休むことにした。

「いやあ、久しぶりの風呂だ」

まだ陽が照るというのに、橘花は自ら風呂に火をいれた。火番の老人が困ったような顔をしたが、橘花は楽しそうに薪をくべ、火吹き筒で一生懸命にお湯を沸かす。

「橘花、ちよつとぬるいぞ？」

「おう、ちよつと待ってる……。て、てめえ、なに勝手入ってやがる？」

ぐぐつと怒りをにじませ。湯気の逃げる小さな窓から顔をのぞかせて風呂に浸かる桃真を睨む。

「こんな早い時間に風呂に入れるとは、よきかな……」

「……湯加減はどうだ？」

「ん？ だからもう少し薪をくべてくれ」

「……承知した！」

裏庭にある薪をがんがん焚き、煙など関係ないと筒で空気を入れる。

「おお、ちょうどいい湯加減だ」

返答がなかった。怒ってどこかへ行ってしまったのかと思ったら、突然戸が開き、素っ裸の橘花が、腰に手を当てて堂々と姿を見せた。桃真がぽかんと呆然としているのも気にせず、だだつと走り、勢いよく湯船の中へと頭から入る。

おびただしい量のお湯が浴槽から流れ、ぼわつと窓から湯気が出た。

「ふう、気持ちいいわ」

「女の子だったら、もう少しおしとやかにしろ」

「いいじゃねえか、風呂で水入らず、よいではないか？」

橘花は、大きな風呂で仰向けになり、詩歌を口ずさむ。

大きな、綺麗な丸い果実をふたつ浮かべ、桃真の視線はそこに集中してしまった。

「……おつ？ 男だなあ、おとなしそうだと思ったが」

気づいて橘花がにやにや笑みを浮かべる。桃真は恥ずかしくなったが、橘花の性格、態度から裸の付き合いなどに恥じることはないのだと感じた。伊月のように齒に衣着せぬ言い方をする橘花を、桃真は好きだった。

「他の連中にも聞かれたと思うけど、なんで鬼退治なんか？」

「世の中の平和を願った」

「はははっ！ そんな考えを持った奴なんて、世の中に何人いる？」

「少なくとも僕一人はいるさ」

「面白い男だ……なあ、ちよつと楽しまないか？」

笑いながら桃真を背中から抱き、手を、股間に伸ばす。

「お、おい、やめろ。まだ外は明るいぞ？」

「構うものか。あたしじゃ、嫌なのか？」

「そういうわけでは……橘花！」

くそっ、どうして一方的にやられるのだ？ ここで抵抗できないのはどうしてだ？ なすがままにことが運ばれていく様を、桃真は客観的に見ていた。ここまで意志の弱く、雰囲気流される性格だ

ったのか？

桃真、お前はどうした？

自問自答すると、すぐに答えが返ってきた。

嫌ではないからだ。

「人間にしては、すごいな、桃真……」

桃真の得物を目の前にして、橘花はごくりと固唾を飲む。

「数十年ぶり、いただきます」

「……くそっ、たまにゆつくり過ごしたいと思ったのに」

「桃真、てめえの周りは女だらけ、それにその面にいい体、離すわけがないな？」

「女運が悪すぎる」

「楽しいし、気持ちいいだろう？」

「……否めない」

自分は、女を魅了する力でもあるのか？ それとも、吉備団子の匂いだけでこんなことになるのか？

「人間も、悪くないな」

橘花は小さく喘ぎ声を上げ、何度も言うが、桃源郷はすぐ近くにあるものだ。

その参

「……んっ？ 桃真、湯はどうだった？」

「あ、ああ、よかったよ」

桃真、橘花と頭か湯気を上げて部屋に戻ってきた。

その事実から真相にたどり着くのは簡単なことだ。

二人とも風呂に入っただけでは思えないほど、体中が赤い。吉備団子を使っていないというのに、どうして……。

伊月は、吉備団子の袋から一個取り出し、橘花に渡す。

「食え」

ぱくりと一口……優孤と早兎美のときはすぐに効果を見せたが、橘花が団子を口にしてからしばらく経ったが、なんの変化もない。

あれほど体が熱くなり、どうしようもないほど男を欲した経験をしている優孤は、壁に背を預けながら不思議がった。

「……こやつ、桃真に惚れておる」

「はっ!？」

ぎよつと目を見開き、違う、そんなわけがないと言い訳をするが、伊月は冷静に、

「吉備団子は惚れている奴には効かぬのじゃ！ 橘花は桃真を好いておる！」

「ば、ばか言え！ こんな奴に惚れるか！」

「嘘を言っても無駄じゃ、吉備団子の効力はこちらにいる三人が実証済みじゃ。お前は桃真に惚れていくから効かぬのじゃ」

「なにが団子だよ？ ただの団子だろう！」

「惚れ薬が入っておる。それも強力な奴をじゃ。どんな奴でも一口で淫靡になってしまう」

「そ、そんなこと……」

周りが、うんうんと頷く。

橘花の頭から、先ほど以上の湯気が出て、倒れた。

「桃真と同じで初心うぶな奴じゃ」

橘花の頬を指で突きながら、くふふと笑って見せた。

「都まであと二日といったところだな。詰め所にこの大猿を突き出ししょう」

「大猿の処分には向こうだって困るだろう。死んでいるわけではないし、縄で手足を結んでも簡単に引きちぎってしまう」

桃真は、風呂で橘花の腕力に異常さを感じていた。大猿と言われる所以ゆえんはともかく、その馬鹿力は認める。お猿さんは毛が三本足りないと聞くが、あの橘花はどうだろう？ 行動的で、口より先に手が出る性格ではある。自尊心も高くなく、直接的……伊月と似ている。ただ、気持ちを素直に打ち明けるところを見せたり、隠したり……むずがゆい奴だ。

「橘花は戦力になる。最悪、賞金などいらなから鬼ヶ島に連れて行きたい」

「それは困るわ。わたしたちはお金が目当てだもの」

だんと畳を叩き、それは駄目だと文句を言う優孤。けれども早兎美はそうでもない、どちらでもいいという、むしろ自分は関係ないと言いたそうな顔をしている。

「都に行けば仕事など多くあるだろう？」

「この子、借金があるのよ」

「借金？」

「この双刀、見た目はなんでもないけど、名工が作り上げたの」

「まさか、借金して買ったと？」

「まっ、まあね。でもね、すごく軽くて切れ味がいいのよ？ 借金

するだけの甲斐があったわ」

「使ったことがあるのか？」

「……」

沈黙、代わりに早鬼美が、

「ないわ。大猿のときは抜きもなかった」

「それが現実だな」

「ね、ねえ、よかつたらあたしたちも鬼退治の仲間に加えてよ？」

突然、何を言うかと思えば、優孤はそんな提案を持ちだした。

伊月と永紅はその提案に乗ることも拒否することもなかった。この旅の指揮を取っているのは桃真であり、桃真が主軸となる。そのことは、伊月も永紅もわかっていているから、この場での判断は桃真に委ねられた。

自分の提案で、どうしてこんなに重い空気なのだろうか、口半分を開き目をきよるきよるさせる優孤は、途切れ途切れに空笑いをする。

「駄目だな」

しばし考えたあと、桃真は結論を出した。

「えっ、なんで！」

鋭い目をさらにきつくし、牙を見せて桃真を睨む。

「お前たちは獣人であり、神でもなければ僕のように力を持った者でもない。普通存在だ。鬼を倒せる力を持たない、殺されるだけだ」

「そ、そんなのやってみないとわからないじゃない？」

「死にたいのか？ だったら橘花と戦って勝て。鬼は大猿すら倒す力を持っているのだぞ？」

「むっ」

大猿に勝てないのであれば鬼には勝てない……確かに、伊月や永紅のような神でもなく、桃真のような特異な能力も持っていない。大猿と対峙したときも、最初の一撃で怯み、足が震えた。

それが現実。

鬼を目の前にしてその刀を振るうことができるわけがない。

「……」

黙ってしまい、なにも言い返せなくなった。意気込みはよしとし

ても、実戦では気持ちより力が何よりも必要となる。鬼という異形の生物に対して、ただの人、獣人では太刀打ちできない。

優孤は、軽い気持ちで言っただけだが、桃真の鬼退治は本気だった。

「悪いが、都に言ったらお別れだ」

「……そう、そうだよ。ごめん」

「謝るな。ただ、命を無駄にするような発言はするなよ。絶対的力を持った者に挑むことは、愚かだ」

「別に、軽く言っただけじゃ……あつ、起きた」

橘花が目を開き、こちらを一瞥した。

「……夜？」

「みんな飯を食い終えた。食うか？」

「いや、いい。水をくれ」

「酒はどうじゃ？」

伊月は、自分が飲んでた酒を注いだ杯を渡すが、
「酒は飲めない。てめえら神さまだろう？ 飯も酒も必要ないだろう？」

「……なに？ 食わず飲まず生きていけるというのか？」

「現にあたしは飲まず食わず生きている」

かつと頭にきた桃真。

今まで大食いをする伊月と永紅に何も言わず、健康的な女の子だとして路銀の消費をなんとか目を閉じてきたが、橘花の発言により抑えていた怒りの壁が崩壊し、脇に置いていた毘沙門刀を握る。

ぎくりと伊月がすっと動いて窓から逃げるようなしぐさを見せる。また、永紅も翼を広げて伊月と共に逃亡を図ろうとした。それが癢に触った桃真は、

「このお、浪費の神があ！」

桃真が怒るのは珍しい、という感想の直後、伊月を抱いて永紅が窓から飛んでいった。

抜刀し、きんと断続的な鋭く、痛みのある音が橘花たちを襲った。

毘沙門刀が発せられる音は桃真の感情にも反応し、この宿屋が崩壊するのではないのかと思うほどだった。実際、音は獣人や神にしか聞こえない。けれども、橘花が床に伏せ、耳を押さえて叫び声を上げるほどの音を出しているのだから、周囲にいる獣人も、

「な、なにっ!? 痛い! 頭痛い!」

外が騒がしくなった。

「いやああああ、なによこの音!？」

獣人が頭を抱えてその場に伏せている。永紅と伊月はもう目に入る場所にいない、どこか遠くに飛んでいつてしまった。

仕方なく刀を鞘におさめ、正座をして眉間にしわを寄せる。

「あの女ども、帰ってきたらただじゃおかない」

「なんて刀だ頭痛がする」

「ちよつと、その刀、なに？」

「なんでもない……くそつ、苛立つてしかたない」

「まあ、落ち着け。あいつらもすこしは反省して戻ってくるさ」

「つたく、元々、お前を倒せば賞金が貰えるという話も、銭があれば興味はなかった。鬼のついでに倒しておこうという程度だった」

「あつ、そうなのか？」

「だが、あの犬ところが財布を拾ったと言って勝手に使いやがった。僕の財布だった」

「あはははっ! 笑える!」

「笑えるか!」

早兎美を一喝する。

「ちつ、あの二人は神さまなのに面倒を起こす」

「なんだ、おめえは意外におしゃべりだな」

……どうしてだろう、今まで感情を押さえこんできたのに。

路銀のことが弾んで話してしまうのか? 気分を晴らしたいのか?

というより、橘花を見ていると、落ち着く。

「そうだな、そういえば、こんなに感情的になったのは久しぶりだし、会ったばかりの奴にこんなことを話すなんて、今までなかつ

た」

「おめえを見たときから静かな奴だと思ってたが、思った通りの堅物だったか」

「わからない。橘花の顔を見ると、落ち着く」

真正面から、素直に言ってみると、橘花は真顔になってから、耳を赤くした。

「ば、馬鹿野郎！　そういう恥ずかしいことを堂々と言っな！」

ばしんと頭を叩かれた。

脳が揺れて、視界が歪むほど強い力だった。常人なら死んでいた。このあと伊月と永紅が、心の底から申し訳なさそうな顔をして窓から戻ってきた、土下座をして謝った。

「今後は考えて食べることにします」

……反省、しているのだろう。そう願うだけだ。

次の日、桃真たちは都を目指した町を後にした。

第六章：西洋の鬼

都が近いということで、町や村が多く、道も人が多くなって桃真としては歩くことが苦ではなくなり楽しいものに変化した。

町から出て二日目のことだった。

数軒並んだ茶屋の近くに看板があり、さまざまな知らせが掲示されていた。

桃真たちは茶屋で休憩していると、橘花が看板に目を向け、お茶を飲みながら掲示されたものを見ていく。

「港から西洋の鬼が現れた……なんだ、西洋に鬼って？」

桃真も気になって看板を見ると、

『先ごろ、西洋の鬼が海から現れた。鬼のように強大で巨大、近づくべからず』

ついでに挿絵も張られていた。

「なんじゃ？ 西洋の鬼？」

「翼がありますね。鬼だなんて、わたしたちの一族かもしれませんね」

「南蛮から悪しき者が現れたと聞いたことはあるが、西洋に鬼がいたんだ」

各々、絵を見て感想を述べるが、桃真は、この絵と同じ姿をしたものを見たことがあった。

桃真の村は比較的海に近く、魚の異形の物の怪を退治したことがあった。また、珍しいことだが、物の怪が村に現れたこともある。あの村に住んでいた伊月だって遭遇したことがあるはずだ。それに、餓牙刀も、狼牙王ろうがおうという物の怪の牙から作り出したもの。

物の怪は、鬼と同様に悪ではあるが、普段は森に住み、滅多に人や村を襲うことはない。

「伊月、僕の村で“璃頭りとう”という物の怪と会ったことはないか？」

「璃頭？ ああ、そうだ、こやつじゃ！」

興奮し、何度も絵を指さす。

瑠璃色の一つ目を持つ、黒い姿で黒い翼を有する物の怪で、夜になると鳥のような羽ばたき音を出して家畜を襲ってくる。敵が空中にいることで、桃真とおじいさんは火矢を使って退治したことを覚えてる。

「てつきりこの世に広まっている物の怪と思っていたが、僕の村だけだったのか？」

「それにのう、鬼のように強大で巨大というが、簡単に倒せたと思うぞ？」

「都は、この程度の物の怪に怯えているのか？」

「桃真、お前は自分をただの人間だと思っているのか？ 人が物の怪を倒すのだって難儀なことじゃぞ？」

「……それもそうだな」

自分の力は異常……忘れていた。

茶屋で休んだあと、町、村を経由して都へと向かう。初めて都に行く桃真は、一体どういうところなのかと期待していた。都と言われるのだから、相当煌びやかなのだろう、巨大で、人も多く、賑わっているはずだ。

笑顔は見せないが、明らかに心を躍らせている桃真。それに永紅、優孤、早兎美も初めて都に行くということで、道中笑顔だった。

「都といっても、金のある奴とない奴では住むところも生活も全くなりがうからなあ」

歩くのが気だるそうに、橘花は始終ため息をついては歩きたくない駄々をこねた。

まるで以前の永紅のようだ。

「あたしを詰め所に突き出して、まんまと金をせしめて鬼退治かうまく考えてもんだ」

「都の連中で対処できなかったのだ、生きて連れてきても何もできないさ」

「鉄の塊に入れても、すぐに出てやるさ」

「だろうな。それなら僕たちで言いくるめれば簡単だ」

「簡単にいくだろうかのう。都の役人は桃真くらい堅物だぞ？」

「……都には天照大神がいるのだろう？」

「ほほう、神頼みか？」

「絶対的力を持つていながら、どうして天照は鬼と戦わない？」

「聞いてみないことにはわからないな、神の考えは人にはわからない
い」

「お前たちにはわかるのか？」

「わからぬ。所詮、妾は田舎の地治神。天照大神とは天と地の差……

……おお、上手い」

「自分で褒めるか？ まったく、神さまのくせに……」

茶碗を返し、頼りにならない神さまと獣人とを連れて都への歩を進める。

都に行ったら、まず役人の詰め所に向かい、橘花を突き出して諸事情を説明する。賞金をもらい、路銀にする。都は人が多い、鬼ヶ島がどこにあるのか知っている者は必ずいるはずだ。島というくらいだから船が必要になる。鬼ヶ島に向かってくると言っても、船頭は誰一人としてよい返事をしないだろう。なら、木船を浮かべて自ら漕ぐだけだ。

計画を立てる中で、桃真は鬼ヶ島のほかにもう一つ尋ねておきたいことがあった。

女の鬼を見たことがないか？

むしろ、こちらが重点となる。

「……大きい」

小高い丘の上から見える都の全貌を眺める桃真の横を、心地よい風が吹いた。

広大な敷地に家々がびっしりとひしめき合い、中央には壁で囲ま

れた御宮がある。

御宮には帝がおり、その奥に、雲を突き抜けそうなほど高い塔の中に天照大神が祀られている。

伊月は以前、都にいたことがあったと聞いたが、今は何も聞かずに都の入り口、巨大な門の前に立つ。

門の前では行列ができて、桃真たちはなかなか進まない人の列の中で苛立っていた。

「脅せば順番を譲ってくれるぞ？」

またため息をつき、橘花は前に並ぶ者を見た。

「問題は起すなよ」

橘花は一瞬、むっとしたが、桃真の言葉に逆らうと頭の金剛輪に殺されかけてしまう。

しかし桃真も面倒くさくなってきた。どうして門で並ばなければならぬ？ 一体、何をしているのだ？ 気になり、目の前に並ぶ男に尋ねる。

「洞窟から大猿がいなくなったと、警戒しているらしい」
な、なに！？

この行列の原因は大猿だとは知らなかった一行は、一斉に橘花を睨む。

「あらら、あたしの所為？」

ははっと苦笑いを見せ、橘花は自分を指さす。それを見ていた男が、

「あたし、だと？ ……うわあああああ！！ 大猿だ！！」

大声にびくりとした人々が、慌てふためき橘花を見て青ざめ、一瞬にして阿鼻叫喚となった。

「馬鹿野郎！ 面倒起こすな！」

橘花の頭を叩き、この騒ぎを治めようにも桃真には無理な話、どうしようもない状況下で、人々は我先に都へ入ろうと人が人を踏むようなことになっている。

どたばたとする中、桃真は泣きそうになった。

どうにかしようとしたが、ぴたりと叫び声がやんだ。それも、桃真が気づかないうちに、だ。

門を見てみると、幾人もの近衛兵を携えた女性が一人、威風堂々と立っていた。

今まで見たことない綺麗な着物をまとい、豪勢な髪飾りに、その大和撫子の姿には威厳が感じられる美人であり、実際、それなりの権力を持つのだろう。

女性はふっと笑みを見せ、

「大猿が見つかったのであれば、皆さまの調べは必要ありません。慌てず、ゆっくりと進んでください」

そう言くと、人々は安心したのか、橘花を一目見て都へと入っていく。

この場を動けなくなった取り残された桃真たちは、都の衛兵に囲まれ、槍、刀、短筒を向けられた。

「大猿というのは、貴女ですか？」

外で着るような服装ではないが、女性はゆっくりと近づいてきて、橘花と鼻先がくっつくと思うほどの近くで見る。

「あ、ああ。あたしだけ……」

「大猿とは、凶暴で暴虐な生き物と聞いていましたが、綺麗な方ですネ？」

「なっ！」

耳が真っ赤になり、尾がぴんと張った。思わず手を上げそうになったが、ここで問題を起こすなと桃真に言われたため、素直に従う。

「大猿を捕まえたら賞金がもらえると聞いた」

「貴方が捕まえたの？」

今度は桃真を、目を細めて見る。

「そうだ」

「確かに、賞金が出ます。ですが、この大猿、牢に入れてもすぐに脱走するでしょうね」

掛かった、桃真はこれを待っていた。顔には出さなかったが、心

の中で笑みを見せる。

「この大猿を倒せるのは僕だけでしよう。この大猿は罪なき者を殺してきた。罰として鬼退治に連れていく」

「鬼退治？」

「僕たちは鬼退治の途中だ」

「……ちよつと、落ち着いたところで話す必要がありますね」

女性は桃真たちを誘い、都の中へと入れる。

昔と変わらないな。

伊月は都に住んでいたときのことを思い出した。

あの頃はまだ一族がまだ無事だったが、伊月は広い都の中で地治神として祀られていた。そのときの暮らしというのはこれまた豪勢だった。都というだけあって、貢物が素晴らしく、当時の伊月は正直、天狗になっていた。

犬神一族が都を離れたのは、鬼の脅威が目の前に迫ったときだった。犬神一族は都の者に、そして天照大神の世話になったと鬼と戦うことを決めたが、結果として敗北。一族は伊月と数名を残しただけとなってしまった。

都は、確かに楽しい場所ではあったが、一族が滅びたということでは、嫌な思い出の場所だった。

橘花も思い出のある場所だ。

橘花は一人で生きてきたが、都では何度も遊んだ。その内、鬼が現れ、鬼を殺す方が都で遊ぶよりも楽しくなった。ある日、女の鬼にやられ、殺せなかったために洞窟に封印された。

その頃と変わらないと、二人が思い出に浸っている中で、桃真は物珍しそうに見ていた。

「都は初めて？」

女性は尋ねる。

「ああ、初めてだ」

「この輝きがあるのは、空の塔に天照大神さまがいるからです」
女性の地位は高い。それは近衛兵や、都の者が道を譲るところを

見ればわかる。それなら籠に乗ったり、牛車に乗ったりするものではないのかと疑問は浮かぶも、女性は、小さな酒場に入った。

この女性には不釣り合いな、ちんけな酒場だったが、とりあえず今は従おう。

店の中に入るも、人は誰もいない。外装から比べて内装は非常に綺麗で、珍しく女性の店主が台所に立ち、包丁を手に取り、魚をさばく。よい匂いが桃真の鼻に入り、腹を刺激する。

それは全員だった。女性は座敷に上がり、桃真たちにも座るように促す。

台所から、酒とつまみを持ってくる。

早速、伊月が酒を杯に注ぎ、飲み始める。酒に味をしめた永紅も、礼儀も関係なく注文を始めた。さすがの優孤も、呆れ、眉をひそめて伊月たちを睨んだ。しかし、女性は笑みを見せて、元気のいい子と言った。

「紹介が遅れてごめんなさい。わたしは武光輝帝・紗枝寺・真央たけみつきのみかど さえじ まおです」

「僕は影ノ身・桃真……帝？」

「ええ、この都の主、帝です」

「……洒落を言う。帝が、こんなところにいるわけがない」

「そうでしょうね」

「それに、帝は男だろう？」

「誰が決めたの？」

嘘この上ない、とは思わなかった。それが事実なら、桃真の目の前にいる女性は、この都で最大の権力を持つ者。詰め所の役人どころではない、都の長を上手く言いくるめなくてはならないこの実状で、桃真は緊張した。

「それで、大猿の話をしますが、鬼退治に向かう途中だとか？」

「え、ええ。この大猿の力なら鬼に対抗できるでしょう」

「どうやって大猿……失礼、お名前は？」

橘花は、座敷には座らず、椅子に座って店主が持ってきた肉料理

にがつついていた。

「大猿神の橘花」

「橘花さんをどうやって捕まえたのですか？」

「頭についている輪が、僕の発する語句で頭を締め付ける。激痛だ」

「まあ、そうですか」

ちらりと橘花の金剛輪を見る。

「なにより大猿があゝの洞窟にいたことで人々は怯え、苦しんでいました。これが解決しただけでもうれしい。約束ですから、明日、宮にお出で下さい」

「わかりました」

帝と名乗る真央は、近衛兵と共に店をあとにする。果たして本物の帝なのかと、桃真は不思議でしうがなかった。身なりは、確かにそれ相応の位があるはずだ。しかし帝と言われても、帝を見たことのない桃真には判断できない。明日、城に行っても門前払いを食らうのではないのかと、正直、期待はしていなかった。

帝は一筆走らせ、桃真に渡して去っていった。

桃真たちは帝の計らいでここで晩を取ることにした。

「本当に帝かのう？」

酔った伊月は店主に無茶な注文をする。

鮪を持って来い、牛を持って来い……無理なはずなのに、店主はそれ相応のものを用意してくれた。

帝が勧める酒場なのだから、やはりそれなりの品物を出すのは納得だ。

「佐島と同じではないのか？」

ふと、桃真もそれを考えてしまった。

美しい、あまりにも美しかった。本当に女性なのかと思うほどの美しさに酔いそうになった。

橘花はなにも食わず、寝ると言って二階に言っしまい、優狐と早兎美も、酔って座敷で寝てしまった。

桃真は酒を飲まず、暖簾をしまう女性店主を見ながら帝と名乗る

真央のことを考えていた。

「店主よ、あの真央という女性は、本当に帝なのか？」

女性店主は微笑み、頷いた。

「浮気はだめですよ」

永紅が言う。

「帝に手を出せるものか」

ふふつと笑い、桃真は店主の作ってくれた揚げ出し豆腐に、おばあさんの味を思い出した。

その貳

「大きな」

「都というだけあるじやろう？ あの前、真央がいたなら本物じゃ」

「もう疑ってはななさ。橘花」

「んっ？ なんだ？」

「問題を起こすなよ」

「わーかってるよ、ったく……」

二日酔いだった。

桃真はあのと、飲み込んだ。

酒は飲んでも飲まれるなと誰かが言っていたが、まさか帝と話すことになるとは誰が想像できたものか。あんな緊張感は久しぶりで、おまけに、明日は城に来いと言ったのだ。膝が震えることはないが、心臓は高鳴っていた。だから酒に頼り、その緊張感を吹き飛ばそうとしたが、飲みすぎた。

頭が痛い上に体も重い。動きたくないが、帝との約束を破るわけにはいかない。

桃真は、はあ、とため息をつき、とぼとぼと歩く。

城、というより社に近い作りをした、宮と呼ばれる帝が住む場所。は、都の中央、天照がいるという塔の目の前に建てられている。その大きさ、広さは桃真の村ほどあるのではないのかと思わせる。

帝に貰った書状を門番に見せると、どうぞと案内された。

一行は宮に入るなり、その光景に目を疑った。

「まるで桃源郷だ」

優狐が言う。

桃源郷……聞きなれた言葉に、桃真の頭痛はひどさを増した。

なかなか取れない頭痛に悩まさせながら、桃真は広い座敷に案内され、しばし待たれよと茶と菓子を出された。

「桃真様、大丈夫ですか？」

「痛みがひどい、帝が来るまで横になる」

「そんな余裕を見せるところがすごい」

橘花が茶を飲みながら、桃真のすぐ横で、同じように寝そべり、小さくなつた如意棒を耳かき代わりに使う。

伊月はこの広い座敷が落ち着かないのか、そわそわと尾を振りながら何度もため息をつき、お茶を飲む。

しばらくして、桃真の頭痛が治まり始めても、帝は姿を現さない。苛立ち始めたのは橘花である。

「いい加減にしろ、帝だがなんだか知らないが、待たせすぎだ」
「がばつと起き上がり、帰るなどと言い出すが、

「どこに帰る？」

帰る場所などないのに、言ってしまったてからはもう遅い。

後には引けないとぐぐつと橘花は顔を赤くしたあと、はつと息をもらし、背を向けて横になった。

それにしても、確かに遅い。

いつまで待たせるつもりだ。

永紅の膝枕は気持ちよく、眠ってしまいそうだ。

そう思ったときに、ざざつと襖が開けられた。

「あらあら、楽しそうね」

襖を境にずっと向こうに、本当、米粒程度にしか見えない帝がいた。

綺麗な十二単を着飾り、扇子を口元に当てている。

両脇には槍、刀を持つ近衛兵が何百人という、圧巻される光景だった。

桃真は、永紅の膝を枕していた姿を見られたわけだから、恥ずかしくこの上ない。

すぐに起き上がり、面と向かつて正座する。

「楽にしなさい。早速、大猿を退治した謝礼を受け取りください」

と、横の襖から、白装束の男が二人現れ、お盆に白い布をかけた物を桃真の前に置く。

ゆつくりと布を上げてみると、大判が……。

「こんなにはもらえない」

はてさて、自分の声が届いているのかもわからない距離だが、帝は笑っているようだ。

「帝相手に遠慮は無用。その代わり、頼まれてほしいことがある」

「帝が、こんな一行に、お願いと？」

素性のわからない連中に頼まれごとを任せるとは、阿呆なのか、器が大きいのか、それともこちらを本当に信用しているのか、何度も思うが、帝の考えはわからない。

「最近、西洋から化物が姿を見せ始め、どうやらここより西の山に巣を作ったようなのじゃ。それらを退治してほしい」

ここに来るとき、茶屋で見た掲示板にあった璃頭という化物のこ
とだろうか？

それなら退治は簡単だ。

「これはその謝礼も含まれていると？」

「そう思っても結構。なんなら、他の望みも聞いてもよい」

と、ここで桃真は伊月を見た。

伊月は、すぐに桃真の言いたいことを理解し、こくりと頷いた。

「天照大神に会わせてほしい」

鬼を倒すために慈母の力を借りたいというのは、以前から考えていたことだ。伊月とも何度か話したことだし、都に来た理由の一つでもある。

絶対的神の力を持った天照大神の力を、拝見したかった。

帝は、むっと一瞬だけ表情を歪め、側近になにか相談をしている。それもそうだ。

天照大神は都を守る神であり、鬼すらも寄せ付けぬ強大な力を持っている。

我々の住む世を正す慈母であるのだ。

そう簡単に会わせるわけにはいかないだろう。

やはり、こんな要求は通るわけがないと、伊月を顔を見合わせた

とき、

「良かるう」

「えっ？」

「化物を退治してきたら、慈母の会わせよう。期待しておるぞ、桃真殿」

「は、はあ……」

この帝には驚かされる。

啞然とする桃真の目の前で、襖が閉じられた。

あつという間の面会終了に、桃真だけではない、伊月も、永紅も、優狐に早兎美に橘花も呆けた顔をしている。

「……さて、西に向かいましょうか」

銭を手にして喜んだのはもちろん優狐である。

借金をしてまで手にした刀がこれで報われると涙を流しそうなほど喜んだ。

一方の桃真と伊月は、なんだか納得のいかない面会だったと腑に落ちず、一度、昨晚世話になった酒場に戻った。

「分け前は半分だが、これほど貰って罰が当たらないか心配だ」

「馬鹿を言うでない。そんなわけがあるか」

「それにしても、あの璃頭を退治するのは面倒だ。あんな小物、放つておけばいい」

「天照の力を疑いたくなる」

「全知全能の神はおらん。慈母には、神には事情があるのは当然だ」

「神の事情か……ぼくたちにはわからない事だろうな」

「そうでもない。志乃殿のような、とは、また違うが、似たような事情がある。妾だってそうじゃ。永紅も、勿論じゃ」

呪い持ちの永紅だが、他社に迷惑をかけないだけまだいい。問題は、あの獣っ子の二人だ。

いつまでついて来られは困る。まさか、また鬼ヶ島までついて来るの、なんて言い出すのではないだろうのな？

その話は以前にけりがついている。

銭が手に入ったら別れると言ったのを、忘れたのだろうか？

とりあえず、相手は璃頭、鬼に比べたら雑魚も雑魚だ。

飛翔能力のある璃頭。

真つ赤な大きな頭に、細い体をしてふわふわと飛んでいる。こちらから仕掛けない限り襲ってくるなどない大人しい妖怪のはずなのに、なぜ帝はそれほどにまで恐れるのかが疑問だ。天照がいるなら都は安全。それなのに……疑問ではあるが、天照に会うことを条件に退治すると言ったのはこちらだ。いまさら文句を言うつもりはない。

「装備を整えて出発じゃ」

伊月にはやる気が見える。

永紅はいそいそと支度を始め、橘花も、久しぶりに暴れられると指の骨をぽきぽきと鳴らす。

ただ、早兎美だけは違った。

「……わたし、国に帰ろうかな」

「えっ!？」

目を丸くする優孤を早兎美は、冷やかな目で見ていた。

「お金は手に入ったし、十分放浪もしたし、そろそろ帰ろうかな、って」

「まだ旅してないじゃん!」

「このままじゃ、戦いの旅になっちゃいそうだもん」

……戦いの旅。

自分達のことを指しているのだとわかった。

早兎美の言葉に嫌味などはないだろうが、血にまみれた旅などは嫌だという気持ちは伝わった。

もちろん、優孤と早兎美は鬼退治のために旅をしているわけではないから、桃真たちに引き止める権限などはない。

ただ、短くも繋がりある旅を共に送ってきたわけだから、ここではないなくなるのは淋しい限りだ。

それだけは、本音である。

「ぼくは、やさしくは言えないが、止めるならやめた方がいい。無理に旅をする必要はない」

「……桃真さんは、優しいですね」

早兎美の頬が染まった。

それを見逃さなかったのは伊月と、なんと橘花だった。

「ゆるさぬぞ！」

と、伊月。

「惚れるなよ！」

と、橘花。

「お二人とも、むきになりすぎです」

弓を磨きながら、ため息をつく永紅。

この子は旅で落ち着きを得た。

「でも、早兎美の言うことは正しいわ。戦いのためじゃないもの。放浪だもの、世を見て回る」

「それがいいかもな」

素っ気ない返事をする桃真は、刀を研ぐ。

その姿はまさに狩人。

優孤と早兎美は恐ろしくなり、なぜか桃真から視線を外すことができなくなってしまった。

蛇に睨まれた蛙のようだった。

桃真の餓牙刀は鋭い光を放っている。それ以上に、その傍らに置かれていた毘沙門刀に惹かれた。

どうということだろう。

昨晚もその前も決して触れなくなかったのに、今はどうしても触れなくなる……刀が、桃真の雰囲気“当てられた”のだろうか？
気迫こそないが、殺意——戦いに身を置きはじめた桃真の威圧感
は、力のある橘花をも殺しそうなほど高まっている。

それに毘沙門刀が共鳴しているようにも思える。

獣人だから、そういう感覚を持ってしまう。

……わかってしまう。

「ねえ、西の化物の退治だけ、付き合わせて」

「……いいだろう」

二人は潮時を知っているのか、それともまだ離れたくないのか、最後の頼みをしてきた。

一行はすぐに西へと向かった。

都を出るとき、門に馬が用意されていた。

帝の小さな助力だというが、桃真は馬に乗ったことがなかった。

「なんじゃ、馬も乗れぬのか？」

伊月が慣れた手つきで馬の手綱を整え、ひょいっと飛び乗った。永紅も、ゆっくりではあるが馬に乗る。

どうどうと馬の首を撫でてやると、馬はすぐに永紅に懐いた。

「あたしは走る」

橘花だけが乗馬を拒否し、優孤と早兎美は二人で一頭の馬に乗ったので、桃真は困った。

「ほれ、背中に乗れ」

「むっ」

男としてはなんも恥ずかしいことが。

門兵や出入りをする人が奇怪な目で見ているし、中にはくすくすと笑っている者もいる。

恥ずかしいが、拒んではられない。

しぶしぶ伊月の後ろに乗り、肩に手を乗せる。

「頼られているようで心地好いわ」

馬の腹を蹴り、走らせる。

「今でもぼくの頼りだ」

「おっ、嬉しいことを言うのう」

笑みを浮かべ、嬉しそうに馬を走らせる伊月に、たまには悪戯を試してみようと、手を肩ではなく、銅に回してぴたりと身をくっつけてみた。

「なっ！」

急なことに伊月は動揺し、手綱を強く引いてしまい、馬が一瞬だ

けよるける。

恥ずかしかったのか、くすぐったかったのか、伊月の表情を窺えないのだからわからないが、伊月の体温が上がったことだけはわかった。

自分も、素直になれたものと、強くなれたものとわかった。

西へ走り、近隣の村で璃頭の出現場所を聞く。

村を出るとすぐに林の中に入った。

ゆつくりと馬を走らせ、大きな一本杉の辺りで見たという情報を、周囲を見渡す。

おかしなことに、動物たちの声が聞こえない。

緑豊かな、木漏れ日が気持ちいいこの場所に、生物が住んでいる気配がない。

「……気持ちが悪いのう」

馬から降りたとき、風が吹いた。

生温かい、血なまぐさいにおいがする風に、馬が怯え、降りようとしていた優弧と早兎美を振り落として逃げていった。

「いったあ……なに？」

優弧はすぐに立ち上がったが、頭から落ちた早兎美は「さいあく」と言っでそのまま伏せてしまった。

「いやな感じがしてたまん、なんじゃ一体？」

「とても璃頭とは思えないほど強い何かを感じる」

「なにかとは、なんですか？」

永紅が弓を持ち、すつと桃真の横に立つ。

「気をつける、これは、鬼以上に厄介かもしれない」

桃真が刀を抜いたとき、全員が緊張した。

その参

一本杉の向こうからがさがさと音がする。

それが近づいてきたときには、永紅が数十本の矢を放ち、一本杉に隠れたときだった。

「た、大群じゃー!!」

翼を持つ璃頭が、群れとなって飛んできた。

璃頭は一本杉を避けて飛んでいくのだが、羽ばたく音がまるで毘沙門刀が発する嫌な音に似ていて、伊月や永紅、あとの三人も耳を押さえて地に伏せた。

「なんだ？ どうしてこんなに？」

「知るか！」

桃真は餓牙刀を握り、璃頭の大群が去るのを待つも、いつまで経つても大群は続く。

「何匹いる？」

「知るか!!」

伊月は、璃頭の赤い頭が頭上を流れていくことに恐怖していた。なんせ、何千という璃頭が飛ぶのだから、絶対的な力を持った敵に恐怖するではなく、不気味さが怖かった。

と、一匹が突然、桃真と伊月の目の前に飛んできた。

璃頭は大きな丸い頭に赤い一つ目をしていて、頭に貧弱な体がつっついていっているような姿をしている。

久しぶりにまじまじと見た。

口があるのかというと、正直わからない。きーきーと鳴くが、口を開くところを見たことがない。

その璃頭が、口を開き、瞬きをした。

どうやら、顔の皮が引き攣っていて、そうしないと瞬きができないようだ。

「気色が悪い。いつもは夜だったから、よく見なかった」

瞬きをする度に笑みを浮かべる璃頭に、桃真は悪寒を覚えた。

その一匹はすこしの間、桃真たちを見たあと、一本杉の向こうを見て、仲間と一緒に逃げ出した。

やっとのことで大群が過ぎ去っていったのだが、どうしてなのだろうか？

「行っちゃった……あれを退治するんでしょう？」

優孤は、桃真にどうする？ という表情をした。

桃真も、退治する相手が逃げてしまったのなら、退治したでいいのではないだろうかと思った。

その直後、桃真は、帝の言ったの化物が璃頭でないことを知る。

「伊月、あれを見る」

「なんじゃ？ ……なんじゃ、あれは？」

「目玉の化物」

大将、というべきなのだろうか。

璃頭の馬鹿でかい奴がふわふわと浮きながら、大群を追う。

大きさは林の木々よりも大きく、目玉だけで桃真の数百倍。とにかく大きく、羽ばたく音も大きい。

先程、自分達の前に現れる璃頭は、これを訴えていたのだろうか？

目玉に小さな体。

どうやって飛んでいる？

「あれを退治するのか？」

桃真、空中にいる敵を倒す手段を用いていなかった。

永紅が最初に、光矢を放った。

目玉に命中。

落ちた。

「よわっ」

たったの一本で、巨大な璃頭は倒れてしまった。

木々を薙ぎ倒し、倒れた大目玉の大将は、情けないうめき声を上げてぴくぴくと四肢を動かす。

「冗談だろう？ あんなものなのか？」

「永紅、もう何発か打つてみい」

伊月の言葉に従い、永紅はもう二発ほど、大目玉に矢を放った。びくびくつと体を震わせ、動かなくなる大目玉に、桃真はゆっくりと歩を進める。

「大丈夫か？」

「毘沙門刀が反応しない、大丈夫だ」

そうは言うものの、相手に殺気がない限り、毘沙門刀が反応することはない。もし、急に騒ぎ出したとして、あの大目玉が頭突きでしてきたら防ぐ手段がない。

あの巨体だ、技が無くとも力は鬼以上と見た方がいい

餓牙刀を握り、微動だにしくなった大目玉に近づき、よく見る。矢は目玉に、本の少し刺さっただけだ。

光の速さで飛ぶ矢が浅く刺さっているといことは、耐久力はある。大目玉は桃真を見ていた。

よわよわしく、泣きそうになっている。

決して悪い妖怪には見えない。

はて、このまま毘沙門刀の餌食になってもらうか、それとも逃がすか……帝との約束は天照に会うための唯一の方法。

この化物を殺すことに、躊躇を感じた。

化物を倒すというより、弱者を倒す気持ちを抱いてしまった。

弱き者を倒せるほど、桃真は非情にはなれない。

「殺すのか？」

一人ついてきた橘花が問う。

そうしなければならいだろう。それが天照と会う条件なのだから。

毘沙門刀なら一撃で、苦しまずに殺すことができる。

「殺せるのか？」

「化物だ」

「……あんたも、化物だ」

なぜそんなことを言つと、振り返り、眉間にしわを寄せる桃真。

橘花は直立不動で、両手に如意棒を握っている。

伊月と永紅、優狐と早兎美は、怖くて大目玉に近づけずにいる。

「こいつの目は悪じゃない」

「お前にわかるのか？」

「神のあたしの考えが、お前にわかるのか？」

「……」

神の考えを理解できるのは神だけ……などと、桃真には馬鹿げている発想だと思っていたが、実際、橘花の考えを、桃真が知ることはできなかった。

「何が言いたい？」

「帝を信じていない」

……そうだ。

桃真は、帝を信じていない。

天照の力があれば都は守られるというが、こんな、永紅の一撃で倒れる化物を倒せないほど、天照が都の守護に力を注いでいるとは思えない。

何か別の理由がある。

桃真にはそれがわかっていた。

「どうする？」

「なにがだ？」

「帝が鬼だったら？」

常に考えていたことだ。

会った先々の人が、鬼だったら……これこそ馬鹿げていると思われる発想だが、もしそれが間違いではなかったとき、桃真の決断は正しいと判断される。

帝の言動はあまりにも優しすぎる。

優しい人間は怪しい。

なにか裏があるから優しくする。

橘花も、似たような経験をしたことがあるだろう。だからそんなことを言う。

「どうすればいい？」

「天照に、直接会えばいい」

「どうやって？」

「鬼を殺すお前の力だ。この世を支配するのは、力だ」

鬼と同じことを言っていると、桃真は思った。

「どうしろと？」

「この妖怪を殺し、天照に会つか、実力で会つか」

「どうして、お前がそんなことを？」

「帝を、信じていないからだ」

「……」

橘花の言いたいことがわからない。

どういうつもりなのだ？ なにか伝えたいことがあるのか？ なら、なぜはつきりと言わない。

桃真は、橘花の言葉と大目玉と帝に疑問を抱きながらも、鞘から抜かれた毘沙門刀は、微振動している。

大目玉の殺気に反応してるのではない。

橘花の、強烈な気配に、毘沙門刀が警戒している。

両手に持つ如意棒が少しずつ大きくなり、長く、鋼の強度と弓のような柔軟性を持つ。

「お前は信じたい。こいつは殺すな」

「なぜだ？」

「善と悪、倒されるのはどちらだ？」

「悪だ」

「目的のために罪なき善を殺すのか？」

そうか、わかった。

橘花は、鬼を殺してきたが、殺生を嫌っている。

今まで散々人を殺してきたが、橘花の目は悲しそうだった。

殺す、という行為に躊躇を見せている。

とても鬼殺しとして恐れられた猿神とは思えないほど、死に対して、殺しに対しての怖さをあらわにしている。

「……お前に、天照と会う計らいでもあるのか？」

「ない。だが、方法は他にもあるはずだ」

如意棒を収め、橘花は、大目玉に刺さった矢を抜く。

大目玉は大粒の涙を浮かべ、橘花と桃真に向けて瞬きをした。

それが挨拶だったかは分からないが、大目玉は飛び立っていく。

そのあとに、橘花はまた如意棒を伸ばし、闘気を高めた。

気配が、鬼に似た気配がした。

大目玉ではない、別の、刃を突きつけられたときと同じくらい鋭い気配は、明らかに桃真を狙っている。

毘沙門刀と餓牙刀を握り、中段で構える。

と、矢が走る音が聞こえた。

永紅の光矢が鋭く風を切り、雷鳴にも似た音を出している。
向こうで何かあった。

戻らなくてはと思ったとき、橘花が桃真の前に出て、二本の如意棒を振り、飛来する矢をはたき落した。

木々の間を縫って飛んできた矢だ、弓の使い手だとわかるが、橘花がいなかった危なかった。

「緊張しろ」

橘花が気合を入れる。

「……鬼に近い気配だ」

「西洋の鬼、“悪魔”だよ」

「あくま？」

聞いたことのない言葉に、桃真は一瞬、疑問視を上げるも、橘花がはたき落した矢を見て、ぐっと刀を握る手に力を入れた。

黒い骨で作られた、不気味な矢だった。

人が使うものではない。

「来るぞ！」

永紅の光矢、それに、伊月の神符の爆発が鳴りやまない。
心配で仕方なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1561m/>

桃太郎 絶鬼神光臨篇

2010年10月8日12時23分発行